

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.14 2002年度



The Board of Education in Oita City 2003

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol. 14 2002年度

The Board of Education in Oita City 2003

序 文

本書は、平成14年度に大分市教育委員会が実施しました埋蔵文化財発掘調査の概要を収録したものであります。

本年度の主な事業としましては、大友氏館跡を代表とします国の補助による市内重要遺跡の確認調査や下郡・横尾地区の区画整理事業などの公共事業に伴う発掘調査、さらには大分市植田新都心西部土地区画整理事業など民間の大規模開発に伴う発掘調査等々があげられ、本市の文化財保護行政にとって例年にも増して激動の一年でありました。

そのような中、日本最古の建築部材や姫島産黒曜石を収納したカゴが出土し、縄文時代の水辺の遺構と考えられる横尾遺跡や整然と配置された掘立柱建物跡と出土遺物から飛鳥時代の役所跡と推定される城原・里遺跡の発見は、全国的に注目されることとなり、実りの多い年でもありました。さらに黒曜石を収納したカゴについては、文化庁主催の全国連報展において展覧され、広く全国に情報発信できましたことは大変ありがたいことであり、関係各位に対して感謝申し上げます。

さて、平成13年度にその一部分が国史跡指定となりました大友氏館跡ですが、平成14年度にも約4,200㎡が追加指定を受け、全体の約35%が指定されたことになります。また、平成12年度から継続しておこなっています確認調査も12次調査を数え、館の前身施設とも考えられる寝殿造風の建物群の発見は、館の形成過程を捉える上での新たな知見を得ることができました。今後とも史跡の拡大と公有地化を進めるとともに、歴史を活かしたまちづくりの実現に傾注して参りたいと考えております。

最後になりましたが、本書が今後の文化財保護や歴史教育、学術研究の資料として広く活用されますようお願いするとともに、本市文化財行政に對しましても一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成16年 3月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政 博

例 言

1. 本書は、大分市域において大分市教育委員会が平成14年4月1日から平成15年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容についてまとめた年報である。
2. 平成14年度における調査地点は表2及び第3図に示している。
3. 本書の執筆は、各担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受領図書目録は、平成14年4月1日から平成15年3月31日の間に大分市教育委員会に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受領図書目録の作成は、野々下美紀・森永奈美・羽田裕子（大分市教育委員会文化財課臨時職員）、及び中西による。
6. 遺構・遺物の実測及び図版の作成等については、次に記す大分市教育委員会臨時職員の協力を得た。

芦田美保子	阿部真知子	伊賀 円香	石田ひとみ
伊東 みほ	今村 信子	内田 順子	大島 紅
小野千恵美	小山田裕子	河野 誠	川野 美和
河野 裕子	木村 藍子	工藤雄実子	黒田きくみ
後藤 好美	佐藤 香織	佐藤 志信	三宮多美子
首藤 直美	菅 真奈美	杉浦 由香	高木麻奈美
武田真知子	堤 美智代	長木恵里子	中山麻理子
橋本 幸子	飛高 裕子	平田美智子	法華津幸子
堀田 清乃	本田理恵子	松場 泉	三重野京子
南 優子	武藤由紀子	森永 美紀	矢野 幸栄
山口しのぶ	幸野 麗		

7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影したものである。
8. 本文中に掲載した調査地点位置図には、原則として大分市都市計画図（縮尺1万分の1）の該当部分を使用した。
9. 本書の編集・校正は、中西及び各調査担当者が行った。

目 次

第Ⅰ章	大分市教育委員会文化財課概要	1
1	沿革	1
2	組織	1
3	大分市文化財保護審議会	2
第Ⅱ章	平成14年度事業概要	3
1	開発事前審査事業	3
(1)	平成14(2002)年度の概要	3
2	発掘調査事業	5
3	教育普及活動	12
(1)	現地説明会	12
(2)	研修参加	12
4	海部古墳資料館	12
(1)	特別展	12
(2)	入館者数	12
第Ⅲ章	発掘調査の概要	13
I	大友氏館跡第12次調査	13
II	中世大友府内町跡第23次調査	15
III	中世大友府内町跡第24次調査	19
IV	横尾遺跡第86次調査D-35地点	21
V	横尾遺跡第87次調査D-35地点	23
VI	横尾遺跡第88次調査D-29・37地点	27
VII	豊後国分寺跡平成14年度確認調査	31
VIII	下郡遺跡群第138次調査	33
IX	下郡遺跡群第139次調査	37
X	下郡遺跡群第141次調査	39
XI	下郡遺跡群第142次調査	41
XII	横尾遺跡第84次調査C-22・23地点	43
XIII	中世大友府内町跡第17次調査	46
XIV	城原・里遺跡第5次調査	49
XV	賀来西遺跡第1次調査	53
XVI	大道遺跡群第2次調査	55
XVII	大道遺跡群第3次調査	57
XVIII	大道遺跡群第4次調査	59
XIX	南金池遺跡第4次調査	61
XX	東田室遺跡第4～10次調査	63
XII	下志村遺跡第2次調査	71
XIII	玉沢地区条里跡第3次調査	75
XIV	玉沢地区条里跡第6次調査	81
XV	古国府遺跡群・上七曾子遺跡	83
XVI	金谷迫遺跡(確認調査)	85
XVII	米竹遺跡(確認調査)	87
XVIII	府内城・城下町跡第15次調査	91
第Ⅳ章	受贈図書目録	94
1	調査報告書	94
2	定期刊行物・図録等	111

目 次

第1図	地域分布図	3
第2図	地区別事前審査割合	4
第3図	調査遺跡位置図	11
第4図	城原・里遺跡第5次調査現地説明会風景	12
第5図	大友氏館跡第12次調査現地説明会風景	12
大友氏館跡第12次調査		
第6図	調査地点位置図	13
第7図	庭園跡周辺調査区全景（上が北）	13
第8図	SE026出土と鏡実測図（1/2）	14
第9図	遺構配置図（1/300）	14
中世大友府内町跡第23次調査		
第10図	調査地点位置図	15
第11図	調査トレンチ配置図（1/2000）	15
第12図	SX052遺物出土状況（南より）	17
第13図	SX070遺物出土状況（南より）	17
第14図	第2トレンチ遺構配置図・土層図（1/150）	
	第2トレンチ西側全景（西より）	18
中世大友府内町跡第24次調査		
第15図	調査地点位置図	19
第16図	調査区全景（西より）	19
第17図	遺構全体図（1/100）・土層図（1/50）	20
横尾遺跡第86次調査		
第18図	調査地点位置図	21
第19図	調査区全景（北より）	21
第20図	86SD001土層断面状況（南より）	21
第21図	86SX023石組検出状況（北より）	22
第22図	86SD015土層断面状況（南より）	22
第23図	遺構配置図（1/200）	22
横尾遺跡第87次調査		
第24図	調査地点位置図	23
第25図	調査区北側土層断面（南西より）	23
第26図	87SX018検出状況（南より）	23
第27図	87SX019検出状況（東より）	23
第28図	遺構配置図（1/200）	24
第29図	87SX026検出状況（南より）	24
第30図	87SX012土層断面（東より）	25
第31図	87SX012遺物出土状況（北より）	25
第32図	87SX012出土遺物実測図（1/8）	25
第33図	中世堆積土層出土遺物実測図	26
横尾遺跡第88次調査		
第34図	調査地点位置図	27
第35図	88SX007全景（南より）	27
第36図	遺構配置図（1/600）	28
第37図	88SD012検出状況（西より）	29
第38図	88SD001検出状況（北より）	29
第39図	88SB010検出状況（西より）	30
第40図	88SD028・029検出状況（北より）	30
史跡豊後国分寺跡平成14年度確認調査		
第41図	調査地点位置図	31
第42図	遺構配置図（1/150）	31
第43図	遺構検出状況（西より）	32
第44図	SK001出土遺物実測図（1/3）	32

下郡遺跡群第138次調査

第45図	調査地点位置図	33
第46図	調査区全景（南より）	34
第47図	遺構配置図（1/400）	34
第48図	138SH001遺物出土状況（北より）	35
第49図	138SH240完掘時（北より）	35
第50図	下郡遺跡群 弥生～古墳時代の集落範囲推定分布図（1/10000）	36

下郡遺跡群第139次調査

第51図	調査地点位置図	37
第52図	遺構配置図（1/200）	37
第53図	調査区北半全景（南より）	38
第54図	139SD058検出状況（南より）	38

下郡遺跡群第141次調査

第55図	調査地点位置図	39
第56図	遺構配置図（1/200）	39
第57図	141SX140遺物出土状況（南より）	40
第58図	141SX113 平面図・見透断面図（1/10）・遺物実測図（1/4）	40

下郡遺跡群第142次調査

第59図	調査地点位置図	41
第60図	遺構配置図（1/200）	41
第61図	調査区西壁土層断面図（1/80）	41
第62図	出土遺物実測図（1/4）	42

横尾遺跡群第84次調査

第63図	調査地点位置図	43
第64図	B区遺構配置図（1/200）	43
第65図	B区全景（上が北）	44
第66図	SX122検出状況（西より）	44
第67図	SX122土層断面（東より）	44
第68図	出土遺物実測図（1/3）	44
第69図	A区遺構配置図（1/300）	45
第70図	B区全景（上が北）	45

中世大友府内町跡第17次調査

第71図	調査地点位置図	46
第72図	調査区全景（上が北）	46
第73図	SX025榎木体近景	46
第74図	SX025全景	46
第75図	遺構配置図（1/200）	47
第76図	石製羽口	48
第77図	碗形鉄滓	48
第78図	小刀	48
第79図	SK161全景	48

城原・里遺跡第5次調査

第80図	調査地点位置図	49
第81図	1期建物配置図（1/400）	49
第82図	2期建物S037遺物出土状況（南より）	49
第83図	遺構配置図（1/200）	50
第84図	2期建物配置図（1/400）	51
第85図	2期建物出土遺物実測図（1/3）	51
第86図	3期建物配置図（1/400）	51
第87図	3期建物出土遺物実測図（1/3）	51
第88図	SH118住居跡遺構実測図（1/40）	52
第89図	SH118住居跡出土遺物実測図（1/3）	52
第90図	A区全景（上が北）	52

賀来西遺跡第1次調査	
第91図	調査地点位置図 53
第92図	調査トレンチ位置図 (1/600) 53
第93図	遺構配置図 (1/150) 54
大道遺跡群第2次調査	
第94図	調査地点位置図 55
第95図	調査区全景 (上が東) 55
第96図	SD015円鏝出土状況 (東より) 55
第97図	遺構配置図 (1/200) 56
第98図	周辺調査区位置図 (1/1600) 56
大道遺跡群第3次調査	
第99図	調査地点位置図 57
第100図	遺構配置図 (1/300) 57
第101図	G区完掘状況 (西より) 58
第102図	G区東壁土層堆積状況 (西より) 58
第103図	出土遺物実測図 (1/3) 58
大道遺跡群第4次調査	
第104図	調査地点位置図 59
第105図	調査区全景 59
第106図	緑釉陶器出土状況 (南西より) 59
第107図	遺構配置図 (1/400) 60
第108図	出土遺物実測図 1～4 (1/3)/5 (1/2) 60
南金池遺跡第4次調査	
第109図	調査地点位置図 61
第110図	遺構配置図 (1/300)・B区調査区全景 (上が北) 61
第111図	SE007平面図・土層断面図 (1/40) 62
第112図	出土遺物実測図 1～3 (1/4)/4・5 (1/3) 62
東田室遺跡第4～10次調査	
第113図	調査地点位置図 63
第114図	4SB040検出状況 63
第115図	遺構配置図 (1/400) 64
第116図	4SK030遺物出土状況 65
第117図	5SD066完掘状況詳細 66
第118図	6SB020検出状況 67
第119図	第7次調査区全景 68
第120図	7SX050高杯出土状況 68
第121図	第8次調査区全景 69
第122図	東田室遺跡遠景 (別府湾を望む) 70
下志村遺跡第2次調査	
第123図	調査地点位置図 71
第124図	調査区配置図 (1/2400) 71
第125図	A区遺構配置図 (1/300) 72
第126図	SX140遺物出土状況 73
第127図	SX140瓦質土器鍋取り上げ後遺物出土状況 73
第128図	B区遺構配置図 (1/400) 74
玉沢地区条里跡第3次調査	
第129図	調査地点位置図 75
第130図	4区調査区全景 (上が北) 75
第131図	第3次調査調査区配置図 (1/2500) 76
第132図	4区水田 (S220) 遺構配置図 (1/800) 77
第133図	3区 (S082包含層) 遺構配置図 (1/200) 78
第134図	7区水田 8 (SX417) 遺構配置図 (1/200) 79
第135図	4区水路 (SD300) 平面図 (1/80) 80

第136図	SD300出土状況	80
第137図	4区遺構配置図 (1/800)	80
王沢地区条里跡第6次調査		
第138図	調査地点位置図	81
第139図	遺構配置図 (1/200)	82
古国府遺跡群・上七曾子遺跡		
第140図	調査地点位置図	83
第141図	調査区空中写真	84
第142図	調査区全景	84
第143図	SD02 (弥生時代)	84
第144図	SD04と道路状遺構	84
第145図	SD02出土遺物	84
全谷迫遺跡 (確認調査)		
第146図	調査地点位置図	85
第147図	試掘トレンチ・調査区配置図 (1/2500)	85
第148図	出土遺物実測図 (上段1/2、下段3/4)	86
第149図	第1号炭焼窯平・断面図 (1/20)	86
米竹遺跡 (確認調査)		
第150図	調査地点位置図	87
第151図	調査区全景 (西より)	87
第152図	SH010・040完掘状況 (北より)	87
第153図	遺構配置図 (1/160)	88
第154図	SH040遺構実測図 (1/60)	89
第155図	主要土坑土層図 (1/60)	90
第156図	出土遺物実測図 (1/4)	90
府内城・城下町跡第15次調査		
第157図	調査地点位置図	91
第158図	調査区全景 (北より)	91
第159図	遺構配置図 (1/100)	92
第160図	S001出土遺物実測図 (1/4)	93
第161図	S001出土遺物実測図 (1/3)	93
第162図	S050遺物出土状況	93
第163図	S001・S002完掘状況 (西より)	93
第164図	S050出土遺物実測図 (1/3)	93

第Ⅰ章 大分市教育委員会文化財課概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組
平成10年4月1日	大分市教育委員会生涯学習課文化財室に改組
平成12年4月1日	大分市教育委員会文化財課に改組
平成13年4月1日	大分市教育委員会教育総務部文化財課に改組

2. 組織

課長	帯刀修一	参事兼館長	木村幾多郎
参事	玉永光洋	副館長	佐藤友則
課長補佐兼管理係長	熊谷一秋	課長補佐兼副館長	佐藤孝子
管理係長	久多羅岐明(平成15年度～)	主査	太田孝洋(平成15年度～)
課長補佐兼文化財係長	讀岐和夫	主査	太田道代(平成15年度～)
管理係	主査平野勝敏(平成15年度～)	指導主事	藤岡沢敏夫
指導主事	姫野公徳	指導主事	藤甲富雅宣(主査)
主任	幸桑原治	主任	武宮崎幹夫
主任	安部一成(平成15年度～)	主任	安部光来
主事	浦重紀	主任	安部光来
文化財係	指導主事	研修教諭	植木和治
専門員	塔鼻光司	研修教諭	植木和治
主任技師	坪根伸也	嘱託	廣田一昭
主任技師	池邊千太郎	嘱託	廣田一昭
主任技師	塩地一豊	嘱託	廣田一昭
技師	高田史郎		
技師	河野尚大		
主事	永松正道(主事)		
事務員	佐藤雄也(平成15年度～)		
事務員	五十川義貴		
嘱託	奥村幸二		
嘱託	荻藤孝則		
嘱託	羽田野達郎		
嘱託	宮田剛之		
嘱託	羽田野裕之		
嘱託	上野住也		
嘱託	小松武史		
嘱託	松尾聡		
嘱託	松谷智史		
嘱託	松谷智史		
嘱託	水谷裕子		
嘱託	梅田昭宏		
嘱託	井口あけみ		
		嘱託	佐藤曉子
		嘱託	勝間田あや
		嘱託	岩尾美保子
		嘱託	梅本信宏
		嘱託	吉本明弘(平成15年度～)
		嘱託	江上正高(平成15年度～)
		嘱託	江上泰さとみ(平成15年度～)
		嘱託	大野瑞恵(平成15年度～)
		嘱託	小橋寛之(平成15年度～)
		嘱託	小橋亮介(平成15年度～)

※ () 内は平成15年度

大分市教育委員会事務局組織規則（抜粋）

文化財課

- (1) 文化財の調査、保存及び整備に関すること。
- (2) 文化財保護思想の普及啓発に関すること。
- (3) 文化財保護審議会に関すること。
- (4) 歴史資料館、海部古墳資料館、毛利空桑記念館、池見家住宅その他文化財施設の管理に関すること。

3. 大分市文化財保護審議会

大分市文化財保護審議会委員（平成14年4月1日現在）

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
会 長	佐 藤 真 一	元青揚町小学校長	動 植 物
副 会 長	豊 田 寛 三	大分大学・教授	近 世
	北 野 隆	熊本大学・教授	建 造 物
	橋 本 操 六	別府大学・教授	考古埋蔵
	西別府 元 日	大分大学非常勤講師・前県総務課参事	中 世
	宗 像 健 一	広島大学文学部・助教授	古 代
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・学芸第一課長	美 術
	小 泊 立 矢	大分県立芸術会館・主幹学芸員	工 芸
	吉 田 稔	前大分県立先哲史料館副館長	民 俗
		元王子中学校校長	生 物

大分市文化財保護審議会条例（平成11年12月15日条例第42号）

- (設 置)
- 第1条 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第105条第1項の規定に基づき、大分市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に大分市文化財保護審議会（以下「審議会」という。）を置く。
- (組 織)
- 第2条 審議会は、委員10人以内をもつて組織し、学識経験者のうちから教育委員会が委嘱する。
- (任 期)
- 第3条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 2 委員は、再任を妨げない。
- (会長及び副会長)
- 第4条 審議会に会長及び副会長1人を置き、委員の互選により選出する。
- 2 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。
- (会 議)
- 第5条 審議会の会議（以下「会議」という。）は、会長が招集し、会長がその議長となる。
- 2 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開くことができない。
- 3 会議の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 4 会長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。
- (部 会)
- 第6条 審議会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。
- (庶 務)
- 第7条 審議会の庶務は、教育委員会事務局において処理する。
- (委 任)
- 第8条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

附 則

(施行期日)

- 1 この条例は、平成12年4月1日から施行する。
（大分市文化財調査委員会条例の廃止）
- 2 大分市文化財調査委員会条例（昭和51年大分市条例第4号）は、廃止する。

第Ⅱ章 平成14年度事業概要

1. 開発事前審査事業

(1) 平成14(2002)年度の概要

表1は平成14年度における開発申請内容を示したものである。

平成14年度の申請総面積は4,988,317.37㎡、総申請件数111件を数える。

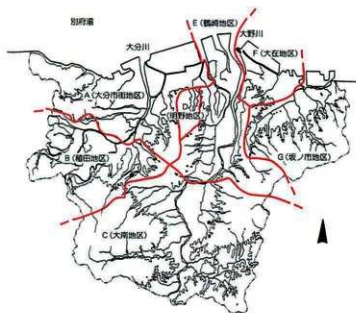
その内訳は、開発計画事前審査申請6件、開発行為事前協議申請57件、開発行為変更事前協議申請3件、宅地造成工事前協議申請13件、墓地経営関係7件、土地売買等の届出13件、土地区画整理事業事前協議申請4件、鉱業権の出願に関する協議2件、森林法による開発行為の許可2件、納骨堂経営許可に関する事前審査願い3件、土地区画整理事業の施行に関する事前審査願い1件である。また、本年度は開発行為事前審査申請、大規模土地取引事前指導申請については昨年度に引き続き申請件数が0件であった。

これを平成13年度の申請内容と比較すると、総件数では約20%の増加がみられる。これは開発に直接結びつく開発計画事前審査、開発行為事前協議が増加したことが主な原因と考えられる。

次に、数年来減少傾向にあった申請面積は、昨年、砕石法や鉱業権関連の申請により一時的に増加したが、本年度はさらに増加となった。昨年、鉱業権関連の申請があった坂ノ市地区は約127倍に増加しており、植田地区は約40倍、鶴崎地区は6倍、明野・大分地区も3倍と軒並み増加している。これは組合施行の区画整理事業や砕石法や鉱業権関連の申請が昨年以上に行われたためであり、鶴崎地区については、土地売買等の届出の増加が主な原因であるがこれらは一過性のものと考えられる。

申請エリアに関しては、昨人大分市街地区(A)が全体の8割近くを占め、他地区ではほぼ平均化されていたが、本年度は坂ノ市地区(G)に7割が集中している。これは鉱業権関連の申請が行われたためであり、特に実質的な開発申請である開発事前協議等は大大市街地区に集中しており、これは今後の発掘調査件数の増加の要因になると考えられる。

本年の特徴としては、前述のとおり申請面積が激増したことがあげられる。前年比で約4倍に増加している。ただし、これは昨年以上に砕石法関連で広大な面積が申請されたためであり、来年度以降増加傾向がこのような状況をみせるとは考えられない。また、開発行為事前協議等の届出件数は増加しているが、面積は減少しており、小規模の開発が今後どう推移していくか注目したい。(塔鼻)

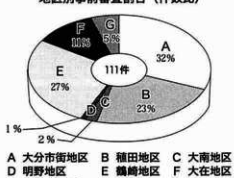


第1図 地域区分図

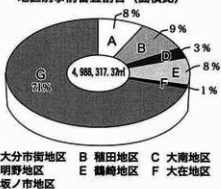
表1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市街地区	B-稲田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴崎地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【開発計画事前審査申請】								
件数	2	2	0	0	1	1	0	6
面積 (㎡)	94,401.72	16274.97	0.00	0.00	5,036.30	9631.65	0	125,344.64
【開発行為事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【開発行為事前協議申請】								
件数	16	11	1	0	19	7	3	57
面積 (㎡)	78,929.08	10,721.75	247.75	0.00	31,817.47	11,090.97	12,664.89	145,471.91
【開発行為変更事前協議申請】								
件数	0	1	1	0	1	0	0	3
面積 (㎡)	0.00	1,091.51	3,458.69	0.00	5,688.86	0.00	0.00	10,439.06
【大規模土地取引事前指導申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【宅地造成工事事前協議申請】								
件数	6	3	0	0	4	0	0	13
面積 (㎡)	1,667.01	1,492.84	0.00	0.00	3,030.61	0.00	0.00	6,190.46
【土地売買等の届出】								
件数	6	3	0	0	3	1	0	13
面積 (㎡)	24,356.58	74,499.35	0.00	0.00	27,347.64	5,419.19	0.00	132,224.76
【建築許可審査に関する事前協議等】								
件数	2	2	0	0	0	2	1	7
面積 (㎡)	11,716.00	9,005.08	0.00	0.00	0.00	11,868.91	1,345.00	33,934.99
【土地区画整理事業事前協議申請】								
件数	1	1	0	0	1	1	0	4
面積 (㎡)	170,886.09	129,000.00	0.00	0.00	702.00	190.00	0.00	300,758.09
【建築物の出願に関する協議】								
件数	0	0	0	0	0	0	2	2
面積 (㎡)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3,526,162.00	3,526,162.00
【森林法第10条の2第1項による開発行為の許可】								
件数	0	1	0	0	1	0	0	2
面積 (㎡)	0.00	225,700.00	0.00	0	348,790	0	0	574,490.00
【飲食店経営許可に関する事前審査依頼】								
件数	2	1	0	0	0	0	0	3
面積 (㎡)	235.46	96.00	0.00	0	0	0	0	331.46
【土地区画整理事業の施行に関する事前審査依頼】								
件数	0	0	0	1	0	0	0	1
面積 (㎡)	0.00	0.00	0.00	133,000.00	0.00	0	0	133,000.00
【総合計】								
件数	35	25	2	1	30	12	6	111
件数比	32%	23%	2%	1%	27%	11%	5%	100%
面積 (㎡)	382,773.94	467,481.30	3,706.44	133,000.00	422,182.88	38,200.72	3,540,171.89	4,988,317.37
面積比	8%	9%	0%	3%	8%	1%	71%	100%

地区別事前審査割合 (件数比)



地区別事前審査割合 (面積比)



第2図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

本年度市内で実施された発掘調査件数は78件である。その内訳は試掘確認調査が48件、立会調査4件、本格調査26件を数える。内訳は表2・3に示している。

このうち試掘確認調査について概観する。

48件の調査件数の中で遺跡の存在が確認されたものは全体の約68%に及び、設計変更による盛土保存により本格調査に移行しなかったものを除くと、本格調査へ移行したものは総調査件数の約16%である。

以下において本年度(平成14年度)の発掘調査の成果を概観する。

旧石器・縄文

今年度の発掘調査では、旧石器時代の本格的な調査は実施されていない。一方、縄文時代においては、主に横尾遺跡と大分県教育委員会が行った大字河原内字黒岩所在の黒岩遺跡で本格的調査が行われた。

横尾遺跡87次D-35地点は、縄文時代早期中葉から後葉の堆積層、前期前葉の貝・獣骨層、後期前葉の配石遺構及び地床炉跡が確認された。特に前期前葉の貝・獣骨層が確認されたことは、周知されている横尾貝塚とはほぼ同時期であり、周辺に生業関連施設跡の存在が示唆される。同遺跡88次D-29・37地点では、押型文土器が確認されているが、当該時期の遺構は検出されていない。

黒岩遺跡は、大野川の支流である河原内川をその合流地点から西に10kmほど細谷を越えた当市と大野町の境、標高300m弱の地点に所在する。縄文時代早期前葉～中葉の遺跡で、アカホヤ火山灰堆積が良好に残存し、それより下層においても層序が明確で、条痕文土器・無文土器・押型文土器など土器の変遷も良好に伺える。また、遺構も集石遺構が9基ほど検出され、内1基は方形に囲うものが確認されている。石器類は石皿、磨石、剥片石器、礫器、腰岳産黒曜石などが確認され、鉾島産黒曜石は1点も確認されていない。

その他の遺跡では、古国府遺跡群・上七曾子遺跡で縄文後期の土器・石器が確認されている。また、金谷追遺跡からは、縄文時代早期の無文土器などが確認された。ただ、当遺跡において同時期の鉾島産黒曜石は確認されておらず、黒岩遺跡同様に縄文時代早期において、これ以後の時期と石材の産地に違いがみられることは注目される。

近年、横尾遺跡など大野川下流域での調査が盛んに行われ、成果が得られているところであるが、黒岩遺跡など山間部における細谷などで調査成果が得られたことも重要であり、今後、大分平野及び山間部での縄文時代における遺構・遺物の時期別による展開や様相の解明が期待されることである。(五十川)

弥生時代

下郡遺跡群第138・142次調査、玉沢地区条里跡第6次調査、古国府遺跡群・上七曾子遺跡、東田室遺跡第4・5・8次調査、米竹遺跡で確認されている。特に、上七曾子遺跡では弥生時代前期前葉～中葉に比定される土器廃棄遺構が見つかった。出土遺物には夜臼系の壺、刻目尖帯文土器などが含まれており、当該期の資料は大大市内でも数少ないことから貴重な成果といえよう。また、この上七曾子遺跡から北へ約2km離れた東田室遺跡からは、弥生時代前期末～中期初葉の遺構・遺物が検出されている。東田室遺跡は大分平野の西部を流れる見沙門川の右岸に位置し、大分市の北に広がる別府湾にも近接していることから永上交通の要所として発展してきた遺跡と考えられる。この状況を裏付けるものとして、東田室遺跡第5次調査からは、瀬戸内系の影響を受けたと思われる口縁下瘤凸状壺が比較的良好な状態で出土している。この資料は、弥生時代中期段階に東九州で爆発的な展開をみせる下城式土器と一緒に見つかり、下城式土器の成立及びその形成時期についてアプローチしていく材料となり得よう。

米竹遺跡では、弥生時代中期の貯蔵穴群が検出されている。そのうち、SK005・015・025からは炭化米が出土し、SK015からは、炭化米のみでなくキビ・アワなども炭化した状態で確認されている。遺物中には炭化木材が認められることから火災等の外的な要因によって炭化したものと思われる。

玉沢地区条里跡第3次調査では、弥生時代中期に比定される自然流路を一部利用した形で矢板列が検出されている。この矢板列は自然流路中に構築されており、周囲に想定されるであろう水田遺構に伴う灌漑施設になるものと考えられる。また、この自然流路には大量の砂が堆積しており、多数のラミナ層が看取されることから、弥生時代中期の段階に相当量の水が流れていたものと考えられる。同時に流路の堰土から発見された多数の流木は上流から運ばれたものと推測される。玉沢地区条里跡第6次調査では、弥生時代後期の溝状遺構及び水田遺構が検出されている。これらの状況から玉沢地区では弥生時代に、ある程度の生産基盤を支える地理的立地条件があったと考えられ、大分平野における稲作の起源を辿る重要な遺跡になることが窺える。

古墳時代

下郡遺跡群第138次調査、東田室遺跡第4～8次調査、米竹遺跡、玉沢地区条里跡第3次調査で確認されている。

東田室遺跡からは古墳時代前期の集落及び後期の遺構が少数であるが見つかっている。遺跡内での集落の展開状況を見ると、前期の段階では第4～8次調査区へと偏りなく広がっているが、古墳時代後期の段階（6世紀中頃以降）になると、堅穴住居跡は急激に減少し、1軒程度に留まっている。出土遺物では高坏の口縁端部を打ち欠くものが少量であるが認められ、人為的行為によることから何らかの祭祀行為に伴うものであることが推測される。また、導入期の布留式土器が多数出土しており、下郡遺跡群やその他大分平野で見つかっているものと比較検討を行うことが必要と考えられる。

玉沢地区条里跡第3次調査からは、4世紀中頃に比定される焼失住居跡及び水田遺構が検出されている。また、4世紀後半より古い段階に位置付けられる幅約5mを測る大畦畔の下位で、50cm×70cmの切石が出土している。この切石は大畦畔の交差する地点で確認され、水田造成の際の目印的役割があったと考えられている。今回の調査では、集落と生産遺構が同時に看取されるという極めて貴重な発見があり、当時の集落の様子を復元できる好材料になるものと思われる。

米竹遺跡からは、古墳時代初頭に比定される堅穴住居跡が2軒確認されている。近年、鶴崎台地上での発掘調査は横尾地区を中心に行われ、その周辺では開発の減少から調査事例が少なくなっていた。この米竹遺跡の調査は、鶴崎台地上での遺跡の広がりを窺い知る貴重な調査といえる。

大道遺跡群第4次調査では、古墳時代初頭の井戸跡が見つかっている。また、遺構には帰属しないものであるが、方格規矩鏡片が出土している。

古代

大道遺跡群第4次調査、南金池遺跡第4次調査、城原・里遺跡第5次調査、古国府遺跡群・上七曾子遺跡、東田室遺跡第4・6・7次調査、史跡豊後国分寺跡確認調査、横尾遺跡第84次調査で確認されている。

大道遺跡群第4次調査では、幅約7mの大規模な溝状遺構から緑釉陶器、灰釉陶器、都城系土器高坏などが出土している。これらの遺物から官衙の様相を窺い知ることができ、今後、遺跡の立地及び環境について検討する必要がある。南金池遺跡第4次調査からは9世紀前半の土坑が見つかっている。これまでに調査が行われた第2・3次調査では大量の製塩土器が出土していたが、今次調査では少数の出土に留まっている。近年、駅南の再開発に伴い大道一金池地区の発掘調査の事例が増加しているが、この地域からは通常の集落とはやや異なる様相を呈す遺跡が多数見つかっている。豊後国府の中枢施設については、未だ発見されていない状況にあり、このような周辺エリアから辿ることも発見の契機となるのではと考えられる。

城原・里遺跡第5次調査では、7世紀前半～中頃の堅穴住居跡6棟、7世紀中頃～末段階の掘立柱建物跡9棟が確認されている。今回検出された建物群は、海部郡衙の前身である評衙の段階の主体部となる可能性があり、遺跡の性格、時期、規模やその他取扱いについて慎重な検討が必要である。

古国府遺跡群・上七曾子遺跡は推定官道付近に立地しており、調査により官道跡の発見に期待が寄せられた。調査では、この推定官道の一部と思われる道路状遺構が検出された。中世の遺構により削平されていたが、道路

の基底部が確認され、さらに、現道下に広がる可能性が指摘されている。

玉沢地区桑里跡第3次調査では、10世紀後半に比定される溝状遺構から灰軸陶器が出土している。玉沢地区は、植田庄の中心であり、平安末期は摂関家領として成立し、その後皇室御領となる。今回の調査の成果は、桑里制の施行から発展し、中世荘園化への変化を示す重要な位置付けになるものと考えられる。

横尾遺跡第84次調査からは、集石遺構、溝状遺構、櫛列跡等が確認されている。集石遺構に関しては、道路状遺構の可能性が考えられ、周辺で調査されている道路状遺構との関係について検討を要する。

史跡皇後園分寺跡では、推定回廊跡の南側に並行する溝跡の延長部分が検出された。時期は、埋没土の中から9世紀代の土師器坏が出土しており、この段階以前に造られたものと考えられる。

東田室遺跡第4・7次調査からは、掘立柱建物跡、廃棄土坑、溝状遺構が確認されている。掘立柱建物跡はやや不規則な状況ではあるが、ある程度の規格性は有していたものと思われる。第7次調査で見つかった廃棄土坑からは、防長系の緑軸陶器碗・皿、黒色土器碗A類、土師器坏d、企救型甕、都城系土師器、また、第8次調査区からは、灰軸陶器が出土している。第4次調査で検出された溝状遺構は、ほぼ真北に近い形で延びており、県教委が調査し、確認されているものに繋がると思われる。遺跡は水上交通に適した地点に立地していることから、いわゆる「津」的な性格を有する遺構である可能性が考えられる。

平成14年度は、主に市域の中部から西部エリアで古代の遺跡の発見が多くみられた。大分市の西部地区での発掘調査事例は数少ないことから、東田室遺跡で見つかった資料は、重要な情報をもたらすものである。また、国府推定地である上野台地に近接する南金池遺跡では、大量の製塩土器が出土していることから、製塩を産業とする専門集落の可能性が指摘される。近年、古代に属する貴重な遺跡も確認されてきており、十分な検討を加えながら調査を行っていく必要があると考えられる。

(佐藤)

中世

この時期については、今年度の調査においても中世大友城下町跡の調査が中心となっている。この他に当該期の調査としては、下郡遺跡群第138次調査、横尾遺跡第84次調査、玉沢桑里跡第3次調査などがあげられる。

中世大友城下町跡の調査では、大友氏館跡内の調査において第12次調査が、町屋部分に相当する中世大友府内町跡では、第17・18・20～24次の7地点の調査が実施された。

大友氏館跡第12次調査は、館推定範囲の東南地区―第1次調査で庭園跡が確認されたすぐ北側の調査にあたる。庭園跡の北東部分を遮蔽するような東西方向に延びる樹木痕や庭園跡の北側に曲線を描いて延びる溝状遺構など庭園跡機能時の状況を示唆する遺構群が確認されている。また、大友氏館が方2町規模に拡張される以前の整然とした建物群の確認。さらに庭園跡機能停止後に各遺構群の性格の変化や出土遺物の組成変化などから、当地区の土地利用の変化を窺い知ることができ、大友氏館跡の成立や衰退に関わる重要な所見が得られている。

一方、中世府内町跡の調査は、推定大友氏館跡の東側―通称「一之大路・二之大路」¹⁴周辺の調査が中心となっている。推定「一之大路」の東側―推定「横町・清忠寺町」に位置する中世大友府内町跡第17次調査（以下、大友17次調査）では、推定どおりの位置に南北道路跡が確認され、さらに直交する形で東に延びる東西道路跡を確認している。また、専用の空間をもったと考えられる鍛冶関連遺構群が確認され、その各遺構の性格や出土遺物などから鍛冶職人の都市への定住が指摘されている。

大友18・20～22次調査は、大分県教育委員会により実施されている国道10号線古国府拉幅事業に伴う発掘調査である。調査は推定「二之大路」及びその東側を延々と約300mにわたり、数ヶ所に分けて実施されている。大友18・22次調査は、推定大友氏館跡の東側に位置し、推定どおりに「二之大路」に比定される南北道路跡が検出されている。また、町の地割りを示すと考えられる南北道路跡に直交する柱穴列が確認でき、中世府内町の町割りなどの復元に大きな所見を与えている。大友21次調査は、推定御内町に比定される地点の調査にあたる。調査では、「二之大路」の東沿いの町屋の裏手と位置付けられるような井戸跡・廃棄土坑などの遺構群が確認されて

いる。この調査においてもっとも注目される事項として、メダイの出土があげられる。このメダイの成分分析をおこなった結果、これまで茄子型分銅とされていたものと類似する主成分であることが判明し、茄子型分銅とされていたものが府内で製作されたメダイである可能性が高くなったことが指摘されている。大友20次調査は、徳治元年(1306)創建と伝えられる推定万寿寺跡の北西隅に位置し、14世紀後半頃の北西隅の区画と想定されるし字状の溝跡が確認されている。また、16世紀後半段階では、さらに北側で万寿寺跡の北辺を限ると考えられる東西方向の溝跡が確認されるなど、推定万寿寺跡の各時期における寺域を想定する貴重な所見が得られている。

また、推定万寿寺跡中心部とされる地区の遺構遺存状況の確認を目的とした大友23次調査では、予想以上に遺構の遺存状況が良好であることが確認されている。また、確認された遺構には、大規模な掘り込み地盤を伴う積土遺構が確認されており、万寿寺の伽藍に関わる重要な所見が得られている。推定塔跡地区の確認調査一大友24次調査では、16世紀代の南北方向の溝状遺構が確認されているが、直接塔跡に関わると考えられる遺構の確認はできず、今次調査地点よりさらに南に塔跡が推定されよう。

上記のように今年度も中世大友城下町跡の調査では相次いで新たな所見が得られているが、他地区の遺跡においても重要な調査成果が得られている。中世大友城下町跡の対岸にあたる下郡遺跡群第138次調査付近は、旧字名を柳屋敷と称し、戦国期の方形館跡の所在地として比定されている地区である。調査の結果、戦国期に比定される東西方向の溝状遺構が多数検出されており、何らかの区画をもった空間が想定されよう。ここより北側の調査地では、一町規模の連立する方形館跡が想定されており、それらとの関連も注目されることである。

下郡遺跡群からさらに東一鶴崎丘陵に所在する横尾遺跡では、第84次調査において、戦国期の二条の溝状遺構や横跡で区画された中に、規則性をもって掘立柱建物跡が数棟確認されている。これより南側の第79次調査区ほかにおいては、半町規模の方形館跡の存在が指摘されており、先の区画をもつ建物群との関連性が注目されることである。また、鶴崎丘陵一帯には、猪野中原遺跡をはじめとし、半町規模の方形館跡が連立して存在しており、先述の下郡遺跡群における一町規模の方形館跡の存在と合わせて、府内町より東に規模を縮小しながら存在する方形館の位置付けについては、すでに指摘されているように大友家臣の居住区としての存在が想定されている。

鶴崎丘陵のさらに東側、大野川河口の東岸に位置する下志村遺跡第2次調査では、中世の全般にわたって遺構・遺物が確認されている。多数の井戸跡や1,000基を超える柱穴群などから、中世の集落遺跡としての評価がなされ、従来の弥生・古墳時代の遺跡としての位置付けに新たな評価を与えている。

以上、今年度においては中世大友城下町跡の調査だけでなく、それよりも以東の地域での大きな調査成果が得られたと言えよう。(中西)

近世

今年度の近世の調査では、近世城下町の堀川に所在する府内城・城下町跡第15次調査に集約される。これ以外の調査事例は、前年度同様に下郡遺跡群等でおこなわれているが、その主体は中世以前の遺構が中心であった。

府内城・城下町跡第15次調査は、平成12年以来2年ぶりの府内城・城下町跡での調査となった。調査では城下町形成段階において、当地においても整地地盤によって整備されていることが判明した。この場所が本格的に機能し始めるのは、検出された遺構から18世紀になってからと見られる。調査では享保十三年(1728)の紀年銘の入った硯が火災処理土坑から出土しており、文献と照らし合わせると享保十九年(1734)に堀川町での大火の災害記録と符号することが判明した。この他の出土遺物には、水指や香炉、中国産などの陶磁器が多数含まれていることから、武士階級の屋敷とも考えられる。また、調査区からは絵図に見られる堀川町筋の道路跡も確認しており、城下町における堀川町の状況を復元する上で貴重な資料を得たといえよう。(池邊)

(注1) 中世大友城下町跡を構成する推定4本の南北道路について、東側から「一之大路」「二之大路」「三之大路」「四之大路」と仮称しておく。

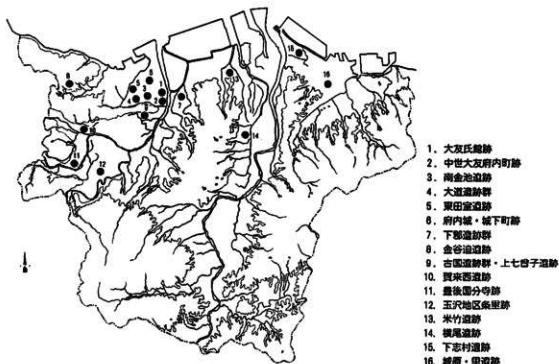
表2 大分市平成14年度発掘調査地一覧

調査地点	種 別	事 業 内 容	道 路 名	調 査 地	調査担当	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
02001	国家補助事業	市内道跡確認調査	大友氏館跡第12次調査	大分市瀬穂町	中西 武典 岩尾茂保子	550	020514～030127
02002			中世大友府内町跡第23次調査	大分市大分	坪根 伸也 史雄	1,623	020827～021234
			中世大友府内町跡第24次調査	大分市大分	中西 武典 岩尾茂保子	57	021120～030114
02014			横尾道跡第86次調査	大分市横尾	塩地 潤一 奥村 義貴 小住 武史 羽田野裕之	205	020911～030331
			横尾道跡第87次調査	大分市横尾	塩地 潤一 奥村 義貴 小住 武史 羽田野裕之	228	021112～030331
			横尾道跡第88次調査	大分市横尾	塩地 潤一 小住 武史 羽田野裕之	2,856	020212～030331
02011			豊後14分寺跡	大分市国分	中西 武典 岩尾茂保子	120	020724～021028
02007	公共事業	下郷土地区画整理事業	下郷道跡群第138次調査	大分市下郷	坪根 伸也 史雄	2,238	020208～020731
			下郷道跡群第139次調査	大分市下郷	坪根 伸也 史雄	305	020628～020808
			下郷道跡群第141次調査	大分市下郷	坪根 伸也 史雄	210	020826～021224
			下郷道跡群第142次調査	大分市下郷	坪根 伸也 史雄	100	021112～021115
02014	公共事業	横尾土地区画整理事業	横尾道跡第84次調査	大分市横尾	塩地 潤一	783	010611～020715
02002	公共事業	下水道施設建設事業	中世大友府内町跡第17次調査	大分市下井東	河野 史郎 上野 淳也	497	020507～021110
02016	公共事業	市道建設事業	城原・星道跡群第5次調査	大分市里	池邊千太郎 松竹 智之	1,617	020513～020930
02010	公共事業	賀来西土地区画整理事業	賀来西道跡第1次調査	大分市賀来	塔鼻 光司 萩 幸二 松尾 聡	160	021001～021031
02004	公共事業	駅周辺総合整備事業	大道道跡群第2次調査	大分市金池	後藤 典幸	432	020417～020627
			大道道跡群第3次調査	大分市樺ヶ丘	後藤 典幸 高品 豊	694	020831～021212
			大道道跡群第4次調査	大分市金池南	高品 豊	1,225	030106～030326
02003			南金池道跡第4次調査	大分市瀬穂町	後藤 典幸 梅田 昭宏	216	020710～020831
02015	公共事業	学校建設	F志村道跡第2次調査	大分市角子町	後藤 典幸 萩 幸二 上野 淳也 水町 裕子	3,450	021107～030530
02005	公共事業	都市整備事業	東田京道跡第5～10次調査	大分市田室町	佐藤 道文	838	020720～030327
02005	民間開発	宅地造成	東田京道跡第4次調査	大分市田室町	佐藤 道文	260	020507～020709
02012	民間開発	区画整理事業	玉沢地区糸里跡第3次調査	大分市木上	永松 正太 佐藤 孝樹	6,500	020417～030327
02012	民間開発	病院建設	玉沢地区糸里跡第6次調査	大分市玉沢	高品 豊 萩 幸二	496	020806～020920
02009	民間開発	共同住宅建設	吉田府道跡群・上七曾子道跡	大分市羽根	鎌岐 和夫	951	020805～021021
02006	民間開発	店舗建設	府内城・城下町跡第15次調査	大分市郡町	池邊千太郎 羽田野裕郎	216	021007～030320

表3 大分市平成14年度試掘調査地一覧

番号	種別	遺跡名	住所	調査面積 (㎡)	調査期間	開発原因
1	確認(公共)	南金池遺跡	顕徳町1丁目2824-1, 11, 12	45.00	020417	駅周辺総合整備事業
2	確認(公共)	南金池遺跡	顕徳町1丁目2759-5	16.00	020422	駅周辺総合整備事業
3	確認(民間)	門前遺跡	大字松岡字髪野地5489-5, 7	14.00	020424	個人住宅建設
4	確認(民間)	若宮八幡宮遺跡	上野町10番29号(若宮八幡宮)	22.00	020425	神社建て替え
5	確認(民間)	中世大友城下町跡	顕徳町2丁目3053-1	15.00	020411-020507	共同住宅建設
6	確認(民間)	中世大友城下町跡	大字大分字上井東4293番地 ほか10筆	—	020517	倉庫建設
7	確認(民間)	羽田遺跡	大字羽田652-1	19.00	020520	共同住宅建設
8	確認(民間)	津守遺跡	大字津守303-1	17.00	020522	共同住宅建設
9	確認(民間)	玉沢地区条里跡	大字市字石橋51-1 52-1, 53-1, 54-1	116.00	020513-020514	消防署移転用地造成
10	確認(民間)	東田室遺跡	新町1-2	12.00	020529	共同住宅建設
11	確認(民間)	古国府遺跡群	大字羽田字上七曹司117番 178番1, 178番2	340.00	020603-020607	共同住宅建設
12	確認(民間)	大在政所遺跡	大在中央1丁目267番	10.00	020611	病院兼共同住宅
13	確認(公共)	下群遺跡群	大字下群字下屋敷2271-2番地	25.00	020614	宅地整地工事
14	確認(公共)	—	大字賀来字井ノ口	—	020423-020614	土地区画整理事業
15	確認(公共)	下郡遺跡群	大字下郡字五反田144-1番地	21.00	020614	宅地整地工事
16	確認(公共)	真賀遺跡	大字松岡字マカヤ下8290番3	28.00	020626	公民館建設
17	確認(公共)	下志村遺跡	角子原1丁目4番 (大在歩目的広場)	705.00	020710-020712	学校建設(グラウンド)
18	確認(公共)	—	桜ヶ丘1150-5	9.00	020723	駅周辺総合整備事業
19	確認(公共)	—	東大道2丁目2413-38	83.00	020725	駅周辺総合整備事業
20	確認(公共)	—	東大道2丁目2414-4, 2413-30	120.00	020723-020725	駅周辺総合整備事業
21	確認(公共)	東田室遺跡	田室町9番(田室町春日線)	28.00	020719	道路建設
22	確認(公共)	下郡遺跡群	大字下郡字上サ2159-4 (D-17-ル)	5.00	020805	浄化槽設置
23	確認(民間)	古国府遺跡群	大字羽田172-2	117.00	020806	店舗兼倉庫建設
24	確認(民間)	若宮八幡宮遺跡	六坊南町4511番4	13.00	020808	共同住宅
25	確認(公共)	—	上野町4番5号	96.00	020820-020821	学校建設
26	確認(公共)	玉沢条里跡	大字玉沢字楠本743番地の2	217.00	020902-020924	
27	確認(民間)	下郡遺跡群	大字下郡字茶エン2044番地区 区画整理地区(D-3, 水)	10.00	020910	店舗建設
28	確認(公共)	中世大友城下町跡	顕徳町2丁目3044-12-17	5.80	020912	道路建設
29	確認(民間)	羽田遺跡	大字羽田字狭間958番-1	24.00	020920	共同住宅
30	確認(公共)	金谷迫山城遺跡	大字金谷迫字外ノ地 190番地外5筆	35.00	020924-020925	道路建設
31	確認(民間)	大道条里跡	大道町5丁目517, 521-2, 537-4	60.00	020927	店舗建設
32	確認(民間)	下郡遺跡群	大字下郡807-2, 811-3, 2394-1	24.00	021010	共同住宅
33	確認(民間)	中世大友城下町跡	六坊北町4494-1番	15.00	021008	店舗兼倉庫建設
34	確認(民間)	米竹遺跡	千歳1770番地	120.00	021015	

番号	種別	遺跡名	住所	調査面積 (㎡)	調査期間	開発原因
35	確認(公共)	久原遺跡	大字久原343-1番地	34.00	021022	公園建設
36	確認(公共)	久原遺跡	大字久原661番地	29.50	021023	公園建設
37	確認(民間)	中世大友城下町跡	瀬徳町2丁目3172-1	14.00	021115	個人住宅兼店舗
38	確認(民間)	津守遺跡	大字津守字宮ノ後250-3	20.00	030115	共同住宅建設
39	確認(公共)	上松岡遺跡	大字松岡5047番地	4.50	021118	学校施設建設 (プール)
40	確認(民間)	玉沢条里跡	大分市宇大坪22, 24, 25-1 26-1, 27-1, 28, 29-1, 30-1	105.00	021119~021121	病院建設
41	確認(民間)	米竹遺跡	千歳1770番地	270.00	011125~011126	
42	確認(民間)	下郡遺跡群	大字下郡茶エン2042-1 2049-3	12.15	021127	共同住宅建設
43	確認(公共)	中世大友城下町跡	六坊北町4501-7, 4501-4 4505, 4501-1	29.62	021204~021205	道路建設
44	確認(民間)	津守遺跡	大字津守字大門101番1	15.00	030107	共同住宅建設
45	確認(民間)	上野遺跡群	上野丘西235番1	—	030203	宅地造成
46	確認(民間)	高松東遺跡	高松東2丁目5-4, 5-3	10.00	030204	共同住宅建設
47	確認(民間)	米竹遺跡	大字小池原字米竹 211番地の1の一部	100.00	030214	共同住宅建設
48	確認(公共)	—	金池南2丁目外	10.00	030217	道路建設
49	確認(民間)	宮崎遺跡	大字宮崎字天神目882-6 881-1, 882-7他	16.00	030218	ホテル建設
50	確認(民間)	古国府遺跡群	大字古国府字山瀬72番1 72番2	10.00	030226	車庫建設
51	確認(民間)	米竹遺跡	大字小池原字野地前1番2 3番3	28.00	030319	共同住宅建設
52	確認(民間)	中世府内城下町跡	大字大分沖4890番地	45.00	030328	教育関連施設



第3図 調査遺跡位置図

3 教育普及活動

(1) 現地説明会

今年度は、現地説明会を計3回開催し、延べ650人の参加者を得た。

名 称	月 日	参加人数
大友氏館跡10次～12次	6/3～18	350人
城原・里遺跡5次	9/21	200人
大友氏館跡12次	12/15	100人



第4図 城原・里遺跡第5次調査現地説明会



第5図 大友氏館跡第12次調査現地説明会

(2) 研修参加

独立行政法人奈良文化財研究所による埋蔵文化財発掘技術者専門研修「陶磁器調査過程」に職員1名を派遣した。

4 海部古墳資料館

平成12年4月28日に開館した海部古墳資料館において、以下の事業を行った。

(1) 特別展

平成14年度特別展として、城原・里遺跡第5次調査の速報展を兼ね、古代の役所を紹介した「古代海部の再現―ペーパークラフトによる律令時代の復元―」を実施した。

名 称 「古代海部の再現―ペーパークラフトによる律令時代の復元―」

開 催 日 平成14年9月21日～10月20日

(2) 入館者数

団 体	184団体	7,274人
個 人		10,521人
合 計		17,795人

I 大友氏館跡第12次調査

調査面積	550㎡	調査期間	2002.05.14～03.01.27
地 域	A	調査担当	中西武尚・岩尾美保子

大友氏館跡は、大分河川口付近の左岸に広がる中世大友城下町跡のほぼ中央に位置する。調査地は推定大友氏館跡の東南地区にあたり、第1・3次調査で確認された庭園跡の北側の状況把握を目的として確認調査を実施した。調査区は庭園遺構(館1SX001)の北東端を含み、第1次調査時に一部検出をおこなっていた範囲を南区、今回新たに北側に設定した範囲を北区とした。

現地表面は標高約4.9～5.0mを測り、北区では約20～30cmの耕作土を取り除くと標高約4.7mで安定した地盤面に達し、そこから遺構が検出される。南区では標高約4.2mで遺構検出面となり、北区と南区では約0.5mの高低差が認められる。

層位

北区では4面の遺物を包含する安定面が確認できた。第1面は砂質の強い茶灰色土で、全体に玉砂利と考えられる灰色のスベスベした小石が散見される。標高約4.7mで北区全体に確認できる。この面からは水田跡[SX040]や整地の際の土入れプランと考えられる不定形遺構などが検出される。水田跡は50～60cm掘り込んで造られており、南区の遺構検出面が標高約4.1～4.2mと一段低くなっているのは、この水田開拓により削平されたと考えられる。下層の水田層には初期伊万里などの遺物もみられるが、水田跡の時期は18世紀後半に比定できる。第2面はやや砂質の灰褐色土で、第1面の茶灰色土を掘り下げた標高約4.5～4.6mの高さで確認できる。この面には、後述する1期の遺構群(平行する二条の溝状遺構[SD030-060]、掘立柱建物跡跡[SB145]など)が検出される。第3面は粘性のある暗灰褐色土で、各視察の土層観察において確認でき、標高約4.4～4.5mで面的な広がりを見せている。第4層は黄褐色土と灰色粘質土の混土层で、全体的にしまっており、地山との区別が難しい層である。標高約4.2～4.3mの高さで確認でき、削平をうけた南区においても部分的に認められる。現状で古代(9世紀代)の遺物のみが包含され、SX096では数個体の土師器が1ヶ所に集中して確認でき、整地時の地鎮の可能性も考えられる。

以上のように北区では、4面の整地層と考えられるものが確認できたが、南区では第1面の水田跡により大きく掘削を受けており、上記のような明確な整地層はみられず、部分的に確認される程度である。

また、北区では京都系土師器や強いロクロ目をもつ糸切り土師器など16世紀代に比定される遺物がほとんど無く、それよりも古い糸切り土師器群が多数出土している。16世紀代の遺構が後世に削平されてしまった可能性も考えられるが、もともと何もない空間が広がっていた可能性も指摘できる。

検出遺構の変遷

検出された遺構は4期に分けることができる。1期(15世紀前葉)では、西側を二条の溝状遺構によって区画された極めて規格性の高い掘立柱建物跡を3棟確認している。真北から約3°東に振れ、1間は七尺を基準にして何れも建てられている。その柱穴の底には礎パンとしての根石を据えるも



第6図 調査地点位置図

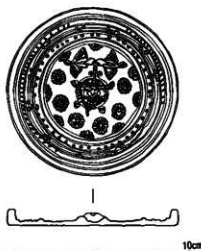


第7図 庭園跡周辺調査区全景(上が北)

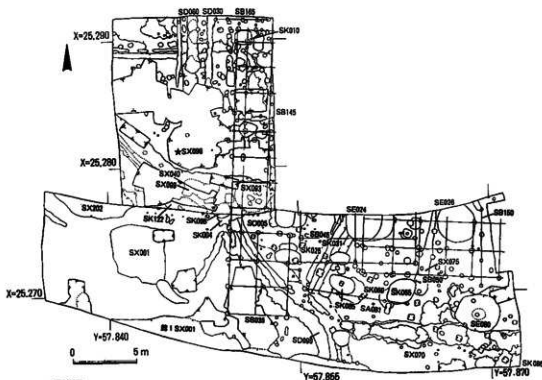
が多く確認できる。Ⅱ期(15世紀前半以後)では、Ⅰ期の建物群と切り合って、真北から約1°東に振れる組立柱建物群を確認している。Ⅲ期(16世紀中葉～後葉)は、第1・3次調査で確認された庭園跡が機能している段階の遺構群である。大形の不定形土坑群と庭園跡を結ぶかのように湾曲した溝状遺構の他、庭園跡東端で樹木痕と考えられる東西に延びる遺構を確認している。Ⅳ期(16世紀末葉)は、庭園跡が機能しなくなる段階の遺構群にあたる。3基の井戸跡が確認でき、これらは短期間の間につくり替えられ16世紀末葉には廃絶している。この内、1基は砂と粘土を混ぜて互層にしてつくった漆喰状のもので、井戸枠・水溜め部分を構築している。

出土遺物は、Ⅰ期ではロクロ成形された土師器・瓦類が主体を占め、Ⅲ期では京都系土師器が中心に出土している。Ⅳ期では様相が異なり、京都系土師器以外に瓦質鉢や備前焼播鉢などの雑器類の出土が目立つようになってくる。この他、井戸跡からは井戸祭祀に用いられた可能性のある和鏡「菊花及鳥文鏡」が出土している。

今回の調査は、庭園跡機能時の北側の状況把握を一つの目的とし行い、庭園跡東側を遮蔽するような樹木痕の確認など重要な所見が得られた。さらに大友氏館が方二町に拡張される以前の整然とした建物群の確認は大きな成果と言える。また、Ⅲ期からⅣ期にかけて見られる出土遺物の組成の変化からは、当地区の土地利用の変化を窺い知るができるなど、大友氏館の成立や衰退に関わる重要な所見が得られたといえる。(中西)



第8図 SE026出土和鏡実測図(1/2)



第9図 遺構配置図(1/300)

Ⅱ 中世大友府内町跡第23次調査

調査面積	1623㎡	調査期間	2002.08.27～02.12.24
地 域	A	調査担当	坪根伸也・菊谷史穂

今回の調査は、大友氏の菩提寺跡山万寿寺跡推定地である九州乳業株式会社工場跡地を対象とするものであり、遺跡状況の把握を主たる目的として最終的に15本のトレンチを設定し調査を実施した。

調査の結果、14世紀代、16世紀後半代に比定される遺構を確認した。前者は万寿寺の創建と伝えられる徳治元年(1306)に近接するものであり、後者は天正14年(1586)の島津氏の府内侵攻に伴い焼失したとされる段階の直前に位置付けられるものである。

以下には、主として第1・2トレンチの主要遺構について略述する。

なお、調査対象区の基本層序は概ね次のようになる。

- 第1層 砕石・濁黄茶褐色土の混土層
(工場建設・撤去時の客土)
- 第2層 暗灰色粘質土層
(工場建設前の水田層)
- 第3層 暗茶褐色土層
(16世紀後半以降の整地層-SX060)
- 第4層 黄茶色土層
(16世紀後半の整地層-SX065等)
- 第5層 暗灰褐色砂質土層
(14世紀代と推定される整地層)
- 第6層 暗黄茶色砂質土層
(9世紀代と推定される整地層)

第1トレンチ

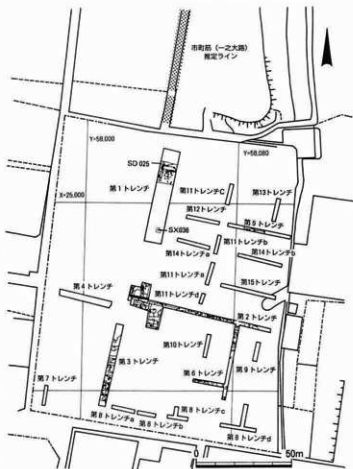
第1トレンチでは14世紀中頃～末に廃絶したと考えられる溝(SD025)、16世紀後半代の所産と思われる土坑(SX036)、古代(9世紀)に比定される整地層を確認した。

SD025はトレンチ北側で検出した東南溝である。検出幅約2.0m、検出長約8.5m、深度約1.0mを測り、主軸方位はN-80°-Wを示す。断面形状は略台形を呈し、溝埋没過程において数回にわたる掘り返しの状況を確認することができる。出土遺物には土師器・小皿の他、瓦質の播鉢・甕などがこれに混在する。また、瓦や鉄釘・鉄釘の出土も認められた。これらの出土遺物の年代観より、SD025は14世紀中頃～末には埋没していた点を指摘でき、徳治元年(1306)に建立されたと伝えられる万寿寺創建段階に近い時期に機能していた溝であると推定される。

SX036は本トレンチ南側で検出した土坑で、径約2.4m、深度約0.8mを測る。遺構堆積埋土は砂質土を主体とするが、上部には掘り返しが認められる。本来の遺構埋土である下部層は炭灰茶褐色砂質土を基調とする自然堆



第10図 調査地点位置図



第11図 調査トレンチ配置図(1/2000)

積によるものである。出土遺物は少なく、形態等を把握できる資料は希少である。その中でも中国南部産と推定される玉緑状を呈する焼締陶器の鉢小片の出土が認められ、当該資料の存在から、SX036は16世紀後半代の所産である可能性を想定できる。遺構の性格については不明である。

さらに、第1トレンチでは古代(9世紀)に比定される整地層(基本層序第6層)が、ごく薄く部分的に分布する状況が認められ、当該地の開発初現を考究する際の貴重な資料を得ることができた。

第2トレンチ

第2トレンチでは16世紀後半に比定される土坑・溝状遺構・整地層、16世紀後半以降の所産と推定される整地層を確認した。

基本層序第3層に相当する整地層(SX060)は調査区のほぼ全域において認められるが、層厚については地点により大きな差違が見受けられ、調査区東側に比べて西側の方が明らかに厚い様相を呈している。所産年代に関しては、本層が後述するSX052を被覆しているという事実関係から、16世紀後半以降に比定できることは明白である。その下限については、層下部から明確な遺物の出土が認められないため、現状では不明である。

SX060の下位には基本層序第4層に相当する整地層(SX065)が堆積し、主に本トレンチ西側を中心に確認することができる。本層は黄茶色土を基調とするもので、固く締められており、西側の直下部には掘り込み地梁を伴うSX070が認められる。一方、他の地点での直下部は黄白色シルト質土層となり、当該地の基盤土を構成している。SX065の出土遺物には京都系土師器皿、瀬戸美濃産の天目茶碗高台部片などがあり、16世紀後半の所産であると考えられる。

SX052は整地層(SX060)に被覆され、さらに、整地層(SX065)の上面において確認される土坑である。本遺構は掘乱穴の底面で検出し、遺構南半部の約1/2を確認した。遺構の遺存深度は0.32mと浅く、これはSX060施工時に上面が削平された可能性を示唆している。遺構埋土は暗茶色砂質土の単一層であるが、底面に薄い灰層の分布が認められた。この灰層から、16世紀後半の表面に貫入が認められる青磁片、共存する京都系土師器皿が出土した。なお、今次の調査で、SX052は掘乱穴底面での検出部分に限り掘下げを実施しているため、遺構の詳細な状況は不明であるが、整地層(SX065)の上面に構築されており、SX065の構築目的に伴うものである可能性が高い。

SD053は本トレンチ西側で検出した断面U字形を呈する溝状遺構である。検出幅5.3m、深度2.0mを測り南北方向へ展開する。溝埋没後も径約2.0mの大型土坑列(SX061等)によって区画を踏襲している状況が看取される。土坑内部には瓦や小礫を包含するものもあり、遺物出土状況については溝形態を呈するSD053埋土内の状況と大きな差異はない。また、積土状になると推定される整地層(SX065)は、SD053と接する部分で溝の掘り方に沿う状況でカーブを描くように積み土されており、明らかに溝機能時に施工されたことを示している。SD053、SX061からの出土遺物には、中国染付皿(小野分類Bz群)、京都系土師器皿、備前焼播鉢片、凝灰岩製の五輪塔空風・地輪、花崗岩製の手水鉢片、他10点程の鉄釘がある。

SD090は本トレンチ南側で検出した東西方向へ展開すると推定される溝状遺構である。今回SD090の掘り下げに関しては、遺構の一部に限定して実施しているため詳細は不明であるが、遺構埋土の状況、大型土坑列の分布状況などSD053との類似点が多く、同種の遺構である可能性が高い。また、この両者に囲まれると考えられる範囲に整地層(SX065・085)が存在し、その外側には同様の整地層が確認されない点を大きな特徴とする。本溝の出土遺物には瓦片や土師器片の他、金銅製の棒状金属製品が認められた。明確な所産年代を示す遺物は認められなかったものの、SD053との類似性、及びSD090と同時並存すると推定される整地層(SX065)の所産年代より、おおむね16世紀後半の機能年代を推定することが可能である。

SD055はSD053の東31.5mの地点で検出した南北方向に展開すると思われる溝状遺構である。今次の調査での本遺構の掘下げに関しては、遺構の一部に限定して実施しているため詳細は不明であるが、調査区北壁面の土層観察から複数回の掘り返し痕跡が認められる。この掘り返し痕跡に相当する部分は、最も規模の大きな段階の

ので幅3.14m、深度0.8mを測り、SD053等に比して小規模ではあるが、SD053の東肩部から続く若干の掘り込みを伴う整地事業(SX080・085)がこのSD055を境として終息するという点が注目される。これは、SD053・090と同様の状況を示しており、三者の密接な関係を示唆している。つまり、これらの点は、溝に圍繞された30m程度の方形空間が存在し、その内部に掘り込みを伴う整地事業が行われた可能性を想起させるものである。このような想定を裏付けるように、SD053の北側延長線上に位置する第1トレンチでは当該溝の延長は認められておらず、前述した整地状況から東側へ屈曲し方形空間を形成する蓋然性は高いと言える。SD055に関しても、南側延長線上に相当する第6トレンチにおいて延長部は確認されておらず、西側への屈曲、もしくは終息する状況が考えられる。

ところで、想定開闢空間の西南付近に相当する地点では、整地層SX065が分布するが、この下部より10m近い幅の大規模な掘り込み(SX070)を確認した。現状地表面から底面までは約1.8mを測り、底面近くには灰層の分布が認められ、その直上からは瓦や土製埴、青磁碗などが比較的多く出土している。上部面に16世紀後半段階、及びそれ以降と推定される整地層が存在するため、掘り込み(SX070)の範囲は現状では把握できなかったが、想定される方形空間を直接的に意識した配置とはなっていないものと推定される。出土する青磁碗は14～15世紀に比定されるものであり、掘り込み(SX070)が当該期の所産となる可能性もあるが、土層の断面観察から、SX070の上部埋土の上面はSX085施工時に窪んでいたことが判明しており、このような状況から、近接する時期(16世紀後半)のものである可能性も考慮されよう。



第12図 SX052遺物出土状況(南より)



第13図 SX070遺物出土状況(南より)

小結

今回の調査は、万寿寺跡中心部とされる地域の遺跡状況の把握を目的として実施した。対象地は工場として利用されていた地点に相当し、調査着手前には工場の建物基礎等による大規模な遺跡の破壊が危惧されていた。しかしながら、調査の結果は良好に遺跡が遺存する状況を示しており、遺跡の破壊が極めて限定された範囲であることが判明したのである。

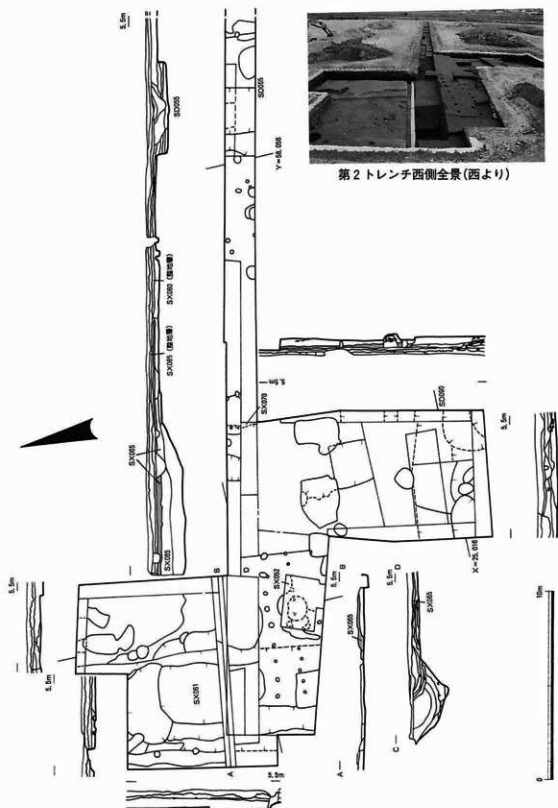
調査面積が狭小なため、遺跡の具体的な展開様相にまで言及することはできないが、14世紀と16世紀に比定される遺構を確認し、後者については、広範囲に分布する整地層を把握することができた。なかでも、16世紀後半段階には、第2トレンチ周辺に溝で圍繞された一辺30m程度の方形の空間が存在する可能性を指摘することができ、寺に関連する主要施設に伴うものであることを示唆するものとして注目される。

これまで「府内古図」等を基に作成された「戦国時代府内復原想定図」や伝承などにより、万寿寺跡の推定範囲が想定され、周辺では過去に開発に伴う数地点の調査が実施されているものの、推定中心部においての本格的な発掘調査は今回の調査が初例となる。今後は、伽藍配置も含めた遺構の面的な展開状況の把握が課題となろう。

(坪根・苅谷)



第2トレンチ西側全景(西より)



第14図 第2トレンチ遺構配置図・土層図(1/150)

Ⅲ 中世大友府内町跡第24次調査（推定万寿寺塔跡地区）

調査面積	57㎡	調査期間	2002.11.20～03.01.14
地域	A	調査担当	中西武尚・岩尾美保子

調査地は、徳治元年(1306)に建立された推定万寿寺跡の南、寺小路町(推定塔跡地区)に比定されている場所である。また、中世府内町跡第6次調査において、万寿寺の創建段階と考えられる東西の区画溝が確認された地点から北に約10mほどのところに位置する。調査区は塔跡推定範囲の北西部に幅約2.4m、長さ約24mの東西方向のトレンチを設定し調査を実施した。

現地表から約30～40cm堆積している耕作土を取り除くと標高6m前後のところで安定面が確認される(10層)。この暗茶色土層からは近世陶磁器が出土している。この層をさらに掘り下げると、調査区西側では基盤面と考えられる淡茶緑色砂質土が確認され、そこにはS008やS006などの遺構が確認できる。東側では赤茶色砂質土の固くしまった安定地盤となり、この基盤面にはS012・S013→S009→S007の順に各遺構が構築される。S007は現状で幅約4mを測る断面浅い皿形の形状を呈す。埋土には小礫や瓦の破片などを多量に含み、よくしまっている(13層)。この下層に幅約3m、深さ約0.3mに掘り込まれた遺構が確認でき、埋土の状況からS007と同一遺構と考えられる(16～19層)。遺構の時期については、小片ではあるが京都系土師器が出土しており、16世紀後半以降に比定される。この他、遺構の時期とは関係ないが灰軸陶器皿の出土がみられ、他の遺構からは緑釉陶器片なども出土していることから、この地域が古代においても重要な地点であったと推測される。S007の下部からはS012とした土坑状の遺構を確認している。西側に挟り込んだ袋状を呈し、長さ約1.0m、深さ約0.3mを測る。S009は断面浅い皿形の形状を呈し、長さ約1.4m、深さ約0.2mを測る。埋土には多量の焼土塊や炭化物を含み、下部には焼土粒が帯状にみられる。廃棄土坑あるいは鋳造関連遺構の可能性も考えられる。S013は当初幅2mほどの断面逆台形の形状を呈すが、数回の掘り返しの後、浅い掘り込み状の形状で調査区の東側にのびている。検出長は約7m、深さは約0.7mを測り、最終埋没土は小礫を多量に含むよくしまった埋土である。逆台形の形状の段階では、2回の掘り返しに伴い、2層の炭化物層が確認できる。出土遺物には鬼瓦片がみられるが、表面に研かれた痕跡が認められ、砥石などとして2次利用されていた可能性が考えられる。

今回の調査では、南北方向の溝状遺構になると考えられる2条の遺構とそれに切られる2基の土坑を確認した。溝状遺構はS007→S009→S013と間に土坑状のS009を挟んで切り合っており、時期差が認められるが、埋土の状況はよく似ており、上部に小礫を多く含む茶褐色土層が堆積している。出土遺物にも時期差は認め難く、一連の遺構の可能性も考えられる。推定塔跡地区の中心近くに位置するが、遺構の位置付けについては、今後の調査を待ちたい。また、今回直接塔跡に関連するような遺構は検出されず、遺物の中にも瓦類が多量に出土するといった状況はみられなかった。調査区を設定した地点が、推定塔跡地区の中でも北西側に位置していたことに起因していよう。推定されている塔跡については、調査の状況からさらに南側に位置している可能性が高い。

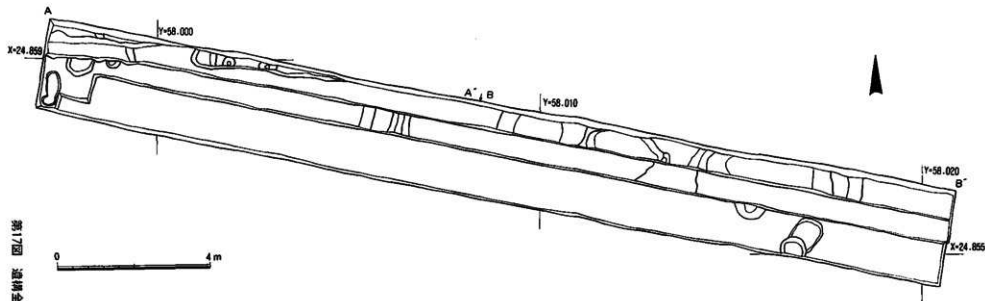
(中西)



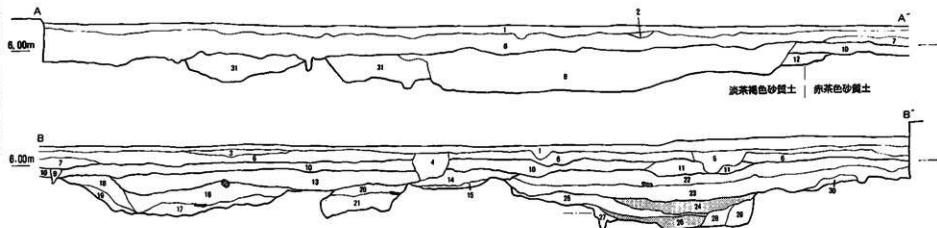
第15図 調査地点位置図



第16図 調査区全景(西より)



第17図 遺構全体図(1/100)・土層観察図(1/50)



0 2 m

- 1 河原土：(新作土0)
- 2 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 3 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 4 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 5 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 6 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 7 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 8 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 9 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 10 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 11 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 12 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 13 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 14 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 15 河原土：赤茶色土・ブロックを含む

- 16 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 17 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 18 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 19 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 20 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 21 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 22 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 23 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 24 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 25 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 26 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 27 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 28 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 29 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 30 河原土：赤茶色土・ブロックを含む
- 31 河原土：赤茶色土・ブロックを含む

Ⅳ 横尾遺跡第86次調査 D-35地点

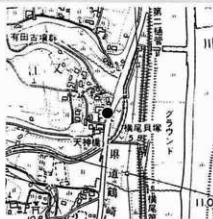
調査面積	約206㎡	調査期間	2002.09.11～03.03.31
地域	E	調査担当	塩地潤一・小住武史・羽田野裕之

調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、横尾貝塚の北西部に近接する。当該地は県内最大河川である大野川の分流、乙津川左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵先端部の標高約8～13m地点にあたり、平成12・13年度に実施された横尾遺跡第82次調査において縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、同早期末頃に比定される「水場の遺構」ならびに姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見された谷部の南側隣接地に所在する。この開析谷の南側から横尾貝塚にかけては現状でも比較的平坦な地形が認められ、横尾貝塚の調査において堅穴住居跡の可能性が指摘されている堅穴遺構(縄文時代後期前葉頃)が検出されたことをはじめ、第82次調査においても開析谷を埋める中世の大規模造成に伴って、当該地周辺より縄文土器が大量に廃棄されていることから、当地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた最有力候補地と想定し、確認調査を実施した。

調査の結果、裸地盤と一部、縄文時代早期に形成された堆積土層を基盤面として溝状遺構(SD001・015)ならびに柱穴跡が検出された。今回検出された遺構群は主に古代～近世にかけて形成されたものと想定され、縄文時代における顕著な遺構については確認できなかったものの、当該地が周辺調査地よりも裸地盤の検出レベルが高く、さらに調査区西側において東側から西側に傾斜する堆積土層が確認されたことは注目される。以下に、その概要についてまとめる。

溝状遺構(86SD001)については調査区を南北に縦断し、隣接する第82次調査において検出された溝状遺構(82SD005)につながる可能性が高いものである。幅約2.2m、深さ約1.8mを測り、断面形状は逆台形を呈す。少なくとも2度の掘り返しが行われているものの、大きな時期差は認められない。これらの溝状遺構からは肥前磁器丸碗片・京焼風陶器碗片など一定量の遺物が出土しており、それらの帰属年代から18世紀前半頃には埋没したものと考えられる。

また、この溝状遺構(86SD001)は調査区北端部において先述の82SD005と同一のものと判断される溝状遺構(86SD015)と重複しており(新旧関係については古い方から86SD015→86SD001)、その最終掘り返し段階において拳大～人頭大の礫を組んだ石組(86SX023)が設置されている。石組の機能については現状で明確な見解を提示し得ないものの、



第18図 調査地点位置図



第19図 調査区全景(北より)



第20図 86SD001土層断面状況(南より)



第21図 86SX023石組検出状況（北より）

礫地盤を掘削して形成された当該遺構にあって、遺構の重視が認められる都合上、溝の北側壁面のみが削平された溝状遺構(86SD015)の埋土となることから、その土留めとして構築された可能性を指摘しておきたい。

一方、86SD015については幅約1.7m、深さ約0.9mを測り、断面形状は逆台形を呈す。86SD001同様に、礫地盤を掘削して形成された遺構であるものの、断面形状は前者よりも直線的ではなく、底幅も広い。また、埋土や溝底面のレベルについても差異が認められる。出土遺物は白磁焼Ⅳ類片1点のみである。隣接する第82次調査において検出された溝状遺構(82SD005)の様相と近似する。

これらのことから、86SD001については現状で82SD005を18世紀前半段階において掘り返した溝状遺構である可能性が想定されるものの、86SD015さらには82SD005の埋没年代については今後に残された課題である。

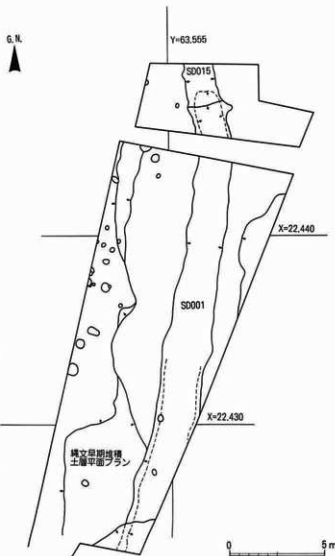
今回の調査によって最も注目される所見は調査区のはは全域で礫地盤が検出され、一部、調査区西側において東側から西側に傾斜する堆積土層が確認されたことである。この礫地盤については先述した開析谷の南側から横尾貝塚にかけて認められる比較的平坦な現況地形を構成する基盤面と位置づけられるものであり、堆積土層については西側隣接地で実施した第87次調査の成果から、遅くとも縄文時代早期中葉～後葉頃に形成されたものである。

以上のことから、縄文時代においてもこの開析谷の南側から横尾貝塚にかけて南北方向に広がる微高地の存在が指摘され、今回の調査においては顕著な縄文時代の遺構は確認できなかったものの、当地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた可能性は依然として高いと判断される。

(埴地)



第22図 86SD015土層断面状況（南より）



第23図 遺構配置図(1/200)

縄文遺跡
第86次調査
D-35地点

V 横尾遺跡第87次調査 D-35地点

調査面積 約228㎡ 調査期間 2002.09.11～03.03.31

地域 E 調査担当 塩地潤一・奥村義貴・小住武史・羽田野裕之

調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、横尾貝塚の北西約30m地点、横尾遺跡第86次調査区の西側隣接地にあたる。

今回の調査はこれまでの横尾貝塚周辺地における調査成果を踏まえ、縄文時代後期前葉頃における居住空間の確定を第一義的な目的として実施したものである。

調査の結果、深さ約2mにも及ぶ堆積土層が確認され、各時代の堆積土層を基盤面とする遺構群が検出された。以下に、各時代の様相についてまとめる。

中世

表土直下において確認された堆積土層が該当する。上から大きく茶褐色土層と黒褐色土層の2層に区分され、両者ともに大量の礫と遺物が内包されている。深さは合わせて約1.5mを測り、中世の遺物と共に古代や縄文時代に比定される大量の遺物が出土している。中世の遺物としては土師器・同鉢や磨瑯土師器碗をはじめとして、白磁碗Ⅳ-2-a類・同皿Ⅲ類や和泉型瓦器碗・同皿などが認められ、古代の遺物については土師器碗a・同蓋aを中心として、黒色土器A類碗c・同鉢や土師器亮・同甕・同脚付鉢・同移動式甕などが出土している。また、風字視や「大」と刻書された土師器蓋aをはじめ、防長系緑釉陶器や丸瓦など、官衙遺跡通の遺物も出土しており注目される。さらに、縄文時代の遺物としては出水式深鉢や中津式深鉢をはじめ、福田Ⅱ式深鉢・同鉢や小池原下層Ⅱ式深鉢、西平式深鉢などの緑帯文土器、そして曾畑式深鉢や藤B式深鉢などが認められる。この他にも姫島産黒曜石製大形石核や底部穿孔深鉢など特筆される遺物も出土している。

これらの残存状況については極めて良好であり、完形品をはじめ、それに近い資料が一定量認められる。

以上のことから、これらの出土遺物については中世段階に調査区南西方向から廃棄されたものと判断され、今回出土した遺物の帰属年代と祖師が生じる可能性が残るものの、調査区北側に隣接する第82次調査地において確認された開析谷を埋める14世紀前半頃の大规模造成との関連性が注目される。



第24図 調査地点位置図



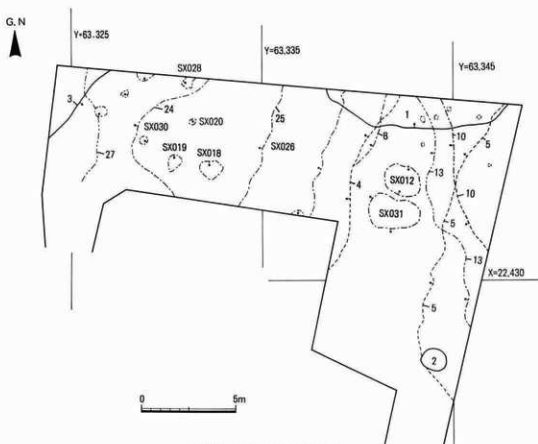
第25図 調査区北側土層断面(南西より)



第26図 87SX018検出状況(南より)



第27図 87SX019検出状況(東より)



第28図 遺構配置図(1/200)

縄文時代後期前葉頃

中世段階の造成土の下位にあたり、標高約8m地点の当該期に比定される堆積土層を基盤面とする配石遺構(87SX018)ならびに地床炉跡と考えられる4基の焼土塊(87SX019・020・028・030)が該当する。この堆積土層については横尾遺跡第86次調査において確認された南北方向に伸びる微高地と本調査区の西側に広がる丘陵斜面地にかけてレンズ状に堆積したものであり、当該地一帯において北側に向けて開口する谷部の存在が想定される。

配石遺構(87SX018)

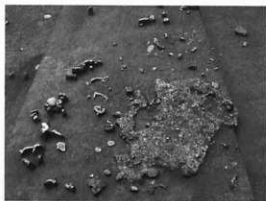
90cm×100cm程の範囲に大小18個の円礫を配置した遺構である。設置に伴う掘り方は認められず、円礫を皿状に配し、その周りに7個の円礫が立てかけられるように並べられている。その内最も大きな円礫については擦痕が認められ、石皿として使用された可能性が指摘されるものの、この石皿のみに被熱による赤変が認められることから、配石遺構を構成する円礫として転用されたものと判断される。

地床炉跡(87SX019・020・028・030)

平面不整形を呈す4基の焼土塊が検出されており、堆積土層を掘り込んで構築された遺構と判断されるものである。その中でも87SX019については50cm×90cm程の範囲に焼土が広がり、焼土が希薄となる中央部上面には比熱により赤変した小礫が4点確認されている。

縄文時代前期前葉頃

先述した南北方向に伸びる微高地の西側緩斜面において確認された貝・獣骨層(87SX026)ならびに土坑(87SX012)が該当する。



第29図 87SX026検出状況(南より)

貝・獣骨層(87SX026)

微高地側から廃棄されたものであり、貝殻やシカの角、イノシシの下顎骨をはじめとして、藤B式深鉢や無文土器深鉢、大形石鍾や焼石などが出土している。貝殻については遺存状態があまり良くないため、貝類の同定はできていないものの、南北約100cm×東西約70cmの範囲に密集し、当該期に比定される堆積土層全域には散布していないようである。

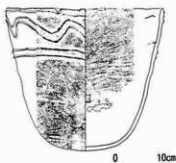


第30図 87SX012土層断面(東より)
土坑(87SX012)



第31図 87SX012遺物出土状況(北より)

貝・獣骨層の東側隣接地において検出された遺構で、アカホヤ火山灰層の下位にあたる縄文時代早期中葉～後葉頃に比定される堆積土層を基盤面として形成されている。平面楕円形を呈し、最大で長さ2.47m、幅1.44m、深さ0.4mを測る。埋土は暗茶褐色シルトブロック土の単一層である。遺物については藤B式深鉢、骨片、姫島産黒曜石などが出土している。これらの大半は土坑上位にまとも出土したものであるが、底面付近においても僅かに認められる。その中でも藤B式深鉢は3個体確認され、ほぼ完形に復元できるものが含まれるため、検出当初は埋設された可能性を想定していたものの、同一個体の破片が散在している状況が認められるため、土坑埋没段階で廃棄されたものと判断される。



第32図 87SX012出土遺物
実測図(1/8)

縄文時代早期中葉～後葉頃

縄文時代前期前葉頃に比定される土坑(87SX012)の基盤面となる堆積土層が該当する。微高地の西側緩斜面に堆積したものであり、無文土器深鉢が出土している。また、土坑(87SX012)の南側隣接地には、この堆積土層の下位にマウンド状の高まり(87SX031)が存在する可能性が指摘される。今回の確認調査においては平面プランの検出までに留めたため、その詳細については不明であるものの、現状で長さ約2.31m、幅1.62mを測る。

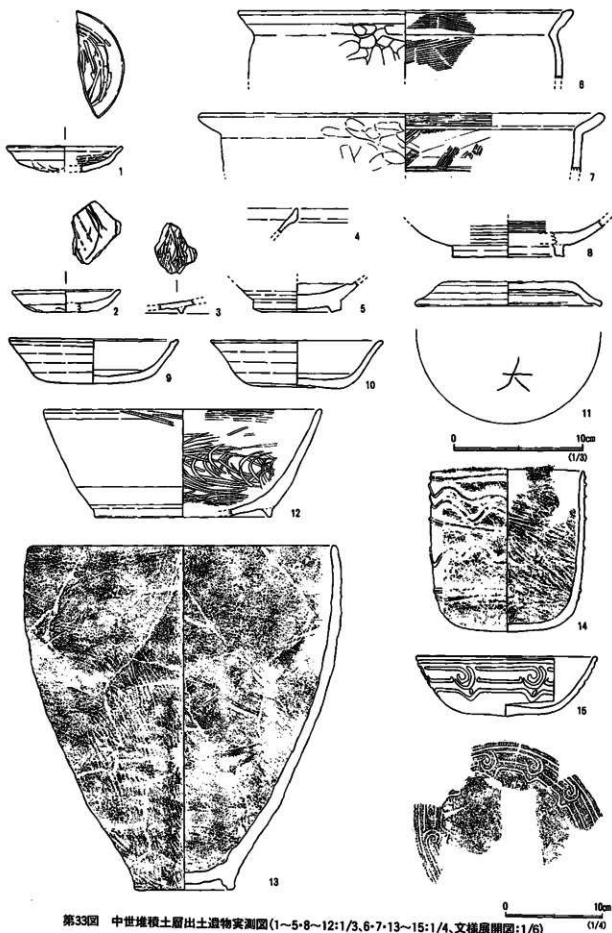
まとめ

今回の確認調査では横尾貝塚形成期にあたる縄文時代前期前葉頃に比定される貝・獣骨層が確認され、横尾貝塚と同時期の貝塚が隣接地に存在することが明らかとなった。両者の廃棄方向から考察すると、横尾貝塚と本調査区の間に想定される微高地の存在を裏付けるだけでなく、微高地上に当該期における生業関連施設の存在を予測させる貴重な成果と言える。

また、中世の大規模造成に伴って廃棄された遺物の遺存状況については、既往の周辺調査地を凌駕し、極めて良好である。このため、調査区西側に広がる丘陵斜面地についても今後これらの遺物が示唆する遺構の存在に注目する必要がある。

今回の調査においても縄文時代後期前葉段階における居住空間の確定を行うことはできなかった。しかしながら、今回の調査成果によって当地一帯が縄文時代後期前葉頃の居住空間として機能していた最有力候補地である可能性はこれまで以上に高くなったと判断される。

(塩地)



第33図 中世堆積土層出土遺物実測図(1~5:8~12:1/3、6・7・13~15:1/4、文様展開図:1/6)

VI 横尾遺跡第88次調査 D-29・37地点

調査面積 約2856㎡ 調査期間 2003.02.12～03.03.31

地 域 E 調査担当 塩地潤一・小住武史・羽田野裕之

調査地は、大分市大字横尾字有田に位置し、大野川下流左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵東端の尾根状先端部にあたる標高約30mの台地上に所在する。調査区北側には有田古墳群が隣接し、古墳時代中期に比定される円墳2基と石蓋土墳墓が1基確認されている。当該地区一帯には「七塚」の存在が伝承されており、その関連性が注目される。さらに、有田古墳群の北側には丘陵の東側に向けて谷が開析しており、この一角に横尾貝塚、ならびに縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群や、同早期末頃に比定される「水場の遺構」などが発見された第82次調査地が所在する。今回の調査は、国庫補助事業による市内遺跡確認調査であり、横尾貝塚周辺の遺構分布状況の把握を目的として行われたものである。調査対象地に9本のトレンチを設定し、確認調査を実施した結果、全トレンチにおいて多数の遺構群が検出された。以下に、各トレンチの主要遺構についてまとめる。



第34図 調査地点位置図

第1トレンチ

同トレンチは、調査地の最北西部に位置し、先述した有田古墳の南東側隣接地にあたる。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、5基の地層横断遺構(SX002・003・004・005・006)、多数のピットが確認された。これらには、新旧関係が認められ、複数時期に形成された遺構群であることが示唆される。

第2トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第1トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、4基の地層横断遺構(SX020・021・022・023)、多数のピットが確認された。これらには、第1トレンチと同様、新旧関係が認められ、複数時期に形成された遺構群であることが示唆される。遺構検出面からは、流紋岩の石核が出土している。

第3トレンチ

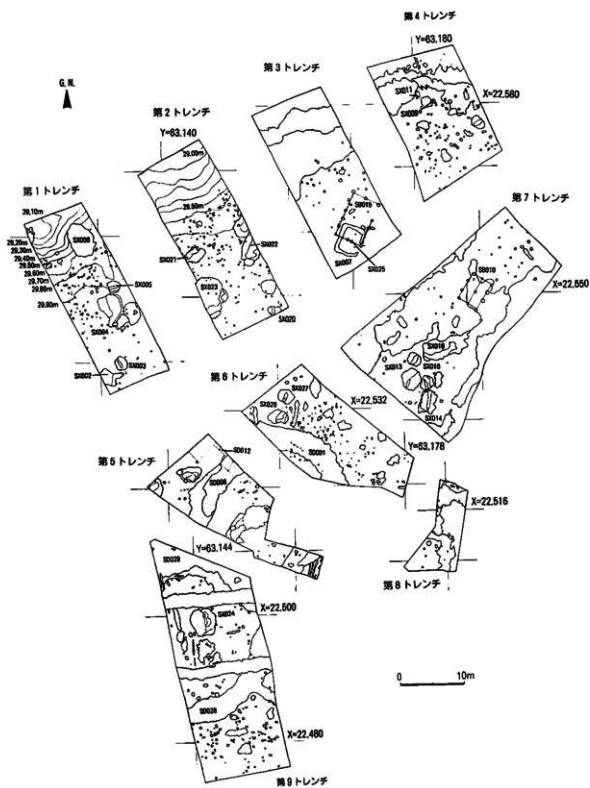
同トレンチは、調査地の中央部、第2トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開析谷につながる緩斜面において、掘立柱建物跡(SB015)、方形周溝遺構(SX007)とその主体部と考えられる土坑(SX025)が確認された。

SB015は、2間×5間の東西棟である。SX007は、一辺約5mの平面正方形プランを呈し、その5m四方の内側に、幅約90cm、深さ約10cmを測る溝状遺構を巡らす。溝状遺構は現状で南側の一部を開口するものの、遺存状況を踏まえば、当初からの形状としては断定できない。出土遺物としては、土師器片の底部片が認められ、9世紀代に比定されるものである。



第35図 88SX007全景(南より)

また、SX007の中心部に位置するSX025は、平面円形プランを呈し、直径約40cm、深さ約8cmを測る。埋土は暗茶黒褐色土の単一層である。現状では、出土遺物については皆無である。方形周溝遺構については、県内では大分市城南遺跡や中津市相原・山首遺跡において認められ、すでに火葬墓の可能性が指摘されているものである。さらに、本トレンチの遺構検出面からは、姫島産黒曜石の製片が出土している。



第36図 遺構配置図(1/600)

第4トレンチ

同トレンチは、調査地の最北東部、第3トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、北側の開折谷につながる緩斜面において、2基の土器埋設遺構(SX009-011)が確認された。

SX009については、平面不整形プランを呈し、ほぼ完形の弥生土器壺が、横位に埋置された状態で出土している。この弥生土器壺については、胴部中位に2条の三角突帯を貼付し、底部がレンズ状を呈することから、弥生時代後期前葉に比定されるものと想定される。

また、SX011については、平面楕円形プランを呈し、SX009と同様、ほぼ完形の複合口縁壺が、横位に埋置した状態で出土している。複合口縁部の立ち上がりは短く、胴部下位に最大径を有することから、弥生時代後期前葉に比定されるものと想定される。

さらに、同トレンチからは縄文時代早期に比定される押型文土器の底部が出土している。

第5トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第1トレンチの南側に位置する。主要遺構は、トレンチ中央部分に展開する淡茶褐色ローム層を基盤面として周溝遺構(SD012)と数基のピットが検出された。また、トレンチ北側部分に展開し、淡茶褐色ローム層の上層にあたる暗黒褐色ブロック土層を基盤面として溝状遺構(SD008)ならびに多数のピットが確認された。SD008については、幅約2.2m、深さ約20cmを測り、断面形状については、底面の幅広い逆台形状を呈する。埋土については、黒褐色ブロック土の単一層である。また、SD012については、幅約5.5m、深さは80cmを測り、断面形状については、逆台形状を呈するものと想定される。埋土については、黒褐色ブロック土を基調とする。底面から南側壁面にかけて拳大の礫が多量に確認されていることから、墳丘に葎石が施されていた可能性が想定される。さらに、第6トレンチで確認されたSD001との埋土の状況や位置関係から、両遺構は同一のものと考えられる。出土遺物としては、周溝区画内の中央付近に位置する堆積プランから板状石材が確認されている。また、SD008の埋土及びその基盤面である暗黒褐色ブロック土からは流紋岩片が確認されている。



第37図 88SD012検出状況(西より)



第38図 88SD001検出状況(北より)

第6トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第5トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、周溝遺構(SD001)、2基の地層横転遺構(SX026-027)が確認された。SD001は、幅約4mを測る。埋土は灰黒褐色土を呈し、第5トレンチで検出された周溝遺構(SD012)の埋土に近似している。両者の位置関係から、同一遺構と考えられるものである。

第7トレンチ

同トレンチは、調査地の最南東部、第6トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、掘立柱建物跡(SB010)、5基の地層横転遺構(SX013-014-016-018)が確認された。SB010は、2間×3間の東西棟になる掘立柱建物跡であり、中央には床東と考えられる柱穴が認められる。これらの柱穴については、現状で柱痕は検出できていない。出土遺物としては、土器小片のみであり、時期比定についても断定できない。

第8トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第5・6トレンチの東側に位置する。ピットが多数検出された。

第9トレンチ

同トレンチは、調査地の中央部、第8トレンチの東側に位置する。主要遺構としては、周溝遺構(SD028・029)、地層横転遺構(SX024)が確認された。SD028の規模は、幅約4mを測る。SD029の規模は、現状では不明である。両遺構(SD028・029)の埋土や位置関係より、これらの遺構は同一のものと考えられ、現状で直径約30m規模の平面円形プランを呈す。



第39図 88S8010検出状況(西より)



第40図 88SD028・029検出状況(北より)

まとめ

今回の調査では、横尾貝塚の西側丘陵部に位置する有田古墳周辺地において多くの遺構群が確認された。その中でも周溝遺構ならびに方形周溝遺構の存在は注目されるものである。

第5・6トレンチにおいて確認された周溝遺構については、埋土や規模ならびに位置関係より同一のものと考えられるものである。これらの周溝遺構は、同トレンチ南側に現存するマウンド状の高まりを取り囲むように検出されていることから、古墳の周溝である可能性が高い。また、第9トレンチで確認された2つの周溝遺構についても、同一のものと判断される。このため、今回確認された周溝遺構は、有田古墳をはじめとした「七塚」の伝承に関連するものと想定される。

方形周溝遺構については、9世紀代に造営された火葬墓の可能性が示唆される遺構である。横尾遺跡第79次調査においても、9世紀後半代の木棺墓が確認されており、当該地周辺に古代の墳墓群が点在している可能性が想定される。

横尾遺跡における既往の調査では、古代の粘土採掘坑群をはじめ、道路状遺構や掘立柱建物跡などが確認され、官衙道路通有の風字硯や越州窯系青磁碗、緑釉陶器、さらに、「大」と判読できる刻書土師器蓋等も出土している。また、横尾遺跡周辺においても、大形の掘立柱建物群が検出された地蔵原遺跡、猪野新土井遺跡をはじめ、豊後国内において唯一発見された須恵器窯跡である松岡古窯跡群、さらには、水上交通の利便性を最大限に活用した集散地遺跡の可能性が示唆される井ノ久保遺跡などが存在している。

古代における墳墓の造営については、「喪葬令」により、その被葬者ならびに立地が規制されているものであり、これらの遺構群との関連性を含め今後注目する必要がある。

さらに、横尾貝塚や第82次調査地の西側後背面にあたる台地上において、押型文土器底部片などの縄文土器が確認された事も看過できない事象である。今回の調査結果は、当該地周辺における縄文人の活動を示唆するものであり、今後の周辺調査が期待される。

(羽田野・埴地)

Ⅶ 史跡豊後国分寺跡平成14年度確認調査

調査面積	120㎡	調査期間	2002.08.01～02.10.31
地 域	B	調査担当	中西武尚・岩尾美保子

今回の調査は、国指定史跡豊後国分寺跡の指定地内における個人住宅の建て替えに伴い、住宅の基礎部分や浄化槽の設置による遺構破壊を未然に防ぎ、遺構保存をはかるため国・県の補助を受け確認調査を実施した。

調査区は推定中門跡の東側、豊後国分寺跡の伽藍中軸線を基準とした座標(N-3°50'38"-E)では、S100-E25を中心とした範囲に位置する。推定中門跡から東に延びる回廊跡とその南側に掘られた溝跡が調査区内の全体にかかる。中門跡の東側と西側ではすでに約1mの高低差がみられ、平成元年度の中門地区の調査でも回廊跡は確認されていない。他の遺構についても、すでに宅地化されていたこともあり、遺構の遺存状況が懸念された。

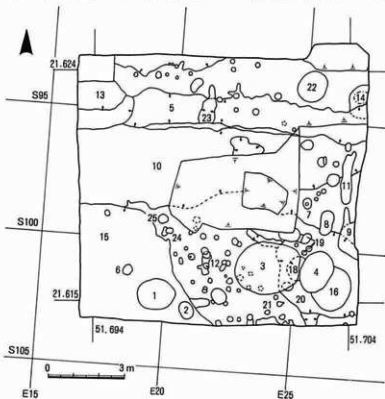
現地表の標高は約29.6～29.7mを測り、そこから約0.5mの厚みで宅地造成土がみられる。この造成土を掘り下げると黄褐色土の基盤面となる。遺構検出標高は約29.2mを測るが、調査区の中央部分は半地下式の妻小屋のため大きく削平を受けている。

検出された遺構は、調査区の中央を東西にのびる溝跡(SD010)、その北側を同じく東西にのびる溝状遺構(SD005)、SD010の南側で大きく掘り込まれた大形竪穴遺構(SX015・020)である。この他、南側に土坑群(SK001・004)やピット群が集中して検出されている。以下、その概要について記す。

SD010は調査区の中央を東西に貫通する溝跡で、中門地区やその他で確認されている推定回廊跡の南側に並行する一連の溝跡の続きである。先の妻小屋により削平を受けていた中央部分を利用して、溝の深さや形状を知る目的で掘り下げを行なった。検出長約11m、幅約3.8～4.0m、深さ約1.4～1.6mを測る。掘り下げを行なった中央部と調査区西壁ではそれぞれ断面形状が異なり、中央部では逆台形を呈すが、西壁においてはU字に近いV字状を呈している。中央部の状況から長土坑状に掘られていることがわかり、長土坑の端と真中の辺りでは形状が異なってくるものと考えられる。土層観察から数回の掘り返しを確認でき、新しくなると深さも浅くなり、規模も縮小されてくるようである。出土遺物は全体的に少なく、瓦の出土量も少ない。遺構の時期については、埋没途中の層位から9世紀代の土師器坏が出土して



第41図 調査地点位置図



第42図 遺構配置図 (1/150)

おり、この時期にはすでに造られていたと考えられる。

溝跡は寺の伽藍域などを示す特徴的な施設であり、過去の調査でもトレンチ調査を中心におよそ23地点が調査されている。その内、南側の溝跡については、5地点と少ないが、推定中門跡との関係から比較的広く調査区が設定されて調査が行なわれている。今回の調査では、先述のように溝跡が長土坑状に掘削されていることが確認された。こうした溝の構造は、普請割りや1日の作業量などの作業単位を示唆していると考えられる。また掘削の際、北壁については



第43図 遺構検出状況(西より)

フラットに掘られているのに対し、南壁は長土坑状の端と端が接したままの雑な状態である。これは南側からの視点を意識したものと考えられよう。また、これまでに確認されている一連の溝跡の東西北側は、国分寺の伽藍域を示しており、南側についても伽藍域を示している可能性を指摘しておきたい。

SD005はSD010の北側を並行してのびる東西溝状遺構である。検出長約11m、幅約1.0～1.5m、深さ0.1～0.5mを測る。西側での基底部の標高は約29m、東側では約28.6mを測り、東側に緩やかに低くなっていく。埋土は黄褐色ブロック土を多量に含んだ黒黄褐色土を基本とし、縦断面の土層観察を行なった結果、積土状に斜め堆積しているのを確認した。さらに調査区東壁の土層観察及び平面精査において、その上部に幅約2.2m、厚さ約0.1mの硬化面を確認した。基底部は凹凸が激しく、積土の際の突き痕、あるいは掘削の際の工具痕と考えられる。中門地区での調査においても同様の溝状遺構が確認されている。上部がかなり削平を受けていることから、遺構の性格を判断するのは難しいが、積土状の堆積であること、その上部に硬化面があることなどから、立体的な区画施設が想定される。遺構の時期については、出土遺物から18世紀前半に比定される。SD010の溝跡とほとんど同じ位置、あるいはほぼ同じ方位で確認されており、国分寺の南側の寺域伽藍域が18世紀後半段階までなんらかの区画として踏襲されてきたと考えられる。

SX015・020は調査区の南側でSD010を切って検出される大型堅穴遺構群である。全体の規模は不明であるが、SX015では検出長東西約5.5m、南北約4.0m、深さ約1.6mを測る。検出面から約0.8mで大きく掘り返しが確認でき、下部からは柱穴が数ヶ所検出される。土層観察から最終の掘り返し後は自然堆積と考えられるが、これより下層では3ヶ所、人為的と考えられる黄褐色土が帯状に確認される。下層で確認されたものには基底部と同じく柱穴が検出できる。当遺構の性格については、土取りの痕と考えられ、途中帯状に堆積した黄褐色土層は、土取りの際の足場と考えられる。また、下部で検出された柱穴も土取りの際に使用されたものと考えられよう。出土遺物には瓦片が目立つが概して少なく、遺構の時期についても破片資料からの推定であるが10世紀から11世紀代と考えられる。SX020も同様に土取り痕の可能性も考えられるが、形状が異なっている。遺構の時期については、SX015と同時期と考えられる。

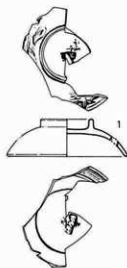
以上が主な遺構の概要であるが、全体的に出土遺物は少なく、中でも瓦の出土量の少なさが指摘できる。特筆すべき出土遺物としては、焼糺された肥前楽付蓋があげられる。内底部に相当する部位には、朱で「国分寺屋」と判読できる焼糺文字が書かれている。端反碗に対応する蓋で製作年代は1820～1860年に比定される。この他、縄文晩期の浦久保式に比定される深鉢片が出土している。

(中西)

<参考文献>

大分市教育委員会 1978 「豊後国分寺跡」

大分市教育委員会 1999 「豊後国分寺跡」—平成10年度確認調査—



第44図 SK001出土遺物実測図(1/3)

史料豊後
国分寺跡
平成14年度
確認調査

VIII 下郡遺跡群第138次調査 H区r-19/r・s-20地点

調査面積 1774㎡ 調査期間 2002.02.08～02.07.31

地 域 A 調査担当 苅谷史徳

下郡遺跡群は大分川河口付近の右岸に位置し、標高4～7mの自然堤防上に立地する縄文時代後期から近世におよぶ複合遺跡である。

今回の調査地は弥生時代中期末～後期前葉、同後期後葉～終末、終末～古墳時代初頭の環濠跡が確認された地点の南西部分に相当する。

また、本調査地一帯は旧字名を柳屋敷と称し、戦国期にまでさかのぼる方形館所在の推定地とされている地点に該当する。

今回の調査はA・B・C区の3地区に分割し調査を実施した。

地区	調査面積	調査期間
138次A区	559㎡	2002.02.08～03.14
138次B区	826㎡	2002.03.14～07.31
138次C区	389㎡	2002.06.21～07.31



第45図 調査地点位置図

A区

A区は、調査地周縁にコンクリート製の擁壁が設置されており、擁壁内部を対象に調査を実施した。本区の基本層序は、最上層に擁壁設置に伴う客土層が位置し、その下層には水田基盤層が認められ、近世以降に水田耕作が行われていた状況を示している。なお、この水田耕作に伴い調査区全域におよぶ地下げが行われている状況が看取でき、これに起因して遺構の大半は削平され、遺存状況は総じて良好でない。

調査の結果、中世に比定される溝を確認した(138A区SD001)。調査区北西側をN-25°-Eの主軸方位で調査区外に展開する。検出幅約1.5m、検出長約2.5m、深度約0.25mを測り、断面形状は逆台形を呈する。遺構内堆積埋土は灰褐色土を基調とし、上部層に相当する部分に数回の掘返し痕跡が認められる。なお、下部層に相当する部分より、赤褐色の色調を有する備前焼甕胴部片が出土したことから、本溝埋没期の上限は14世紀以降と想定できる。しかしながら具体的な時期比定の行なえる遺物の出土は認められない。

調査区のはほぼ中央で柱間約3.0mを測る1周四方の柱穴列を確認した(138A区SX022)。柱穴の規模はいずれも径約0.25m～0.30m、深度約0.30mを測る。出土遺物は確認されておらず、これに先述した当区における遺構の削平の状況を考慮すると、138SX022は堅穴住居の主柱穴のみ遺存した状況を示している可能性も考えられる。

B区

B区はA区に南接する調査区である。調査区の南側は近世以降の水田構築に伴い地下げが行われ、南西部は近代以降の客土が分布する。このため、一部の遺構は削平されているものの、本区全域で遺構の展開を確認することができ、遺構の遺存状況は比較的良好であるといえる。確認した主な遺構には、古墳時代初頭の堅穴住居跡5軒、戦国期の溝跡・井戸跡などがある。

B区SH001

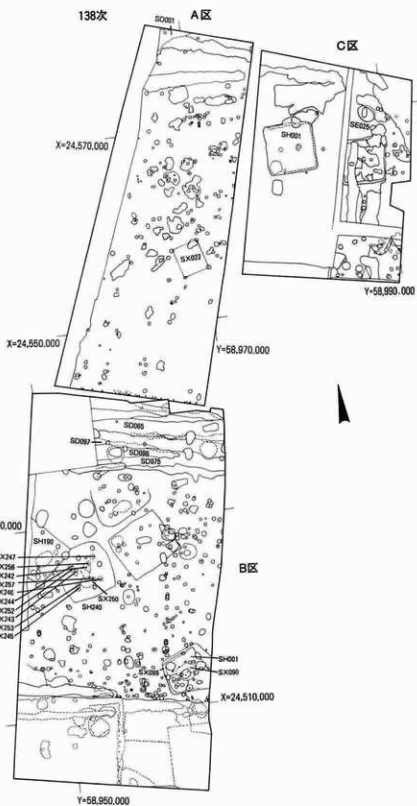
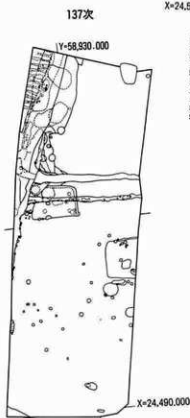
調査区の東端、南寄りで検出した堅穴住居跡である。住居の南東コーナーに相当する部分が調査区外に展開するため遺構の全容を判明するには至らなかったが、一辺が約5.5mの方形を呈する堅穴住居であると想定される。床面には土坑(138B区SX090)、周壁溝(138B区SX095)を伴う。住居床面には暗茶褐色土を基調とし黄褐色ブロック土を内包する貼床が認められる。138B区SH001の出土遺物には布留式系の甕など古墳時代初頭に比定されるものがある。

B区SH240

調査区のはほぼ中央で検出した堅穴住居跡で、住居の北西コーナーに相当する部分は138B区SH190と重複する。



第46図 調査区全景(南より)



第47図 遺構配置図(1/400)

下部遺跡群
第138次調査
H区 F-19/
r-s-20

平面形状は一边が約5.5mの正方形を呈し、遺存深度は約0.15mを測る。この住居は4本の主柱穴を配置し、屋内施設として地床炉、及び土坑を伴う構造を基本とするが、住居の造り替えが認められるという点で他の住居と異なる様相を示している。まず、建替前(旧)の主柱穴(138B区SX252・253・256・257)は柱間1.8m四方で構成され、柱穴の規模は径0.25~0.45m、深度0.4~0.45mを測る。北西側に位置する主柱穴(138B区SX252)に近接して地床炉(138B区SX243)が認められる。長軸約0.7m、短軸約0.1mを測り、断面形状は皿状を呈する。遺構埋土内に焼土、及び炭化物を多く内包する。次に、建替後(新)の主柱穴(138B区SX244~247)は柱間2.4m四方で構成され、柱穴の規模は径0.45~0.5m、深度0.25~0.5mを測る。北側に位置する主柱穴(138B区SX244・247)のほぼ中央に地床炉(138B区SX242)が認められる。長軸約1.1m、短軸約0.6mを測り、遺構埋土内に焼土を内包する。また、南側に位置する主柱穴(138B区SX245・246)のほぼ中央に、住居南辺に長軸を揃える形で土坑(138B区SX250)が認められる。長軸約1.65m、短軸約1.0mの平面楕円形で、断面形状は皿状を呈し、遺構埋土内に炭化物を内包する。出土遺物は主柱穴の変移前(旧)・後(新)の両時期に古墳時代初頭に比定されるものが確認された。ただし、4本の主柱穴で構成される内部空間と柱穴の規模に関しては、主柱穴の変移前と変移後に差異が認められ、変移前に比して変移後の規模が大きくなっている状況が看取される。なお、これらの状況と、住居の堅穴部壁に関しては拡張等の痕跡が認められないという点を考慮すると、堅穴部壁に関しては現位置を保持したまま、一時期に主柱穴の改修を行った状況が想定される。

B区SD065・075・096・097

調査区の北側に検出した東西方向に展開する溝状遺構である。138B区SD096は、138B区SD065・075・097に後出し遺構の東側部分は終息する。検出幅約1.0m、検出長約8.5m、深度約0.4mを測り断面形状はU字状を呈する。遺構内堆積埋土は暗灰褐色土を基調とするブロック土で構成され、138B区SD065・075・097を人為的に掘返した部分に相当する溝状遺構であると考えられる。138B区SD097は、138B区SD065・075に後出する。検出幅約1.35m、検出長約13.5m、深度約0.4mを測り断面形状は遺構上面幅の広いU字状を呈する。埋土内には多数の砂利を内包する。138B区SD065は075に後出する。検出幅約1.2m、検出長約14.0m、深度約0.8mを測り断面形状はV字状を呈する。出土遺物には京都系土師器、白磁椀V類(森田)の他、鉄滓を確認した。138B区SD075は検出幅約1.65m、検出長約13.0m、深度約0.45mを測り断面形状は逆台形を呈する。出土遺物には近世I期(乗岡福年)に比定される備前焼鉢、白磁椀V類(森田)、鉄滓などがある。これらの溝の先後関係は、新SD096→097→065→075 旧であるが、いずれの遺構も16世紀後半~末には廃絶したものと推定される。なお、特筆すべき点に、これらの溝と調査区南側で確認した2条の溝との関係があげられる。この2条の溝は前述した溝と同一方向に展開し、前年度調査が実施された「下郡遺跡群第137次調査」で確認された137SD020・025と接続する可能性が高い。同調査の所見によると、137SD020・025は14世紀以降に廃絶したものと考えられていたが、今次の調査で16世紀後半~末に比定される遺物が出土したことにより、帰属時期に関しては所見の変更が示されたことになる。さらに、この所見の変更をふまえ、137SD020・025と138B区SD065・075・096・097の所産年代を照合すると、両者は合致し、これらの溝が同時併存する段階があった可能性を指摘できる。また、137SD020・025が先述した溝同様、



第48図 138B区SH001遺物出土状況(北より)



第49図 138B区SH240発掘時(北より)

IX 下郡遺跡群第139次調査 F区n-8地点

調査面積	302㎡	調査期間	2002.06.28～02.08.08
地 域	A	調査担当	坪根伸也・松尾聡

今回の調査対象区域は、調査範囲の制約から北側部分(156㎡)を調査し、当該地の調査を終了し、埋め戻した後に南側部分(146㎡)について調査を実施する方法により行った。

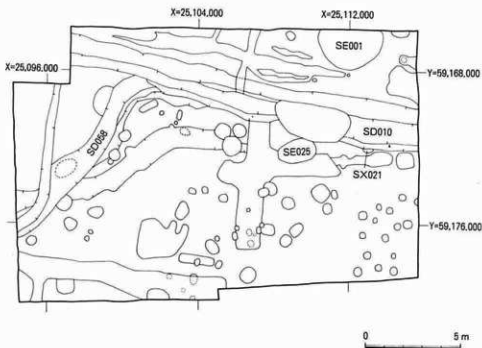
調査区全域には、約0.9mの厚さの客土が認められ、客土層直下において基盤土層(黄茶褐色土)を確認することができる。遺構検出面はこの基盤土層上面にあり、このような状況から近世以降の水田構築に伴い大規模な削平を受けたものと推定された。この想定を裏付けるように調査結果にみる遺構の遺存状況は総じて良好とはいえず、近世以降の遺構が主体を占めている。検出遺構には溝状遺構、井戸跡などがある。

139SD010は、調査区を南北に延びる溝状遺構であり、検出面からの深さ約0.3mを測り断面U字形を呈している。溝下部には暗灰色粘質土が堆積しており、帯水していた状況が想定される。溝埋土からの出土遺物は近世陶磁器を主体とするが、底部に糸切り離し痕を残す土師器皿や土師質の燗台などもあり、近隣に戦国時代に比定される遺構が存在していたことを示唆している。出土した近世陶磁器から18世紀後半以降に溝が機能を停止したと推定される。

139SD058は調査区の南側を西から南に弧を描くように展開する溝状遺構である。一部に9個程度の墓石を転用し、溝の肩を護岸する状況が認められた。溝埋土内から出土する近世陶磁器の様相から139SD010と同様に18世紀後半に埋没した状況が想定される。また、出土した墓石中には「寛文8年」(1668)の銘をもつものがある。



第51図 調査地点位置図



第52図 遺構配置図(1/200)



第53図 調査区北半全景(南より)

井戸跡は、調査区北西角(139SE001)と調査区中央(139SE025)において2基確認した。両井戸跡とも掘り下げ時に大量の湧水があり、そのため完掘することはできなかった。139SE001は、径約3.0mを測る井戸跡である。井戸の構造は素掘りであり、出土遺物には底部に糸切り痕を残す土師器皿、近世陶磁器などがある。出土遺物様相から18世紀末には埋没したと想定される。139SE025は土管を井筒として使用している。土管の接合部には漆喰状の用材が使用されている。また、井筒南側には張り出し部が認められ、設置位置から井戸構築の際の作業場として造られた可能性が高い。出土遺物は皆無であり、所産時期は不明である。



第54図 139SD058検出状況(南より)

他に桶を埋設した遺構(139SX021)が調査区北側において確認されている。径0.48m、現状での深度0.3mを測る。構造は、土坑内の底から5cm程度上位に桶を埋置したものであり、墓の可能性も想定されるが、積極的に墓とする考古学的な事象は調査段階では認められていない。出土遺物には、腕輪状を呈する木製品が1点あるが、他に時期比定を行えるような遺物の出土はなく、所産時期については不明である。

第139次調査地点の東側には、明治11年に開削された明治水路が存在し、遺構の削平を伴う大規模な地下げ地業はおそらくこの水路の設置に伴って実施されたものと推測される。同様の状況は明治水路を挟み対峙する位置関係にある第115次調査区(現在の下郡小学校敷地)においても認められ、ここでは東西方向の旧道を境として、南北で地下げにより遺構状況が大きく異なるといった様相が看取された。旧道南半では、古代の時期の遺構をはじめ、夥しい量の遺構・遺物を検出することができるが、0.5m以上の比高差を有する北半部では、当然ながら遺構は欠失し、散在的な分布を示すにすぎない。第139次調査地点も土層状況等から同様の経過をたどったものと想定され、本来は中世以前の遺構が存在していた可能性は高いものと考えられる。ちなみに、下郡遺跡群全体の古代遺構の分布状況から、主要道路遺構が交差する第139次地点の北側地域に大部分の政庁の存在を想定する意見もあるが、当該地点の過去の調査成果は、第139次調査地点と同じような状況を示し、郡衙政庁所在の想定が支持されるものであったとしても、関連遺構が遺存している可能性は残念ながら低いといわざるを得ない。

(坪根)

X 下郡遺跡群第141次調査 D区m-18地点

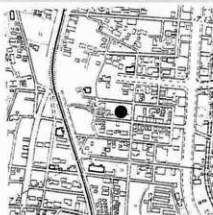
調査面積	214㎡	調査期間	2002.08.26～02.09.11
地 域	A	調査担当	坪根伸也・松尾聡

調査は民間のアパート建設に伴う事前調査として実施した。

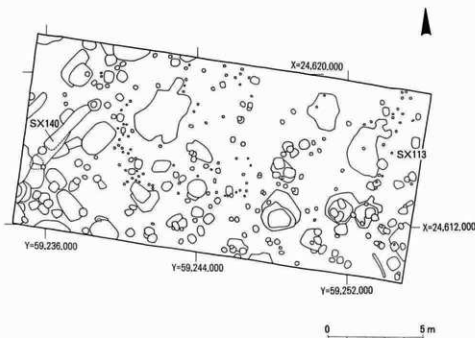
調査の結果、弥生時代中期を中心とする遺構群を確認した。検出遺構には、土坑、柱穴、溝状遺構がある。今次の調査地点は、現地表面から約0.6mの深さまで客土層が存在し、その下層の茶褐色土層、暗茶灰褐色土層を除去すると黄茶褐色を呈した基盤土があらわれる。遺構はこの基盤土層上面において確認することができる。遺構検出面標高は約5.1mである。

以下では主要遺構について説明を加える。

141SX140は、調査区西側で検出された長土坑である。遺構は同一場所に複数回の掘り返しが認められ、141SX140はこれらの中でも最も古い段階に位置づけることができるものと遺構の切り合い関係から判明する。両端は新出する遺構によって切られているため、正確な規模は不明だが、現状で約3.3m、最大幅0.8m、現存深度0.6mを測る。堆積埋土は上下二層に分層することができる。すなわち、上層は焼土粒、炭化物、黄褐色土ブロックを含む褐灰色土であり、下層は暗灰褐色土である。上層と同じく焼土粒、炭化物等を含むものの、若干の粘性を帯びている点で上層と大きく異なる。両層とも自然堆積によるものでなく、人為的に埋め戻された状況を示している。土坑の床面はフラットであり、短軸の断面はU字形を呈する。主軸はN-40°-Eの方向を示し、底面南側の壁面の立ち上がり部分には完形の壺を埋置する。遺構の具体的な性格については不明だが、先述したように、141SX140をはじめとする調査区西側には同一方位を意識した遺構群が重複するように構築されており、



第55図 調査地点位置図



第56図 遺構配置図(1/200)

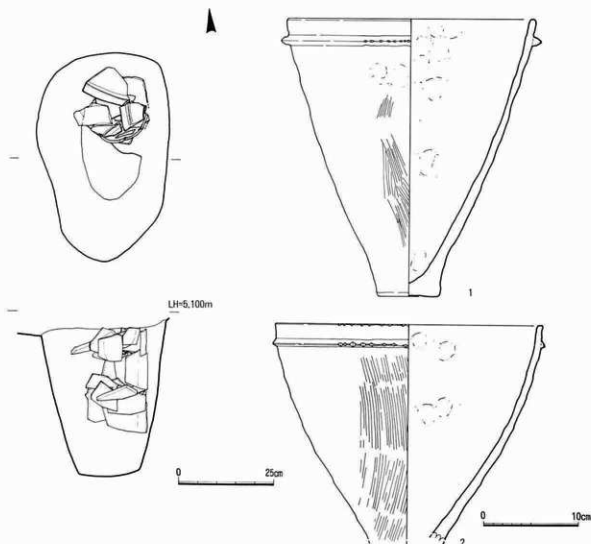
長土坑形態を呈するものが多い点をひとつの特徴とする。このような点から、これらが当該地点における何らかの区画を意図した遺構群である可能性も考えられる。

141SX113は調査区東壁付近で検出した土坑である。1.1×0.7mの平面規模を有し、現状での深さ0.8mを測る。遺構内埋土は炭化物、褐色粒子を僅かに含む暗灰褐色土であり、検出面から土坑中位まで破砕された壳破片が折り重なるように埋置している点を大きな特徴とする。これらの破片は接合作業の結果、二個体分の下城式甕であることが判明した。いかなる理由でこのような行為に及んだのか。具体的に明示することは現状ではできないが、出土状況から単なる廃棄行為に伴うものとは考え難い。今後類例の探索と蓄積をもってその性格を明らかにしていく必要がある。

(坪根)



第57図 141SX140遺物出土状況
(南より)



第58図 141SX113平面図・見透断面図(1/10)/遺物実測図(1/4)

XI 下郡遺跡群第142次調査 B区f-11・12地点

調査面積	100㎡	調査期間	2002.11.12～02.11.15
地 域	A	調査担当	坪根伸也・松尾聡

今次の調査地点は、下郡遺跡群内でも東側のエリアに位置し、既往の調査により弥生時代前期末から中期に及ぶ集落跡が検出されている地点に相当する。

調査は小中ツル公園敷地内の防火水槽の設置に伴う事前調査として実施した。

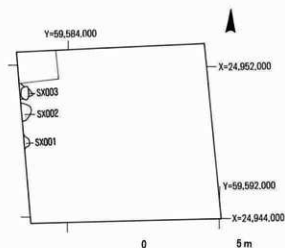
現地表面から約1.0mは黄白色土を基調とする客土層であり、当該層の下部には部分的ながら、水田耕作に伴う茶褐色土(硬質)が存在する。このような状況から、当地が公園として使用される以前には水田として利用されていたことが判明し、しかも公園化に伴い耕作土を削平した後客土を入っていたことが知られる。客土層下に散在的に遺存する耕作土の下部には明茶色土の堆積を約0.3m程度確認することができ、さらにその下層に暗青灰色砂質土の堆積が認められ、これが基盤土層となる。

遺構は暗褐色土上面から掘り込まれるが、水田構築の際に大規模な地下げを受けたためか遺存状況は良好でない。最も深い検出遺構でも5cm程度の深さが確認されるという状況である。こういった状況の中で遺構は調査区の北西壁付近で土坑を僅かに4基確認したのみである。また、暗褐色土中には遺物を包含する。暗褐色土層中からは東北部九州系の甕や下城式甕、口縁部上端面に浮文を付ける壺口縁部などが出土している。これらの土器はその様相から弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられるものであり、包含層の形成時期もほぼ当該時期と推定される。

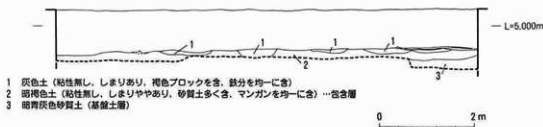
暗褐色土層上面で検出された遺構中からも少量ながら同様の特徴をもつ土器小片が出土するが、包含層中からのかき上げ遺物である可能性も否定できず、それ故、所産時期の特定にはいたっていない。現状では中期後葉以降ということになろう。第62図には包含層中から出土した土器資料の実測図を掲載した。01・02・07・08・09・10は直立気味に立ち上がる下城式甕であり、01・08～10には一条、02・07には2条の刻目突帯が貼付される。03は壺口縁部、04は底部、17は胴部の破片であるが、胎土の状況等から同種の壺の破片資料である可能性を指摘でき



第59図 調査地点位置図



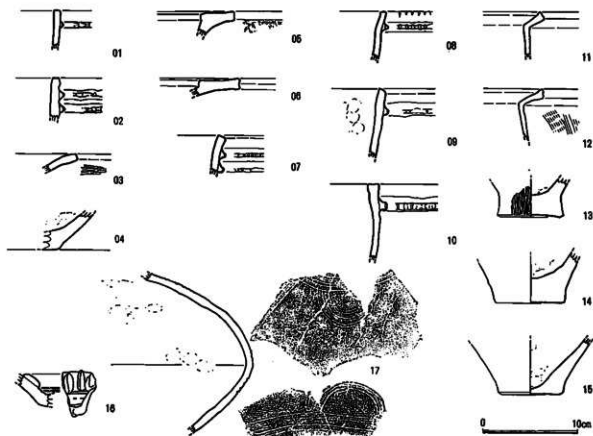
第60図 遺構配置図(1/200)



第61図 調査区西壁土層断面図(1/80)

る。同タイプの甕は、いわゆる下城式甕形土器として認識されているものに相当し、半截竹管状の工具により施文された二条一単位の直線文、重弧文を特徴とする。破片資料のため縦方向の直線文との関係は不明であるが、現状で確認できる施文順位は、下向き重弧文→上位の横方向の直線文、下位の横方向の直線文→上向き重弧文の順に施文がなされている点を沈線の切り合い関係から指摘することができる。また、器表面には、最終調整としてミガキが施されるが、ミガキは概して粗雑であり、文様施文後に実施されている。11・12は東北部九州系甕の口縁部破片である。口縁端部を跳ね上げ気味に成形する点を特徴とする。これらの甕は先述の下城式甕と供伴出土するが、図面上でも明らかにように、器壁の厚さに大きな差異がある。すなわち、下城式甕が5mm以上の器壁を一般的とするのに対して、後者は2～3mmと半分程度の厚さのもので占められる。色調にも違いが認められ、下城式系が暗茶褐色系の色調を呈し、東北部九州系の甕は黄褐色系の明るい色調を呈する点を特徴とする。

包含層中からは以上の他に姫島産黒曜石製の完形の石鐏が1点出土している。(坪根)



第62図 出土遺物実測図(1/4)

下部図は
新石器時代
の図(1/4)

XII 横尾遺跡第84次調査 C-22・23地点

調査面積 約783㎡ 調査期間 2001.06.11～02.07.15

地域 E 調査担当 塩地潤一・奥村義貴・小住武史・岩尾美保子

調査地は大野川の流れ・乙津川左岸に沿って南北方向に広がる鶴崎丘陵上、標高約31m地点に位置し、調査区の北西側に展開する開析谷に向かって東から西へ緩やかに傾斜する緩斜面にあたる。既往の調査によって、当該地一帯には弥生時代後期の環濠集落である多武尾遺跡をはじめとして、弥生時代～近世にかけての遺構群が確認されている。

今回の調査は大分市横尾土地区画整理事業による街路及び宅地造成に伴う事前調査として平成13年6月11日から実施したものである。7月4日に一時中断した後、同年10月30日に再開し、12月10日にA区の調査を終了した。翌14年5月8日からB区の拡張に伴って調査を再開し、同年7月15日に完了した。

以下に今回確認された主要遺構についてまとめる。

弥生時代

当該期の遺構としては溝状遺構(84SD105)が確認されている。

B区で確認された84SD105は幅約3.7m、深さ約0.5mを測る。第62・68次調査区で検出された多武尾遺跡の環濠遺構(62SD345・68SD080)と位置付けられている同一の溝状遺構と考えられるものの、第68次調査区で報告された滞水の痕跡は認められず、空濠であったと判断される。84SD105からは、頭部に2条突帯を貼付する甕片・凸レンズ状の底部を呈する壺片などが出土しており、これらの帰属年代より弥生時代後期後葉頃には埋没したと考えられる。

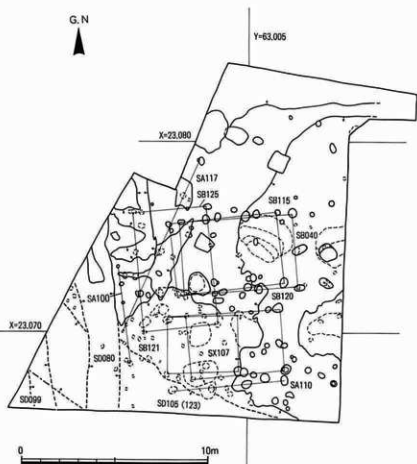
古代

当該期の遺構としては集石遺構(84SX122)と溝状遺構(84SD123)、そして欄列跡(84SA045・117)などが確認されている。

集石遺構(84SX122)は、先述した84SD105の掘り返しプラン(84SD123)内において検出されたもので、幅約1～1.5mの帯状を呈し、南面を揃えて大小の礫が直線状に配置されている。礫の敷かれている部分は厚さ約15cm



第63図 調査地点位置図



第64図 B区遺構配置図(1/200)

～25cmを測り、掘方(84SD123)内の埋土は硬化している。84SX122ならびに84SD123については、中世の事例ながらも、長崎県松浦市横瀬田遺跡や同県北有馬町今福遺跡において類例が認められる。これらは、浅いくぼみ内に帯状に礫が敷かれており、道路状遺構と位置付けられているものである。

今回検出された84SX122の集石面上層からは土師器杯c片・同杯a片、同蓋片などが出土しており、これらの所属年代より84SX122ならびにSD123については9世紀前半代には埋没したものと考えられる。

横尾地区における古代の道路状遺構についてはこれまでの調査によって2地点(第69・79次調査区)で確認されている。これらは共に9世紀代に比定され、前者は連続土坑を配置したもの、後者は夥しく切り合った柱穴がほぼ平行して2列に構築され、その空間を道路として使用したものであり、乙津川に向けて開口する間析谷の隣接地において検出されている。今回確認された集石遺構(84SX122)ならびに溝状遺構(84SD123)についても丘陵北西側に展開する間析谷の周辺地に位置しており、現時点では道路状遺構としての可能性を指摘しておきたい。しかしながら隣接する第68次調査地点ではこのような事象が確認されていないため、今後、検討を要する。

さらに、当該期の柵跡としてはA・B区でそれぞれ1条ずつ確認されている。A区東端で検出された84SA045については東西方向に延びており、調査区外に展開し、建物跡になる可能性も想定される。9世紀前半頃に比定される土師器蓋が出土している。B区で確認された84SA117については、検出された他の柵跡ならびに建物跡群とは主軸方向が異なり、84SD105に規制されて構築されたものであると想定される。出土遺物は皆無であり、厳密な所産時期については不明であるが、京都系土師器皿・備前播鉢片(乗岡堀年中世6b期)が出土している84SB125との新旧関係から、16世紀中頃以前に比定されることは明らかである。



第65図 B区全景(上が北)



第66図 SX122検出状況(西より)



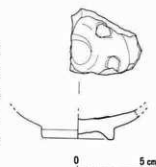
第67図 SX122土層断面(東より)

中世

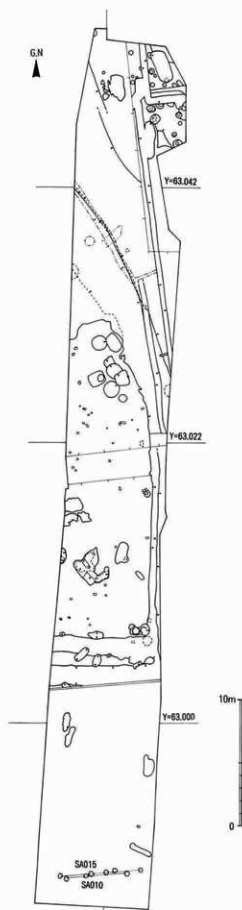
当該期の遺構としては掘立柱建物跡、柵跡、溝状遺構などが確認されている。

今回確認された溝状遺構(84SD080・099)については前者が幅約1m、深さ約0.2m、後者が幅約0.8m、深さ約0.1mを測り、南北方向に並走する。本調査区南側の第68次調査で確認された16世紀末に比定されている68SD001・007と一連の遺構である可能性が考えられるものである。さらに、第84次調査A区ではその延長線上において、柵跡を2条確認している。84SA010と84SA015は隣接して構築されており、84SA010からは16世紀後半に比定される京都系土師器皿が出土している。

掘立柱建物跡については5棟確認されている。84SB040ならびに84SB115については重複して構築され、(新旧関係については古い方から 84SB040→84SB115)建物



第68図 出土遺物実測図(1/3)



第69図 A区遺構配置図(1/300)

規模や主軸方向がほぼ同一であることから、建て替えによるものと考えられる。84SB040からは瓦質擂鉢・土鈴・京都系土師器皿が出土しており、その帰属年代から16世紀後半に比定される。

また、84SB121と84SB120については直接の重複関



第70図 B区全景(上が北)

係はないものの、新旧関係(84SB121→84SX107→84SB120)が認められる。両者は、建物の西面が揃うことからほぼ同時期に存在していた可能性が考えられる。

さらに、84SX107については平面隅丸方形を呈し、床面が平坦な土坑である。人為的な堆積土により埋没しており、人頭大の礫が多数確認できることから、墳墓の可能性が想定される。また、84SX075についても同様の現象が認められ、染付皿・群片・備前擂鉢片(乗岡編年中世5a期)などが出土していることから、16世紀前半に比定される。

一方、B区南端において確認された84SA110からは9世紀前半に比定される土師器杯片が出土しているものの、建物群と主軸方向が同一であることから16世紀代の遺構である可能性も考えられる。また、調査区外に展開し、建物跡になることも想定される。

今回確認された掘立柱建物跡(84B040・115・120・121・125)については、溝状遺構(84SD080・099)・構跡(84SA010・015・100・110)と共に、一定の規則性をもって構築されたものであると考えられる。

当該期に比定される遺物としては、近代遺構からの出土品ではあるものの、朝鮮王朝産白磁碗が確認されており、注目される。

横尾遺跡が位置する鶴崎丘陵一帯は中世高田庄に比定されている地域であり、南北朝時代には豊後国の守護大友氏の所領となった荘園にあたる。このような状況の中、鶴崎丘陵上における既往の調査では、猪野新土井遺跡や猪野中原遺跡など半町規模の方形館跡が連立し、横尾遺跡(第79・81・83次調査区)においても同規模の方形館跡の存在が指摘されはじめています。

その北西約240mの地点に位置する今回の調査地において、方形館跡と同時期の遺構群の存在が確認できたことは大変注目されるものであり、今後の調査が期待される。(塩地・奥村・小住)

<参考文献>

波部 徹也 1994「古道について—主に官道以外の事例から—」
『古文化談叢第33集』九州古文化研究会

XIII 中世大友府内町跡第17次調査(A区)

調査面積	497㎡	調査期間	2002.05.17～02.11.10
地域	A	調査担当	河野史郎・上野淳也

中世大友府内町跡第17次調査区は、中世府内町に存在する3本ないし4本の南北道路のうち、最も東に位置する万寿寺を起点とする南北道路沿い、推定清忠寺町もしくは横町に設定された調査区である。

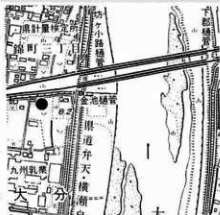
調査の結果、概ねⅠ～Ⅳ期にわたる遺構変遷(14世紀後半～16世紀末)が確認された。今回は、特に鍛冶関連遺構がまとまって確認されたⅣ期の主要遺構及び出土遺物の概要を記す。

Ⅳ期の遺構面からは、鍛冶炉(SX025)、廃棄土坑(SK161・245・369)等の鍛冶関連遺構及び、万寿寺を起点とする南北道路の一部(SF101)、さらにこれに直行して東に延びる東西道路跡(SF100)、その他井戸跡(SE212・249)等が検出された。

これらの遺構群の中で特に鍛冶関連遺構については、東側をSD063とした、床面に石が詰まった状態で検出された南北方向に伸びる溝跡、北側の県教委の調査で確認された東西方向の石列、西側及び南側を、南北道路やこれに直行する形で検出された道路状遺構(SF100)によって区画された内側(鍛冶炉については一部南北道路にはみ出している)で集中して検出されている。一方、井戸等の生活関連遺構は、この区画の外側で検出されていることから、これらの区画施設が、火を扱う鍛冶関連の作業に対する遮蔽施設であった可能性を有している。

出土遺物については、京都系土師器皿、中国染付碗C・E群、同皿B・C・E・F群、漳州窯系染付碗・皿、白磁皿、青磁碗、瀬戸・美濃産陶器、備前焼堿・播鉢(乗岡福年近世1期b)等がある。特に鍛冶関連の遺物に関しては、大量に出土した碗形鉄滓、砥石、鉄床石、石製轆轤口、小刀(刀子)等が注目される。加えて、鋳型状土製品及び埴壇も出土していることから、あるいは簡易な細工物も同時に行われた可能性も考えられる。

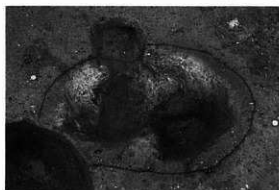
以上、Ⅳ期の遺構面から検出された遺構群の位置付けについては、特に鍛冶関連の遺構群が注目される。これ



第71図 調査地点位置図



第72図 調査区全景(上が北)

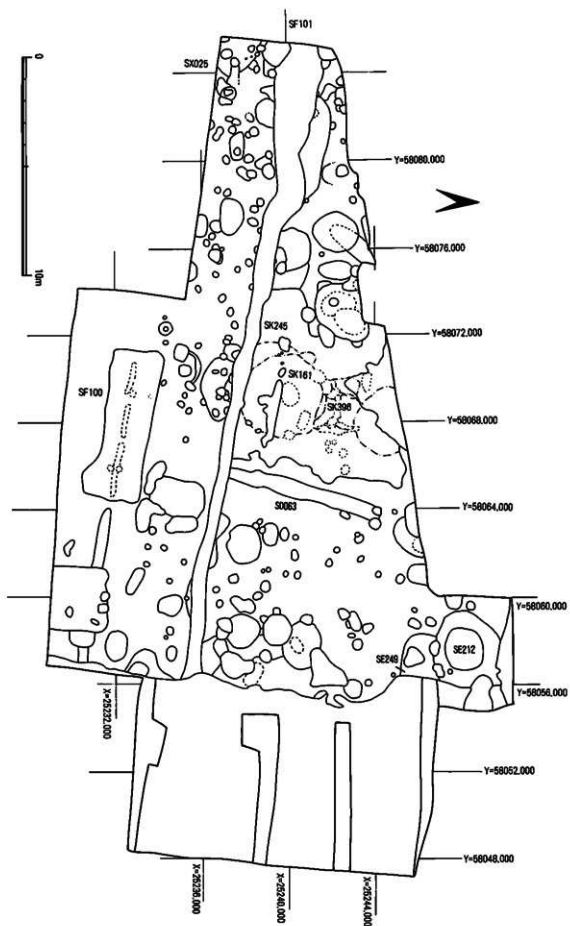


第73図 SX025炉本体近景



第74図 SX025全景

中世大友
府内町跡
第17次調査



第75圖 遺構配置圖 (1/200)

らの遺構群は、①鍛冶を行う際の基礎工事の痕跡が確認されている鍛冶炉(SX025)の存在、②耐久性の高い石製羽口及び碗形鉄滓が大量に出土する状況、③鍛冶に関連する大量の廃棄物を想定した大型の廃棄土坑(SK161・245・369)の存在、④簡易な細工物等も同時作られていた状況等から、館内や寺内における一時的な鍛冶とは違い、付属品を含む鍛冶製品の生産・修理等が長期間にわたって行われた状況を示す遺構群であることがいえる。即ち鍛冶職人の定住がこの調査区から窺えるのである。

一方でこれらの遺構群は、その規模等から大友氏の御用鍛冶としての位置付けに至るものではない。加えて、県教委で調査された道路向かいの調査区の状況を見ると、同様の鍛冶遺構群が展開する状況ではないことから、これらの遺構群の展開が職人町として両側町を形成するには至っていない状況も確認できる。

これらのことから今回確認された鍛冶関連の遺構群の位置付けを考えると、支配階級によって集住させられた御用鍛冶的な位置付けではなく、中世府内の都市としての発展に伴って、都市民の内部需要の高まりに伴って成立した鍛冶屋であることが推定される。

このように考えた場合、今回の調査区内から一定量出土している小刀(柄の部分銅製で、細工が施されている)であるが、中世府内町の発掘調査で普遍的に出土するものであり、武士階級以外の人々も所有できたであろうこうした製品が、この鍛冶屋の主力の生産品であったとも考えることができる。したがって、今回確認された鍛冶関連遺構が展開するこの空間については、こうした小刀の生産に加えて刀剣類の修理等も行う「町の鍛冶屋」的な存在となり、近世府内町の「鍛冶屋町」成立前段階となる中世段階の「職人の都市への集住」の一端を示す好例となった。

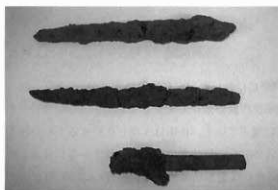
(河野)



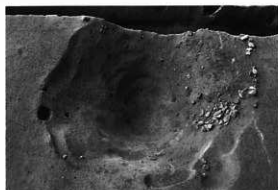
第76図 石製羽口



第77図 碗形鉄滓



第78図 小刀



第79図 SX161全景

中世大友
府内町跡
第17次調査

XIV 城原・里遺跡第5次調査

調査面積 1617㎡ 調査期間 2002.06.01～02.09.30
地 域 F 調査担当 池邊千太郎・羽田野達郎

城原・里遺跡は、大分市大字里に所在し、東西に延びる標高40mの台地上に立地している。また、海部郡衙の推定地とされる城原・里遺跡第2～4次調査(中安遺跡)は、400m西側に位置している。今回の調査は、市道の城原・里線の拡幅工事に伴い実施された。出土した遺構は、主なものとして弥生時代中期の円形の竪穴住居跡2軒、7世紀前半～中頃の方形の竪穴住居跡6軒、7世紀中頃～末の掘立柱建物跡9棟が確認された。中でも掘立柱建物跡は、一定の規格性をもって配置されており、それらが3時期に継続しながら移り変わっていく状況が見られた。以下、主要遺構を時期別に記述する。

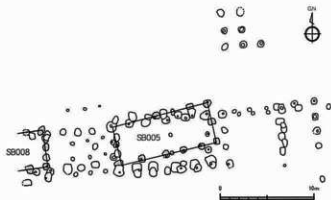


第80図 調査地点位置図

建物群1期は、東西方向に延びる2棟の掘立柱建物跡(SB005・008)で、いずれの建物も方形の竪穴住居跡を切るような状況で検出されている。柱穴検出段階では、時期を決定できる遺物は出土していないが、建物の北側には、方形の竪穴住居跡(S118)が検出されており、都城系土師器の碗、須恵器の蓋・坏等、7世紀第2四半期の時期のものが見つかっている。このことからこれら出土遺物と同時期、もしくはやや下った年代が考えられる。

1期建物法量表

遺構名	規 模	方 位	柱 間 寸 法	柱穴の形	柱穴の規模
SB005	2×5間(4.4×10.5m)	N-12°-W	1.9～2.7×2.0～2.2m	隅丸方形	70～80cm
SB008	2×1+α(3.9×1.9+αm)	N-11°-W	1.8～1.9×1.9m	隅丸方形	70cm

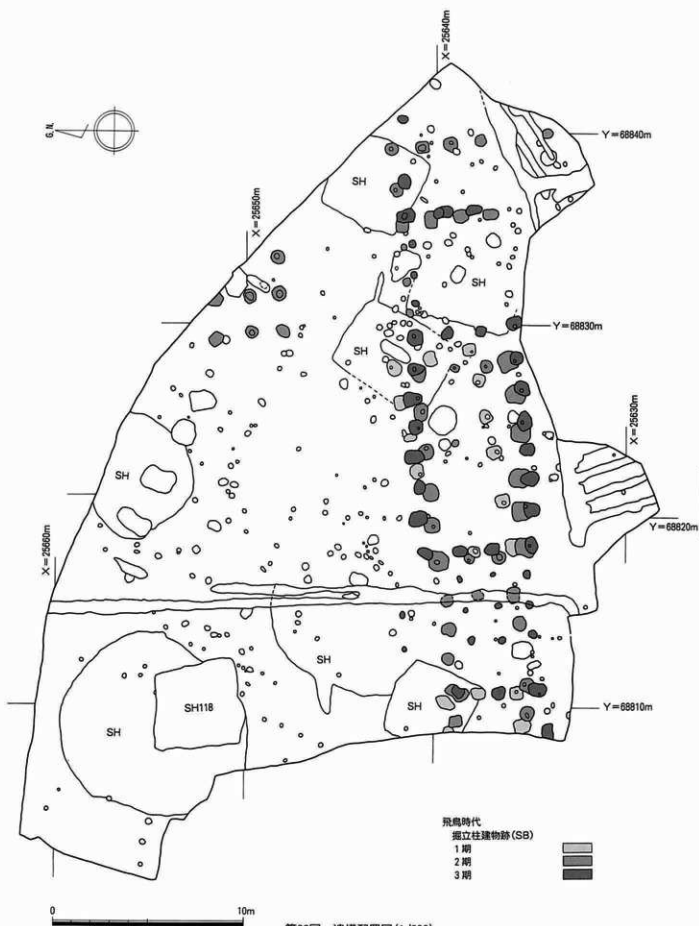


第81図 1期建物配置図(1/400)



第82図 2期建物S038遺物出土状況

建物群2期は、1期の建物を踏襲する状況で確認され、北側部には総柱の掘立柱建物跡(SB001)があり、南北に延びる掘立柱建物跡(SB002)に直行するようにSB004とSB006が西側に延びて配置している。なお、SB002とSB004との間には2間の欄柵を設置し、北側の柱列面を一直線に揃えている。柱間は1期と比較するとやや短くなっている。遺物は、SB002の掘立柱建物跡の西側の桁行の柱穴(S008)の柱抜き取り後の堆積土から都城系土師器皿、須恵器の坏蓋・坏身などが出土した。SB004の柱穴(S038)からは完形品の須恵器の坏蓋(第85図2)が出土している。時期は、いずれも7世紀第3四半期と考えられる。

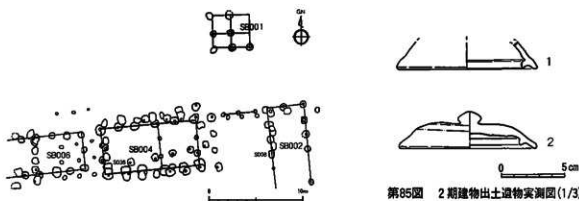


城原・里道跡
第5次調査

第83図 遺構配置図(1/200)

2 期建物法量表

遺構名	規 模	方 位	柱 間 寸 法	柱穴の形	柱穴の規模
SB001	2×2 間(3.6×3.9m)	N-6°-W	1.8~1.9×1.8~1.9m	円形	70~75cm
SB002	2×5 間(3.9×8.2m+αm)	N-7°-W	1.5×2.1m	隅丸方形	70cm
SB004	3×5 間(4.8×10.1m)	N-7°-W	1.9~2.2×1.6~1.7m	隅丸方形	80~100cm
SB006	2×5+α 間(3.8×8+αm)	N-6°-W	1.6~1.8×1.9m	不整隅丸方形	60~70cm



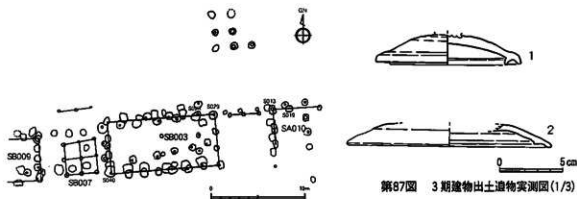
第84図 2期建物配置図(1/400)

建物群3期は、2期の建物群を踏襲する状況で検出され、中心的な建物(SB003)の規模は3×7間と最大になっている。南面は、SB007とSB009と面を真直ぐに合わせている。柱間は最も短く、柱穴の掘り方は1・2期と比較すると粗雑化が目立つ。

遺物は、東側に位置する橋跡(SA010)の柱穴(S013-019)からは、都城系土師器の皿が出土している。中心的な建物跡(SB003)の柱穴群に含まれるS023からは、完形品に近い須恵器の坏蓋(第87図1)、S029からは都城系土師器の皿、S040からは須恵器の坏蓋(第87図2)が出土している。これらの出土遺物から、遺構の最終埋没時期は7世紀第4四半期と考えられる。

3 期建物法量表

遺構名	規 模	方 位	柱 間 寸 法	柱穴の形	柱穴の規模
SB003	3×7 間(5.4×11.4m)	N-4°-W	1.5~1.7×1.9m	不整隅丸方形	70~85cm
SB007	2×2 間(3.4×3.4m)	N-6°-W	1.7~1.8×1.6~1.7m	円形	30~40cm
SB009	2×1+α 間(4.6+αm)	N-4°-W	1.5~1.8×2.2m	不整隅丸方形	80~100cm

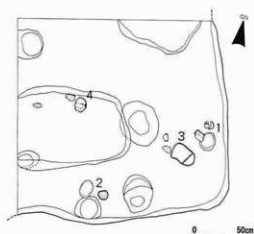


第86図 3期建物配置図(1/400)

堅穴住居跡(SH118)は、大型建物跡群との切り合いがなく並列した配置に造られている。大型掘立柱建物群の北側に位置し、4.0×4.5mの方形の堅穴住居跡である。遺構の確認のために東南側の一角を掘り下げを行ったところ、住居跡の埋土から都城系土師器の椀や須恵器の坏蓋・坏身、土師器の甕などが出土した。出土した遺物より、時期は7世紀第2四半期であることが考えられる。

以上の調査状況から、大型掘立柱建物群は2期の段階より南北に延びる建物と東西に延びる建物が規格性をもって配置されていることが分かった。出土遺物には、都城系土師器の皿・椀、須恵器の坏身・坏蓋が出土しており、時期的に7世紀中頃～末の範疇に収まるものである。こうした遺構の特徴や遺物の種類などから、城原・里遺跡第2～4次調査区の大型掘立柱建物群は、官衙遺跡あるいは豪族の居宅などが想定される。この時期は、孝徳朝以降に始められた評制時代であり、大宝令の施行によって郡制に転換するまで継続した頃にあたる。また、確認された遺構群は、城原・里遺跡第3次調査区(中安遺跡)の所見と年代的につながっていくことも認められるため、海部郡衙の歴史の変遷の始まりが明らかになるのではないかとすることも提示する調査となった。

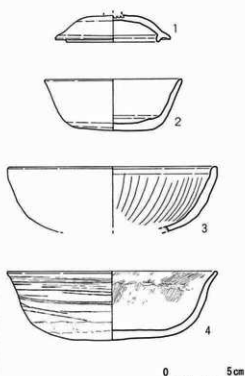
(羽田野)



第88図 SH118住居跡遺構実測図(1/40)



第90図 A区全景(上が北)



第89図 SH118住居跡出土遺物実測図(1/3)

XV 賀来西遺跡第1次調査

調査面積	160m ²	調査期間	2002.10.01～02.10.31
地域	B	調査担当	塔鼻光司・萩幸二・松竹智之・松尾聡

賀来西遺跡は大分市西部に位置する。大分川中流域の支流、賀来川下流の北岸に立地し、標高約14mである。遺跡南東側に賀来中学校校遺跡があり、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落が形成されている。北側には蓬萊山古墳(古墳時代前期)・丑殿古墳(古墳時代後期)が存在し、その周辺には千代丸古墳(古墳時代後期)や横穴墓群が分布する。また、中世には賀来庄として賀来氏の支配地域となる。

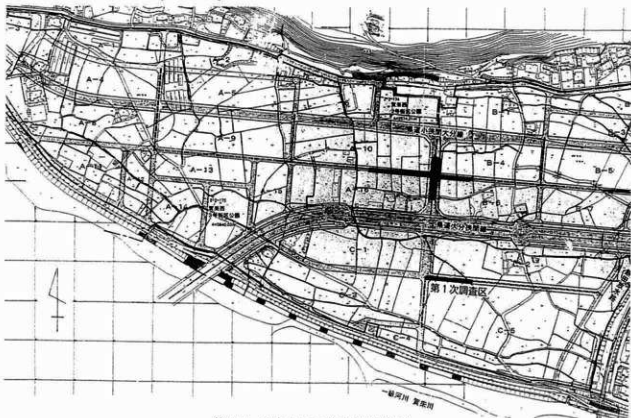
当遺跡では、平成14年4～5月にかけて確認調査を実施した。近現代から13世紀を上限とする水田及び弥生時代後期に比定される住居跡等の存在が調査によって判明した。この結果をうけて平成15年度の調査方針が決定し、区画整理が行われる大半は盛土保存により調査を行わないが、道路建設に伴うボックス設置箇所においてのみ本調査を実施した。

今次の調査区では計11面の水田が確認された。基本層序は、まず近現代の水田が存在し、下層に13世紀(上限)から近世以前の水田が2面形成されている。さらにその下層にS-01～04の12世紀後半から13世紀に比定される水田がある。以下、S-01～04の水田の様相について記述する。

S-01は近世水田下3枚目に該当し、近世水田の中で唯一耕土及び床土が残存する。調査区東西両端・中央部西寄りにおいて畦畔を確認し、東端及び中央部畦畔には溝状遺構が付随する。出土遺物の様相より13世紀には水田として機能していたと考えられる。



第91図 調査地点位置図



第92図 調査トレンチ位置図(1/600)

S-02は近世水田下4枚目になる。畦畔を調査区東西両端及び中央西寄りにおいて3基検出した。また中央部畦畔には溝状遺構が伴っていた。出土遺物よりS-01と時期差が認められず、13世紀には機能を停止していたものと推定される。

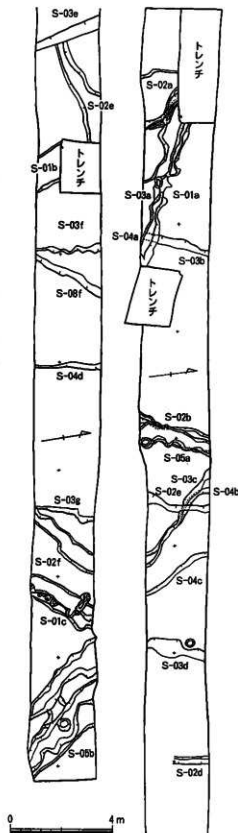
S-03は近世水田下6枚目の水田である。調査区東西両端に2基、中央部付近に4基、計6基の畦畔が確認された。また、調査区西端部では牛足痕を確認した。出土遺物は僅少であり、所産時期を特定するには至らないが層位より13世紀を下らないと思われる。

S-04と称した8枚目の水田は、旧河道の砂礫上に形成されている。調査区中央部・東西両端において畦畔を検出した。付随する溝状遺構は確認することができなかった。時期比定が行える遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるがS-03同様13世紀以前としておきたい。

今回の調査によって以下の事象が確認できた。①近現代を含め水田を11面確認した。②近世以前の水田は、調査区中央部にかけて摺り鉢状に傾斜していく様相が看取でき、近世段階に水田の改変を行い今日の景観が形成された。③調査区中央部分にのみS-02、S-03に被覆され畦畔1基を伴う水田が残存する。④調査区中央部に存在する2枚の水田は、13世紀(上段)から近世以前までの時期が想定される。⑤検出した畦畔の大半は、真北よりやや西に振り、南北方向に形成されているが、東西方向に主軸をもつ畦畔も存在する。

今次調査では、弥生時代・古墳時代の水田は確認することはできなかった。しかし、周辺地域には当該期の集落及び墓域が形成されていることから今後の調査に期待される。

(松尾)



第93図 遺構配置図(1/150)

XVI 大道遺跡群第2次調査

調査面積	432㎡	調査期間	2002.04.17～02.06.27
地 域	A	調査担当	後藤典幸・梅田昭宏・勝岡田あや

当調査地は上野台地の北側、緩やかな低丘陵の斜面に位置し、西側は大道条里跡に比定される。

層序は大別し、真砂土等が堆積する盛土と水田面と考えられる複数の土層が堆積する。地山と認められる堆積は調査区中央部のSD002北側付近まで平坦に広がり、徐々に傾斜する。調査区北側は低湿地と考えられる。

SD002は溝状遺構である。検出面において全長19.6m、最大幅約2.2m、深さ約0.36mを測る。断面は逆台形状を呈する。溝状遺構の底面には複雑な起伏が認められる。また、砂層の堆積を含むことから、流水していた可能性が考えられる。GN-62°-Wを示し、調査区外へ延長する。土師器・白磁碗・須恵器大型製品・黒色土器塊A類が出土した。出土した白磁碗から中世以降に埋没した可能性が考えられる。

SD004はSD002に接する溝である。南から北に向かい深く掘削されており、接点付近において最も深くなる。SD002との切り合いを示す堆積は検出されていない。検出面において全長9.0m、最大幅約1.3m、深さ約0.54mを測り、GN-20°-Eを指向する。断面はU字状を呈する。砂層及びラミナ性土壌の堆積等が認められ、流水していた可能性が考えられる。埋土中に大小の円礫を大量に含むこと等から、一挙に埋没した可能性が示唆される。

SD015はSD002と接するU字型の小幅な溝状遺構である。SD002との接点において、人頭大の礫が出土した(第96図)。SD002は流水の痕跡が認められることから、止水を目的とする何らかの機能を有していた可能性が考えられる。遺物の摩滅が顕著な為、SD004・015の時期比定は困難である。

当調査地の周辺では、数条の溝状遺構が検出されている。延長方向は若干異なるが基本的に東西方向を指向する事が認められ、上野丘陵の裾を微地形に制約がされながら巡る可能性が高いと考えられる。また、多くの溝状遺構には水性堆積が確認され、水利に関連する遺構と判断される。

(梅田)



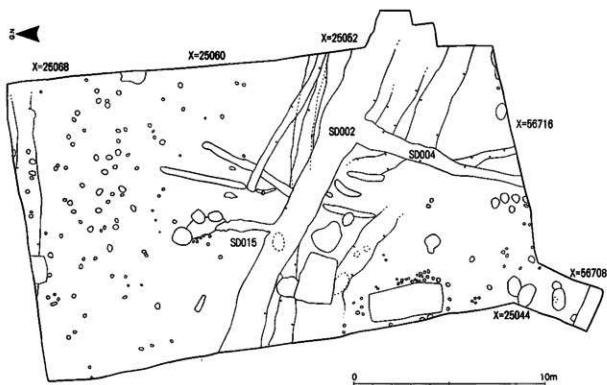
第94図 調査区位置図



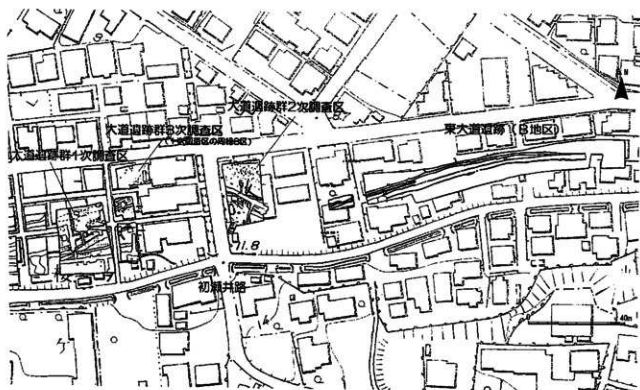
第95図 調査区全景(上が東)



第96図 SD015円礫出土状況(東より)



第97図 遺構配置図 (1/200)



第98図 周辺調査区位置図 (1/1600)

XVI 大道遺跡群第3次調査

調査面積	694㎡	調査期間	2002.08.31～02.12.12
地 域	A	調査担当	後藤典幸・梅田昭宏・勝岡田あや

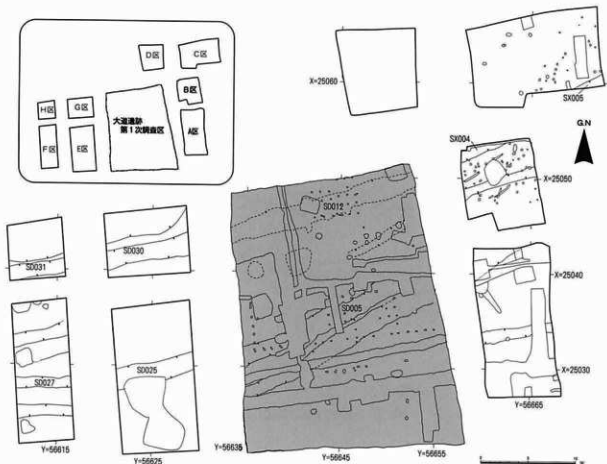
調査区は上野台地の北側裾部にあたり、大道遺跡群第1次調査区(以下、1次調査区)に隣接する。調査地は各種配管が設置されている現状から、A～Hの8区(下図、太線枠内を参照)に分割した。黄褐色土から形成される地山は南に向かい緩やかに傾斜し、水田耕作土と推定される土層が徐々に厚く堆積する。

E区において検出されたSD025は溝状遺構である。最大幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。断面は台形状を呈する。埋土中からは離散した状態で円礫が確認される。F区において検出されたSD027及び1次調査区におけるSD005と延長方向が一致し、同様に一定量の円礫が確認されることから、本来、連結していた可能性が極めて高い。遺物は備前焼埴鉢・鍋・青磁・奈良火鉢(第103図5)等が出土している。備前焼埴鉢より15世紀後半に埋没した可能性が示唆される。

G区のSD030、H区のSD031は溝状遺構である。最大幅約1.0m、深さ約0.3mを測る。地山を切り込む形で検出される。深鉢と考えられる摩滅した縄文土器片や弥生土器片、植物遺体等が出土する。1次調査区において検



第99図 調査地点位置図



第100図 遺構配置図(1/300)



第101図 G区完掘状況(西より)



第102図 G区東壁土層堆積状況(西より)

出されたSD012の延長方向と規模等が、ほぼ一致することから、三者は同様の溝状遺構と考えられる。遺物は微細であり摩滅している為、時期比定は困難である。

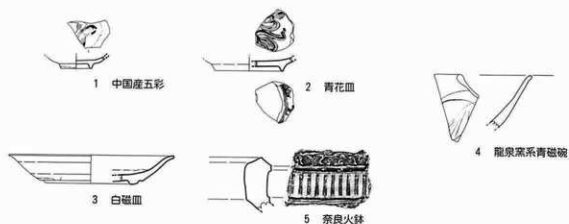
G区では、黒色土より形成される第8層下から、中国産五彩(第103図1)、青花皿(第103図2)、白磁皿(第103図3)、龍泉窯系青磁碗(第103図4)などの輸入陶磁器が出土する。遺物は散見される程度であるが、中世大友府内町跡において出土する遺物と質的に同様の傾向を示す。褐色土より形成される第11層は撚拌痕跡が確認される。しかし、これに伴う遺構は検出されていない。

当調査地において溝状遺構を確認した。SD030・031は1次調査区において検出した溝状遺構SD012と連結する。B区のSX004、C区のSX005は、ほぼ延長線上に位置する事や、なだらかに降る掘形を呈しており、微小ながら溝状遺構の可能性を有する。これらを含めると総延長は約84mに達し、更に延長すると推定される。

SD025及びSD027は、1次調査区のSD005と連結すると考えられる。これらの溝状遺構は出土遺物から、15世紀後半に帰属する遺構と考えられ、同じ考察が示されたSD005の年代観を再確認した。

今後の調査においては、調査区北側に位置するSD012等の帰属時期の検証が課題として挙げられ、これらの埋没年代及び構築目的を示す具体的な資料の提示が望まれる。

(梅田)



第103図 出土遺物実測図(1/3)

XVII 大道遺跡群第4次調査

調査面積	1280㎡	調査期間	2002.01.06～02.03.19
地 域	A	調査担当	高島豊・梅田昭宏

大分市金池南町1丁目、上野台地北側の沖積低地に位置する。調査区の近隣では、南金池遺跡、東田室遺跡、大道遺跡群等の発掘調査が進められ、概ね弥生時代から中世に属する遺構・遺物群が報告されている。西側は大道条里跡に比定されており、干線はGN-35°Eと考えられている。

調査区は試掘調査により、旧河道に挟まれた島状に分布する微高地である可能性が示唆された。出土した遺物は弥生時代から古代に属すると判断され、当該期の遺構の存在が予測された。

黄褐色土の安定地盤面(標高約4.6m)から遺構を検出した。

SD003は断面台形状の溝状遺構である。調査区内において北西から南東方向に約40m縦貫し、最大幅約7.0m、深さ約0.6mを測る。大部分は粘質の黒色土によって覆われ、南東に向かい浅くなり、次第に下層の砂質土が検出面に現れる。遺構中央部付近は緩やかに傾斜し、平面形においては南側に向かい大きく広がる。

土層観察の結果、顕著な砂層の堆積、鉄分沈着による硬質化及びラミナ土壌が認められ、流水の痕跡と判断した。杭が散見されること等から水路の可能性が考えられる。出土遺物は概ね古代に帰属する。土師器杯、須恵器杯、黒色土器碗A類、緑軸陶器碗(第108図1)、灰軸陶器皿(第108図2)、都城系土師器高坏(第108図3)等が出土する。遺構は9世紀前半以降に埋没したと考えられる。

SE037は円形状の平面プランを有する井戸跡である。SD003によって切られる。上部に土坑(SK034)が存在し、顕著な炭化物の堆積が残存する。埋没後に再度掘り返し、火を使用した祭祀等の痕跡と判断される。井戸跡は素堀りであり、最下層の湧水点において、古墳時代初頭に属する土師器甕2個体が出土した。土器はそれぞれ横転、倒立していた。出土状況から埋置と判断される。土層断面の観察において、地山形成土を母材とする黄褐色ブロック土と黒色土の混在した堆積が確認される。よって最下層の土器は井戸廃絶時において埋置され、人為的に埋められた可能性が高い。

SX002は長方形形状の平面プランを呈する遺構である。長軸約4.2m、短軸約4.1m、深さ0.01mを測る。後世の削平により大半は欠失し、灰褐色土で覆われる。南の壁際には炭化物の堆積が認められる。床面直上の複数の土器から古墳時代以降に埋没した可能性が考えられる。

SX004は長方形形状の平面プランを呈する遺構である。長軸約4.2m、短軸約4.1m、深さ0.05mを測る。黒色土により埋没する。遺構に伴う柱穴は確認されない。遺物は僅かに出土するが、時期比定は困難である。古代に比定される溝状遺構(SD017)に切られる為、この遺構の構築時には機能を失うと考えられる。

SX002及びSX004は堅穴住居跡である可能性が考えられる。しかし、炉跡や柱穴等が存在しないことから、堅穴住居跡とする条件を十分に満たさないと判断し、堅穴遺構として捉えた。



第104図 調査地点位置図



第105図 調査区全景

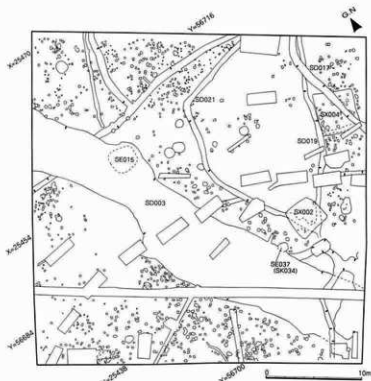


第106図 緑軸陶器出土状況(南西より)

当調査区において溝状遺構、堅穴遺構、素掘り井戸跡、小穴群等を検出した。SD003はG N-60°-Wを指向する為、比定されている条里地割とは異なる。また、堅穴遺構及び他の溝状遺構は、別方向に指向する事を確認した。

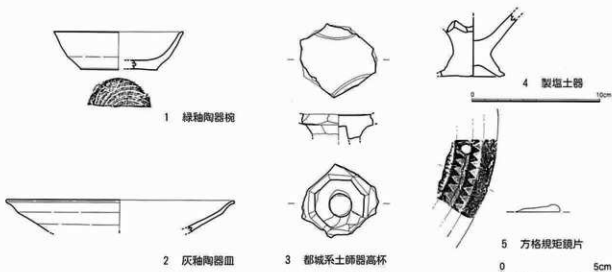
古代に帰属する遺構、特にSD003は、官衙遺跡に通有な遺物が出土する。これは、国衙推定地に比定される近縁の上野台地丘陵部及び古国府との関連を想定させ、調査地の周辺において、このような遺構が確認される可能性が示唆される。また、製塩土器(第108図4)の出土は、河口付近の微高地上に位置する立地条件から、今後の調査における一課題として注目される。

なお、当調査区においては表土剥ぎ作業時に方格規矩鏡片(第108図5)が出土した。鏡片は大分県下において、住居跡以外で出土した事例は少ない。このことから、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡が周辺に存在している可能性を考え、併せて把握することが望まれる。



第107図 遺構配置図(1/400)

(梅田)



第108図 遺物実測図 1~4 (1/3) / 5 (1/2)

XIX 南金池遺跡第4次調査

調査面積	216㎡	調査期間	2002.07.10～02.08.31
地域	A	調査担当	後藤典幸・梅田昭宏・勝間田あや

当調査は大分駅周辺総合整備事業の土地区画整理事業に伴い実施した。調査地は大分市顕徳町1丁目に所在し、前年度に調査された南金池第3次調査区の南側に位置する。調査区を2つに分割し、東側をA調査区、西側をB調査区(以下A区・B区)と設定した。

南金池第2次調査及び第3次調査の報告より、古代と考えられる遺構が埋没している可能性が示唆され、当該期の建物跡及び製塩関連遺構の検出が期待された。

A区は、約48㎡を対象とした。機械掘削の後、石炭殻を含む堆積層を除去し、淡褐色砂質土層より人力による掘削作業を行った。標高約3.3m付近において褐色砂質土の安定地盤面に達した。遺構はこの面を切り込む形で検出され、根気が残存する柱穴等を確認した。

須恵器、土師器、火鉢、青磁片、中国産焼締陶器等が出土した。しかし、遺物は総じて少なく時期の特定は困難である。

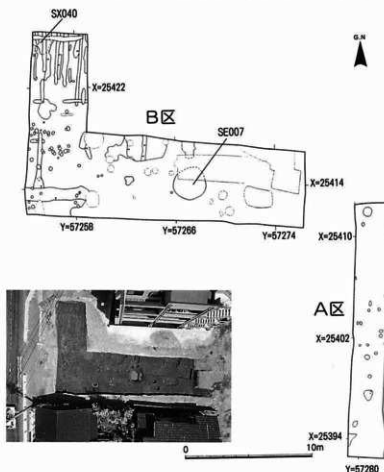
B区は、約168㎡を測る。A区とはほぼ同様の堆積を示す。遺構は帯状耕作痕、井戸跡、土坑、ピット等を検出した。

SX040は調査区北端において検出した遺構である。遺構は調査区外へおおよそ、平面形は不明であるが、皿状に窪む形状、焼土痕跡や炭化物を含むことから、本来、何らかの焼成を目的とした土坑である可能性が高い。遺物は散在的に確認され、土師器坏(第112図1)、土師器甕(第112図2)、企救型甕(第112図3)、双孔棒状土鍾(第112図4)、製塩土器等が出土する。遺物は概ね9世紀前半に位置付けられる。

SE007は井戸跡と考えられる。楕円形状の平面プランを呈する。遺物は土師器、須恵器長頸壺、木片等が確認される。最下層の水溜部においては、鍋片(第112図5)及び瓦器片が出土する。また、曲物と考えられる筒状の木製品も出土した。この曲物は本来、取水・浄化の機能を有したと推定される。土層観察においては、第6層に地山形成土を母材とするブロック土を含む堆積



第109図 調査地点位置図



第110図 遺構配置図(1/300)・B調査区全景(上が北)

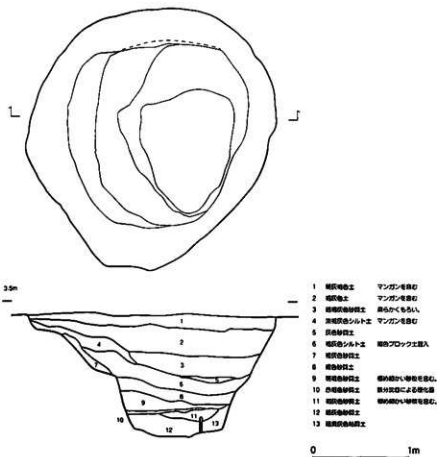
が窺え、崩落痕跡と考えられる。また、第13層はいわゆる裏込め土と考えられ、最下層に残存する。

井戸跡の壁面は砂質土により形成されており、崩落が著しい。井戸枠等の構造物を用いず、最下層の曲物のみで機能することは困難と考えられる。また、第13層の裏込め土は曲物より高く積まれていた状況から、曲物のみを固定する意図とは考え難い。故に、井戸枠等の構造物の存在が想定され、これが抜き取られた後に埋没した可能性が考えられる。

当調査において井戸跡、小穴等の遺構を確認した。想定された製塩関連遺構等は検出されていない。A・B区の製塩土器の総量は約85gであ

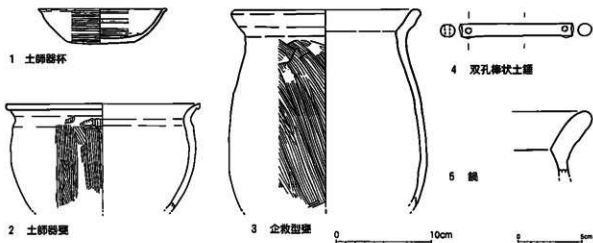
り、南金池遺跡第2・3次調査より出土した総量約11kgと比較して、極めて少量であることが確認された。

これまで行われた南金池遺跡の調査において、中国製焼締陶器等の中世に帰属する遺物の出土は未だ僅少である。前調査の課題を含め、今後、周辺の調査による資料の増加が望まれる。(梅田)



第111図 SE007平面図・土層断面図(1/40)

南金池遺跡
第1次調査



第112図 出土遺物実測図1～3 (1/4)/4・5 (1/2)

XX 東田室遺跡第4次～10次調査

調査面積	1098m ²	調査期間	2002.05.15～03.03.27
地 域	A	調査担当	佐藤道文・梅木信宏

東田室遺跡は、砂層、黄褐色土層(軽石腐食土)を基盤として形成されている。各土層の層序関係は、基本的に砂層の上面に黄褐色土が堆積している。砂層は断定的ではないが河川堆積物と推定され、南西方向から北東方向に向かって溝状に確認できる個所もある(7～4次調査区にかけて)。また、各調査区にはほぼ共通することとして、上記の遺構検出面の上面に弥生土器から近代にかけての遺物を包含する黒灰色土が堆積している。遺構埋土は黒灰色土を主体としていることから地山上面に堆積する黒灰色土から掘り込まれる遺構も存在する可能性がある。



第113図 調査地点位置図

東田室第4次

調査区は、大分市の西部を流れる住吉川の右岸、流れの侵食面にあたる部分に位置しており、標高は約4～5mである。遺構は現況の建物を建設するための客土、遺物包含層の黒灰色土を除去した後、砂層を掘り込む状態で検出した。

東田室遺跡は戦後まもなく渡辺澄夫氏により発掘調査が行われており、「田室式土器」と呼称される弥生時代後期の土器が採集されている。そのため弥生時代の集落遺跡の存在が考えられてきた。この当時の成果は『豊後国大分市田室町弥生式遺跡の調査』として報告されている。

近年、周辺では東田室遺跡群の調査が行われている。第1次調査では和泉型瓦器の小皿が供献された墳墓が確認されており、第2次調査では古墳時代初頭の住居跡が多数見つかっている。今回の第4次調査区では古墳時代初頭の住居跡、古代と考えられる掘立柱建物跡などが確認されている。また、包含層より出土する遺物の中には、弥生時代前期末～中期初頭に比定される下城式土器、都城系土器や大宰府系の埴dなども散見される。このことから、東田室遺跡は弥生時代から奈良・平安時代にかけて連続として遺跡が築かれていたことが窺える。

調査成果

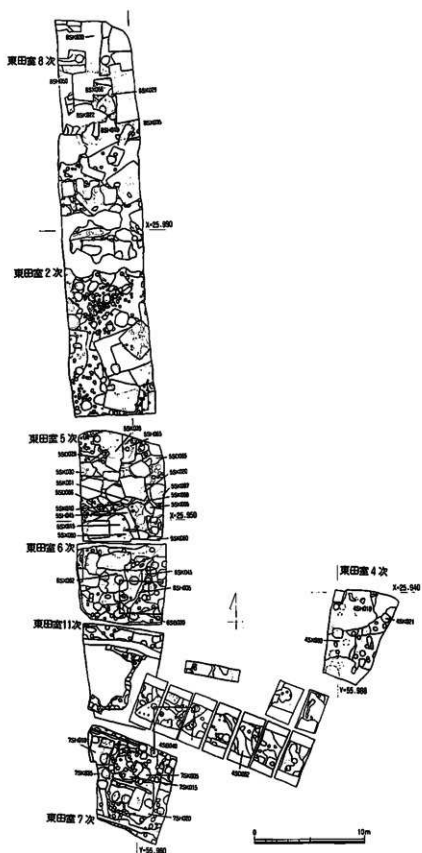
第4次調査では、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡4軒、廃棄土坑1基、土坑5基が確認された。

〈掘立柱建物跡〉

4SB040は総柱建物もしくは庇付の掘立柱建物跡である。調査段階では、一部柱穴が検出されないことから2棟に分かれる(4SB035・040)と認識していたが、規模・構造・各柱間の芯心距離などから1棟になるものと判断した。4SB040は調査区の制約から全体の規模は不明である。現状1間+α×4間+α、柱穴径は約0.8～1.2mを測る。柱穴は平面不定形な方形もしくは楕円形を呈す。柱径は柱痕跡から約0.2m前後に復元される。遺物は少量であり、時期比定を行い難いが、4SB040を構成する柱穴より7世紀中頃に比定される須恵器の蓋が出土しており、このことから7世紀中頃を上限とする



第114図 4SB040検出状況



第115図 遺構配置図 (1/350)

ものと考えられる。

〈住居跡〉

住居跡は4棟確認された。すべて調査区外へ延びるため全体規模は不明であり、比較に残りが良好な4SH010について説明する。4SH010は平面隅丸方形を呈し、長辺約6m+α、短辺約5.5m+αを測る。床面には貼床が行われ、貼床を掘り込む形で主柱穴が3基確認された。4本柱で構成されると思われるが、残り1基は掘乱により削平されている。貼床を除去すると柱穴が3基、上面と同じ配置で確認されることから、一度建替えが行われている可能性がある。床面のほぼ中央部分に平面楕円形を呈す土坑を検出した。土坑付近から出土する遺物は、大部分が被熱により器表面が焼け、はじけたような状態であったため、炉の可能性が考えられるが焼土、炭化物の堆積が見られないことから断定はできない。時期は覆土中より布留式系甕・壺を主体としていること、貼床面直上より山陰系の二重口縁の小型丸底甕が出土していることなどから古墳時代前期の所産と考えられる。

〈溝状遺構〉

4SD062は調査区の中央を縦断する溝状遺構で、幅約0.6～1mを測り、断面は直線的でしっかりとした逆台形を呈す。最終埋没の段階で掘り返しの堆積が認められ、出土遺物には土師器やdが含まれている。4SD062は第4次調査区より約100m北に位置する東田室遺跡第3次調査(県教委)でも検出され、ほぼ真北方向に延びることが確認されている。

〈土坑〉

4SK021・022・025・037・050・055は平面円形または楕円形を呈し、径が約1～1.8mとやや大きめである。全体的に埋土の状況は類似しており、黒色土を主体としている。それぞれに掘り返しの痕跡が窺われ、4SK021の掘り返し土層から弥生時代前期末～中期初頭に比定される下城式土器の甕が出土している。4SK037は断面が袋状を呈すものである。4SK055は土層の堆積に不整合が看取され、その形態から甕棺の抜き取り痕と思われるが、該当する遺物が出土していないこと、抜き取り痕と想定される土層にブロック土が確認されないことから抜き取り行為



第116図 4SX030遺物出土状況

があったと考えるには根拠を欠く。現状では用途不明の土坑である。4SK021以外は時期決定できる遺物は出土していないが、住居跡との切り合いから判断すると弥生時代の範疇におさまるものと考えられる。

4SX030は掘り下げ当初、布留式系の精製器種が出土していたため古墳時代前期の廃棄土坑と考えていたが、その土器群の中に須恵器蓋(小田IV期)や古墳時代後期の甕の破片が同一層、同一レベルで確認されたことから意味付けに困難を極めた。遺構同士の切り合いによる混入かと思われたが、出土状況や混入と判断する客観的要素が認められないため、現状の出土状況の写真・図面を作成した後、再度掘り下げを行った。掘り下げ途中で古墳時代前期の土器群の下部より須恵器蓋が出土した。また、土層観察から掘り返しの痕跡が認められたことから、後世の掘削時に布留式系の土器群がかさ上げされ、須恵器の蓋と共に廃棄されたと考えられる。

東田室第5次

調査区の大半は、建築物解体などにおける掘削により破壊されているが、掘削が及んでない部分の遺構の残存状況は比較的良好であった。

遺構は、表土下位に堆積する遺物包含層である暗茶色土を除去した後確認される黄褐色土(軽石腐食土)で検出した。また、土層観察を行った結果、暗茶色土を遺構面とする掘り込みが確認されることから、遺構検出面が2面存在すると考えられる。

主要遺構

本調査区では、主な遺構として古墳時代前期の竪穴住居跡2基、古墳時代後期の溝状遺構2条、古墳時代前期の溝状遺構1条、弥生時代前期末の土坑群、時期不明の溝状遺構1条が挙げられる。

〈竪穴住居跡〉

5SH045・055の2基が検出された。5SH045は、住居埋没過程で遺物の廃棄が行われており(5SX015)、布留式系甕、小型丸底甕、布留式系高坏などが出土している。5SX015は隣接する6次調査区の6SX053に該当するものである。遺物は、多器種がランダムに出土しており、破片資料が多いことから意図的な廃棄とは考え難く、他の地で何らかの行為が行われた後、無意識に廃棄されたと考えられる。

5SH055は、調査区北側中央で検出される竪穴住居跡で、西側部分は掘乱により掘削され、北側は調査区外へと延びる。住居中央部と北側に、貼床面から細い溝状遺構が掘り込まれ、溝の底部からは小ビッドが検出される。間仕切り状の構築物が想定されるが、土層観察からは板状の痕跡は認められなかった。遺物は、貼床面よりやや浮いた状態で出土しているが、出土レベル・層位から考えるとほぼ住居廃絶時と同時期のものと思われる。

〈溝状遺構〉

調査区の北側部分で、南西から北東に向かって2条の溝が平行する形で検出された。5SD029は断面緩やかな逆台形を呈し、埋土は暗茶色土・茶黒色土に分けられレンズ状に堆積する。土層観察から水流痕跡は認められなかった。5SD050は5SD065を掘り返し、新たに構築された溝状遺構である。断面逆台形を呈し、埋土は大きく3層に分けられる。最終埋没土は検出面の土層に類似し、2層目は黒色系の有機質を若干含む土壌で、第一次埋土は地山ブロック土を少量含む。5SD066は調査区の南西部分で確認される溝状遺構である。断面形態は最深部で鋭角な逆台形を呈し、底面はステップ状にバウンドしている。土層は大きく黒色土・茶色土に分層され、黒色土を主体とするものは、一度掘り返しを行った後に堆積したものと考えられる。遺構埋土の大半が有機質を多く含む土壌からなり、植物(木)の根が見られたことから樹木痕と判断していた。しかし、壁面が直線的であり、床面等に植物根痕跡が確認されないことから、現状では溝状遺構と判断する。時期は、5SH045との新旧関係から下限を古墳時代前期と考えておく。



第117図 5SD066完掘状況詳細

〈土坑〉

調査区の中央部分に土坑群は集中する。その中5SK005・035について説明する。

5SK005は平面隅丸方形を呈し、断面は若干袋状を呈す。埋土は灰茶色土(下)、暗茶色土(上)の2層に分層され、暗茶色土は埋土の大半を占めることから一気に埋没したと考えられる。遺物は暗茶色土から脚付鉢、下城式甕破片などが出土しているため弥生時代前期末段階に機能を停止していたものと思われる。5SK035は、調査区の北側中央部分で掘乱埋土除去後に検出した。平面形は不整形な円形で、断面形状は袋状を呈す。長径1.9m、短径1.75mを、深さは約0.5mを測る。埋土は4層に分層され、各層はほぼ均一で緩やかなレンズ状堆積をしていることから安定した環境の中で自然埋没していたと考えられる。出土遺物は土器細片が多く、時期決定を行い難いが周辺の遺構の形状、埋土の状況から弥生時代前期に構築された可能性が高い。

東田室第6次

第6次調査区は、第5次調査区の南側に隣接する。遺構は遺物包含層である黒灰色土を除去した後、地山である褐色砂層を掘り込む状況で検出した。砂層を基盤面とすることから、遺構掘削途中に壁面等が崩壊すること

が幾度となく見られた。よって、一部図中の遺構プランが、検出時と異なるものがあることを留記しておく。

〈掘立柱建物跡〉

6SB020は調査区の南東部で確認され、3間+ a ×2間+ a の掘立柱建物跡である。柱穴径は約0.7～1.2m、深さ約0.14m～0.5mを測り、柱掘り方の平面形はほぼ円形を呈す。土層観察からは柱痕跡は確認されず、各埋土も黒色土の単一層が堆積する状況であった。第4次調査区で見つかっている4SB040とは、規模、柱の掘り方、軸方向が類似することから同時期の可能性が考えられる。

〈竪穴住居跡〉

第6次調査区では6SH005がある。また、調査区北側中央で検出された6SX053は、5SX015と同一遺構と考えられる。6SX053は、住居の埋没過程で生じる窪地を廃棄土坑として2次的利用されたものであるが、住居の一部と判断して床面まで掘り下げている。

6SH005は調査区中央で確認されるもので、一部6SX040に削平される。平面方形を呈し、規模は長辺約7m、短辺約6m、深さ約0.2～0.3mを測る。土層観察・平面観察から住居埋没過程で一度掘り返している可能性がある(6SX062)。床面から主柱穴が4本検出されたが、炉跡等の施設は確認されなかった。時期は、覆土中から布留式系夾破片が出土していることから古墳時代前期の所産と考えられる。

〈土坑〉

貯蔵穴と推定される土坑が3基確認されたが、そのうちの6SK045について説明を行う。

6SK045は長径約1.8m、短径約1.5m、深さ約1.1mを測る。平面円形で、断面形態は袋状を呈す。砂質地盤であることから壁面崩落が早い段階で生じたと考えられ、埋没過程で一度掘り返しが行われている。時期は、周辺調査区で見つかっている貯蔵穴と類似点が多いことから弥生時代前期末頃ではないかと推測される。

東田室第7次

第7次調査区は、第4次調査区の南側に隣接する。表土下層の建物基礎土を除去した後に確認される黄褐色土(軽石腐食土)、茶褐色砂層を掘り込む形で遺構を検出した。地山の土層分布は、調査区中央から北側にかけては砂層が、中央から南側にかけては黄褐色土が広がっており、層位的には黄褐色土が上面に堆積する。

〈掘立柱建物跡〉

7SX025A・Bは調査区の北辺沿いで検出される円形の掘り込みで、長径約1m+ a 、短径約1m、深さは約0.6mを測る。2基ともに径約0.2mの柱痕跡が確認され、埋土の状況、平面プランなどから第4次調査で見つかっている4SB040に伴うものと考えられる。時期は白磁碗V類(太宰府分類)が出土する遺構より新田園係上古く、平安時代前期の可能性が考えられる。

〈竪穴住居跡〉

7SH010、020、034の3基が見つかっている。7SH010南北約4m×東西約3m+ a の平面方形を呈するもので、



第118図 6SB020検出状況



第119図 第7次調査区全景

深さは約0.2mを測る。埋土の状況は、土層観察からレンズ状堆積を示し、各土層には急激な変化が認められないことから、ゆっくりと自然埋没していったと考えられる。最終埋没土から布留式系、長頸壺等が出土しており、その形態等から布留中相から新相段階に比定される。7SH020は調査区の中央で検出され、平面プランは長辺約5m×短辺約4mの長方形で、深さは約0.4mを測る。土層観察から埋没は自然堆積によるものと考えられる。埋没の開始は緩やかであるが、最終埋没土である茶黒色土は、比較的短期間のうちに堆積したと思われる。床面の



第120図 7SX050高杯出土状況

の北側中央部から長辺約0.6m、短辺約0.5mの平面長方形を呈する土坑(7SX050)が確認された。土坑床面より高杯の坏部が口縁部を上に向けた状態で出土し、その状況から意図的に埋置された可能性が高い。高杯には、外面すべてに掻き目風の刷毛が螺旋状に施され、口縁端部に細かい打ち掻きが認められる。このタイプ(打ち掻き有り)の高杯は第5～8次調査にわたって複数出土しており、その性格付けは今後の課題である。7SH034は調査区の西辺で確認されるもので、南北約4.0m×a、東西約0.8m×aで調査区外へと延び、深さ約0.2～0.4mを測る。埋土中から小型丸底壺2個体と高杯脚裾部が出土した。高杯脚裾部には壺形の坏部が付き、脚裾部は低平に開くタイプと考えられる。出土した小型丸底壺から布留式新相段階には埋没していたと思われる。

〈土坑〉

主なものとして7SK005・035・112が挙げられる。7SK005は7SX025の南側で検出された。長径約1.8m、短径約1.4mで、深さは約0.4mを測り、平面楕円形で段掘り状を呈す。埋土は淡茶色砂質土・暗灰色土の2層に分類される。暗灰色土はやや粘性を含み硬く締まった状態であった。暗灰色土中からは防長系の緑釉陶器碗・皿、黒色土器A類の壺、土師器dが出土しており、本道構は9世紀後半には埋没していたと考えられる。また、土質・土色等が7SX025と類似しており、時間的に近似する可能性がある。7SK035は古墳時代前期の7SH034より新しい掘り込みであるが、弥生時代前期末段階に比定できる遺物を主体としている。同じ場所に構築される断面袋状を呈す7SK112の遺物が掘り返され、かさ上げされた可能性が高い。

東田室第8次

第8次調査区は、一連の調査区中最も北側に位置しており、県教委が調査した東田室遺跡第3次調査区に隣接する。第3次調査では、布留式系の土器群が大量に廃棄された溝状遺構、同じく布留式系土器群が廃棄された土坑、弥生時代前期の貯蔵穴が確認されている。特に溝状遺構に関しては、古墳時代前期(布留式新相段階?)の集落を囲む環濠となる可能性を含んでいる。第8次調査区は、遺跡の大部分が建物解体に伴う掘削により破壊されており、遺跡の解明を行うには困難な状況であった。

遺構は、客土除去後の暗灰色土とその下位で確認される黄灰色土の両面から検出された。暗灰色土は、出土遺物より幕末から近代にかけて堆積したと考えられるため、暗灰色土を掘り込む遺構は少量であり、近代以降に構築されたものと思われる。よってその下層で見つかった遺構を主体として説明する。

黄灰色土から検出される遺構は、弥生時代前期、古墳時代前期、古代の3時期に分けられる。主な遺構として、竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑群が挙げられる。



第121図 8次調査区全景

〈壁穴住居跡〉

8SH010は、調査区の南側で検出され第2次調査区へと延びる。長辺約5m±、短辺約3m±の平面長方形を呈し、深さは約0.4mを測る。床面には貼床が行われており、その貼床を掘り込む形で主柱穴(2本)、壁溝が検出された。貼床を除去すると掘り方が確認され、床面整形時の痕跡と思われる溝痕が多数認められる。暗茶色土下層の裡土から小ピットが見つかり、住居廃絶後の場の利用について一考を投げ掛けるものである。東側部分に三日月状のプランが看取される。調査段階では8SH010以前に構築された遺構と判断していたが、本遺構に伴う張り出し部となる可能性が考えられる。覆土中から布留式系窠(ほぼ完形)、布留式系高坏(打ち掻き有り)、小型丸底甕(ほぼ完形)が出土しており、住居の下層は布留式新相段階に比定される。

8SH020は調査区の西側中央部分で見つかった住居跡である。約5.3m×約4.2m±の平面方形を呈し、深さは約0.1~0.3mを測る。北辺と南辺には壁溝があり、底面に杭痕と思われる小ピットが穿たれている。壁面に沿って壁板などが構築されていたのではないだろうか。

8SH035は壁溝と思われる小溝が検出でき、壁穴住居跡と考えられる。覆土中から土師器坏が大小2個体積み重なった状態で出土し、また、土師器高台付塊が高台部を上に向けた状態で出土した。8SH035は古墳時代前期の8SH010より切り合い関係上古い段階に位置付けられる。平面精査を入念に行ったところ、一部ブロック土が集中する範囲が検出された。土層観察から明確な掘り込みが見られなかったが、土師器坏2個体の出土状況からある程度意図的なものが看取されることを踏まえると、整地等を行った際、地鎮として埋置されたと考えられる。本調査区周辺では、平安時代前期の段階で一度整地が行われた可能性が高く、第4・6・7次調査で見つかった掘立柱建物跡や廃棄土坑との関係が注目される。調査区中央付近では、弥生時代前期と思われる土器片が出土していたが、平面精査を重ねても明確なプランを確認するには到らなかった。

〈土坑〉

第8次調査区では、貯蔵穴と考えられる土坑群が帯状に検出された。そのうち残存状況の良好な8SK029について触れる。8SK029は調査区の中央付近で確認され、径約1.2mの平面円形で断面は袋状を呈する。深さは約0.6mを測り、埋土には有機質を多く含む黒色土が主体となっている。また、土層観察より一度掘り返しが行われている。埋没の初期段階に壺破片、花崗岩製の磨り石等が廃棄されていた。周辺に展開する貯蔵穴と類似点が多く認められることから弥生時代前期末頃に埋没したと考えられる。

東田室第9次

第9次調査区は第7次調査区の南側に位置し、弥生時代~現代の遺物包含層が見つかったが、明確な遺構は確認されなかった。

東田室第10次

本調査区は、平安時代後期の墳墓が見つかった第1次調査区の北西に位置している。

第10次調査区は土層観察より、近世~近代の水田層が2面検出された。出土遺物中に京都系土師器皿が出土している。第1次調査区からも京都系土師器が出土しており、近世初期の段階で調査区一帯は耕作地となったと考えられる。

まとめ

今回の調査では、見沼門川(現住吉川)流域に大型の掘立柱建物が存在している状況が確認された。4SB040は、出土遺物から判断すると7世紀中頃を上限とするものである。柱穴の一部に切り合いが生じており、建替えが行われた可能性がある。建物主軸は、ほぼ真北を意識している状況が看取される。建物の性格については、その全

容が明らかでないので不明であるが、構造が能住建物もしくは庇付建物を呈すと考えられることから、立地条件等を含めて、今後検討して行く必要がある。

東田室遺跡周辺の台地上には、蓬萊山古墳をはじめ、既に消滅した亀甲山古墳、大分君の埋葬地に比定される古宮古墳など数多くの古墳群が構築されている。これらのことから、東田室遺跡の存在する大分平野一帯は、4～7世紀にかけて大分国造の本拠地であったと考えられる。

大分市史によると、大分市の海岸線は現在よりも陸地部分に近く、現在の春日神社付近まで延びていたと推定されている。東田室遺跡は海、河に近接する交通の要衝に位置しており、古墳時代以降、重要な拠点だったと推測される。大型建物跡や、弥生・古墳時代の集落の在りかたを含めて今後の調査が期待される。（佐藤）



第122図 東田室遺跡遠景(別府湾を望む)

XI 下志村遺跡第2次調査

調査面積 3450㎡

調査期間 2002.11.07～03.05.30

地域 F

調査担当 後藤典幸・萩幸二・上野淳也・水町祐子

調査は、大在地区の人口増加に起因する大分市立大在西小学校の新設に伴い実施した。試掘の結果を受けて、学校整備課と協議の上、調査区を校舎建設部分のみに限定して設置し、それ以外は遺構保存の処置を採ることで一致した。調査区は、校舎部分と特別教室棟部分には限定し、前者をA区、後者をB区として設定した（第124図参照）。

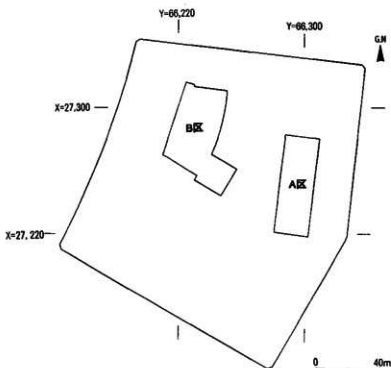
下志村遺跡は、大野川河口部の東岸、大野川が形成した沖積平野に立地する。遺跡は、海岸に沿って平行に複数列形成された浜堤の内、最も内陸部に近い浜堤上面と、その南側下段の後背湿地部分に展開しており、遺構は海洋性の砂層を基盤面として、その上に堆積する河川の氾濫に伴うと考えられる黒色土層上面に形成される。大在は古代律令制下初期には、海部郡の「佐野郷」に含まれ、後に「大佐井」と限定呼称された「旧佐野郷」南半の地域である。遺跡の東南部の台地上には、海部郡衙と考えられている城原・里遺跡（中安遺跡）が位置する。また、近郊の丹生地区には、丹生駅が存在が推測されており、推定国府エリアの上野台地近辺に位置したと考えられる高坂駅から丹生駅、丹生駅から大野川沿いに三重駅へと抜け、直入駅へと到る奥豊後支配に重要となる古代官道の存在も指摘されている。すなわち本遺跡の立地は、河川と官道が交差する交通の要所に近く、その河川は瀬戸内へと開く水上交通の要衝でもあった。近隣には「政所」の地名も確認され、中世初期の支配機構が古代のそれら諸施設を利用したものであったことも想像に難くない。

A区

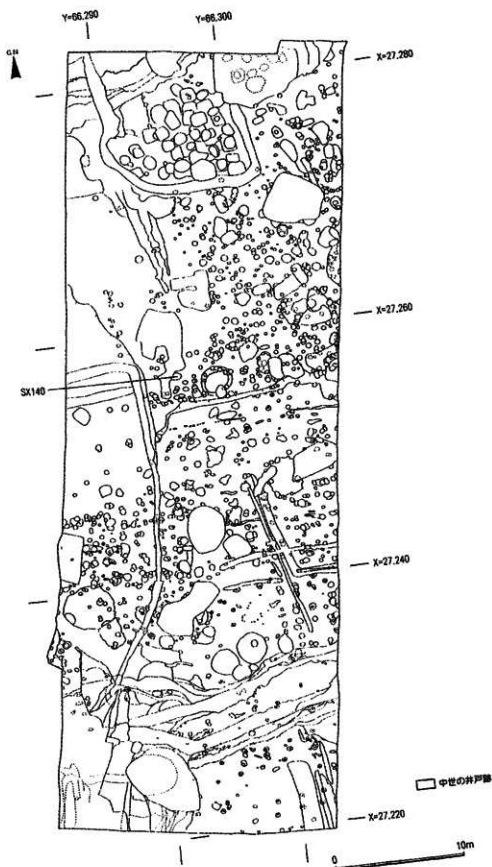
A区は、学校建設予定地内の東側に位置し、調査面積は1350㎡を測る。予定地内は、造成後にグラウンドとして使用されていたため、まず真砂土と造成土という2層に渡る表土を除去した。表土除去後、調査区内において、浜堤列の一部であると考えられる微高地が確認され、遺構検出面が、浜堤の上面とその下段の上下2段存在することが把握された。その上下2段それぞれの検出面標高は、上段が4.7m、下段が3.6mである。層位学的な成果により、近世～近代において上段が畑作、下段が水田耕作地として利用されていたことが判明しており、上段と下段における耕作土除去後に、中世の遺



第123図 調査地点位置図



第124図 調査区配置図(1/2400)



第125図 A区遺構配置図(1/300)



第126図 SX140遺物出土状況



第127図 SX140瓦質土器鍋取上げ後遺物出土状況

構面が検出される(第125図参照)。

近世・近代の遺構としては、溝状遺構10条や溜井・井戸遺構5基が検出されており、ほとんどが水田耕作時に伴うものであると考えられる。また、調査区北側においては、近世墓が多数検出された。

中世の遺構としては、溝状遺構6条、井戸遺構11基、土坑遺構38基、動物祭祀遺構1基、溜井遺構1基、そして、約1000基以上の柱穴遺構が検出された。柱穴遺構に関しては、ある程度の規格性が見受けられ、少なくとも2種類の方位において、掘立柱建物跡及び杭列そして溝状遺構が並走する状況が確認される。これらの遺構からは、玉縁の白磁碗、龍泉窯系青磁碗、中世土師器小皿・坏、土師質土器鍋、瓦器碗・皿、瓦質土器搥鉢・鍋、東播系こね鉢、備前焼搥鉢、銅銭の他、曲げ物等の木製品等、多岐に渡って出土している。これら遺物群の帰属年代は、概ね11世紀末～16世紀代の範疇に収まるもので、ほぼ中世という時期区分を包括している。また、多数の井戸跡、そして1000基を数える柱穴群は長年に渡る人の定住痕跡であり、当調査区が集落遺跡であるとの評価を促す。

主要な遺構としては、動物祭祀遺構(SX140)が挙げられる。出土遺物としては、中世土師器坏15点、中世土師器小坏7点、瓦質土器鍋1点、そして、動物遺存体として牛の白歯が挙げられる(第126図参照)。遺物の依存状況としては、土師器22点は一部のものを除いてほとんどのものが完形に復元され、鍋は底を故意に打ち欠かされている。白歯は、上顎に帰属するものが鍋の中から検出されており、牛頭骨の上顎の部分を裏返し東側に鼻先を向けた状態で据え置かれていた事が推察される(第127図参照)。SX140遺構の性格としては、文献資料や民俗事例などから、牛頭骨を用いた犠牲獣魂又は魔牛を用いた祭祀遺構であると推察される。

遺構形成時期としては、15世紀前半頃が考えられる。

B区

B区は、学校建設予定地内の西北部分に位置する。調査面積は2100㎡を測る。層位的には、A区と同様に表土除去後、調査区内において浜堤の一部であると考えられる微高地が確認される。

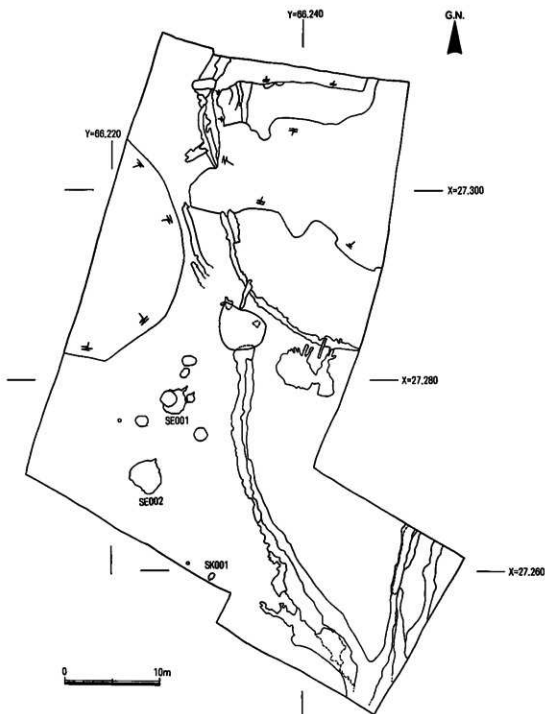
遺構面では、溝状遺構14条、井戸遺構2基、土坑遺構1基、柱穴遺構8基等を検出し、遺構の形成時期は、古墳時代、中世から近現代におよんでいる。主要な遺構としては、14条の溝状遺構の他に、以下に詳述する中世の井戸遺構2基(SE001・002)と、古墳時代の土坑遺構(SK001)とが挙げられる。

SE001は、残存する掘方が直径約2.9m、深さ約1.8mを測り、大小2段の遺存状態の悪い曲げ物の井戸枠が確認された。出土遺物としては龍泉窯系青磁碗、中世土師器坏、土師質土器鍋等が出土しており、当遺構の廃絶時期は14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。

SE002は、残存する掘方が直径約3.4m、深さ約1.1mを測り、井戸枠やその痕跡等は確認されなかった。出土遺物としては弥生土器、古墳時代の土師器、中世土師器坏、瓦器碗、白磁皿、土鍾、砥石等が出土しており、廃絶時期は13世紀後半～14世紀頃と考えられる。

SK001は、現状で長径約0.8m、最大幅約0.5m、深さ約0.07mを測る不定形の土坑状遺構で、出土遺物は、布留式新相併行期に比定される土師器の甕が出土している。試掘時にも、布留式新相併行期に比定される土師器の壺3点を埋設する遺構をSK001の近くで確認しており、遺構の形成時期が同じであると考えられることから、当遺構も土器を埋設していた可能性が指摘される。

下志村遺跡は、従来、弥生・古墳時代の遺跡としての評価が高かったが、今回の調査において中世の集落遺跡としての評価を積み重ねることができた。(上野・水町)



第128図 B区遺構配置図(1/400)

XXII 玉沢地区条里跡第3次調査

調査面積 約4200㎡ 調査期間 2002.01.04～03.03.24

地 域 B 調査担当 甲斐猛・永松正大・松尾聡・羽田野裕之・佐藤孝則

調査区は七瀬川の北岸域に広がる現在も良好な条里状地割が残る水田地帯である「玉沢地区条里跡」の一角にあたる。

植田地区は、大分市の西部を流れる大分川と支流である七瀬川に挟まれた標高約15mの沖積低地に位置している。周辺には北に雄城台の低台地、西に木ノ上の丘陵が、そして南に標高596mの霊山を配すといった環境において、古代から中世にかけて植田郷・植田庄と展開していったことが文献資料に記されている。当調査地はその有力候補地として推定され、考古学的検証が期待されていた。

今回の発掘調査は、植田新都市西部土地区画整理事業の施工に伴い、植田新都市西部土地区画整理組合の委託を受けて実施されたものである。平成12年に実施した道跡分布調査(試掘調査)の結果、弥生時代前期～戦国期にかけての遺構・遺物が確認された。この調査成果を踏まえて開発計画、事業区画地域内に調査区を1区～7区に分けて設定した。1区については平成13年に調査を行い、年報に報告している。今回は、2区～7区の概要報告である。本調査の結果、中世はもとより弥生時代までに遡る水田遺構が確認され、畦畔・水路・溝などの水田関連遺構、住居跡などの生活遺構も確認されている。以下にその様相についてまとめる。



第129図 調査地点位置図



第130図 4区調査区全景(上が北)

中 世

12～16世紀にかけての水田層を確認している。畦畔や水路などの水田関連遺構は確認されなかったが、調査地内のはほぼ全域で中世段階には水田が営まれていたことが確認され、注目される遺構として犂溝群が挙げられる。当該期の水田層でしか検出されておらず、農具の改良による痕跡の違いの可能性が考えられ、興味深い所見である。

4区では、12世紀後半～15世紀に該当する水田層を7面確認している。各水田層で犂痕を検出しており、中でも14世紀後半の水田層(S180)においては調査区全体で犂溝群を検出している(第130図)。犂溝群は当時の地割に沿って形成されたと考えられ、それらが現状地割に沿っていることから、ほぼ同じ地割が中世段階で展開されていた可能性が示唆される。さらに、犂痕には南北方向と東西方向が存在し、その方向の変化での水田区画の解明が今後の検証課題である。

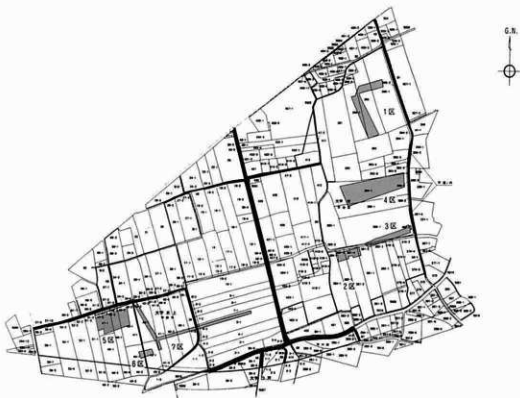
中世段階の堆積には純粋な洪水性砂層が確認されず、水田としての土地利用が連続と続いていたことが確認できた。また、鉄製の馬鍬の歯も出土しており、牛馬耕の普及と古代～中世にかけての技術発達が垣間見える所見といえよう。

古 代

8世紀代～10世紀後半に該当する水田層が確認されている。古代の特徴としては、水田に伴う大規模な水路の

存在が挙げられる。1区では9世紀前半～中頃の活発な水田開発と画期が看取され、2・4区においても同様の所見が得られた。まず、2区においては、調査区内を走る2本の現状地制の東側下層で、2時期の畦畔を伴う用水路(SD136)を検出している。規模は幅約3.0m、深さ約0.6mを測る。確認されたラミナ層からは、10世紀後半に比定される灰砂陶器片が出土している。市内では、推定官道沿いの遺跡である井ノ久保遺跡や横尾遺跡・元町石仏遺跡・下郡遺跡群などでの出土が確認されており、当調査地でも周辺施設の存在が期待できる成果といえる。この用水路を検出した地点では、複数時期の用水路とそれに伴う畦畔が踏襲された後、畦畔だけが踏襲され現状地割へと変遷が確認されている。

次に、4区では水田層(S220)において調査区西側で南北に縦断する用水路(SD224・225)を検出しており、共に出土遺物から9世紀前半以降と判断される。SD225は幅約5.0mを測り、伴う畦畔は確認できなかったが、2区の畦畔を伴うSD136に堆積状況と形状が酷似している点から、一連の用水路とはいえないが、用水路の機能であったと判断される。また、水田層東側ではつま先を北に向けた跡の跡(S223)が多数検出され、調査区を南北に縦断して水路の方向に進んでいる様子が看取された。さらに、水路を挟んで西側では水田層(S227)が新たに始まっているのが確認された。用水路検出地点では最低4時期の水路が踏襲されており、SD225の下層の用水路では水口が2基折り重なる状態で検出している。水口は踏襲して設置され縦断面の土層観察より、東から西への排水を目的とした水口と判断される。水口は8世紀代に比定される水田層に伴っており、当該時期には東から西に向けての緩斜面を利用した水掛かりを持つ水田が営まれていたと想定できる。9世紀前半の水路(SD225)には水口が踏襲されていないため、東側の水田では改変・拡張があったと考えられる。当調査区では、8世紀代に造成された水路が踏襲されていたことが確認されたが、中世段階の水田では畦畔も用水路も確認されず、古代から中世にかけて大規模な水掛かりの変更があったと判断される。



第131図 第3次調査調査区配置図(1/2500)

古代では、調査区配置図(第131図)中央を走る道路を挟んで東側は活発な水田開発と大規模な水路造成の変遷が確認されたが、西側は遺構が希薄であり、低湿地開発の過程を考察する上で重要な所見といえよう。

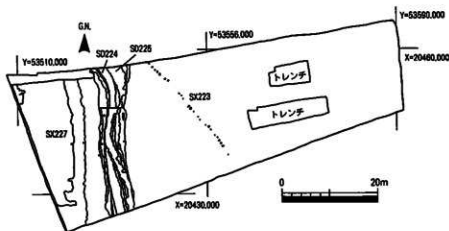
古墳時代

古墳時代はまず、今回の調査地内で唯一、生活空間と生産遺構が確認された3区の住居跡を中心に報告する(第133図)。SH060は調査区北東隅で検出された竪穴住居跡であり、平面は方形プランを呈し、東西は約5.0m、南北は約4.6m、壁高は現状で約0.15～0.25mを測る。住居覆土中に多量の焼土・炭化材を含み焼失住居跡と考えられる。主柱穴は4基からなり、各柱穴径は約0.2～0.4m、深さは約0.6～0.7mを測り、埋土は1層が炭化物・焼土が多量に混入しており2層は微量しか含まない。柱痕・裏込めは確認されておらず、柱を抜きとった後に焼失したと判断している。貼床は施されておらず、床面中央部付近は円形の攪乱により削平を受けており被熱の痕跡を留めるが、炉跡は確認されていない。

床直上には、炭化材や焼土が広く分布している状況が見受けられ、東側隅において乳白色粘土塊が2つ認められた。2つとも表面が焼土となっていたため、焼失時には床直上にあったと判断される。下部遺跡群第78次調査E区-16地点の住居跡でも粘土塊が確認されており、どのような性格を持つのか検討中である。出土遺物は、床直上では4世紀中頃に比定される小型丸底甕・高坏が出土している。焼失後の埋土からは4世紀中頃～後半に比定される遺物が出土しており、住居の廃絶時期は4世紀中頃～後半であると判断している。また、床直上で礎石と考えられるレキの周囲に、高坏の坏部や小型丸底甕など祭祀的土器が出土していることも興味深い。

SH069は、大半が調査区外に当たるため規模は不明であるが、現状で深さ約0.3～0.45mを測る。床面は弱粘性の淡黄灰色シルト質土の貼床を施し、厚さは約0.16mを測る。埋土はSH060と同様に炭化材・焼土が大量に混入しており、同時期に焼失したと判断される。

SH099は調査区中央で検出され、1辺が約6.3mを測る方形プランを呈する。主柱穴は4基からなり、4隅には幅約10～15cm、深さ4～10cmの壁溝が巡る。中央には焼土・炭化物を多く含む炉跡が確認されており、住居南側ではやや楕円形の屋内土坑を検出している。出土遺物は甕・壺・高坏・小型丸底甕・埴輪などであり、時期は4世紀後半に比定される。焼失はしていないが、祭祀土器の出土が顕著である。



第132図 4区水田(S220)遺構配置図(1/800)

この地点は調査地内でも微高地になっており、水田化するのも中世の段階である。SH060を検出した地点より東側の微高地に集落を形成していた状況が見受けられる。また、焼失住居の2基については、生活用具が希薄で祭祀土器が出土している点、柱を抜いて焼失していることから、祭祀的行為が行われた可能性が指摘される。

次に7区の結果についての報告である。水田層(S410)において、埋納土坑(SK434)を検出している。平面プランは不整形円形を呈し、規模は直径0.55m深さ約0.3mを測る(第134図)。堆積は2層で2層目にブロック土・炭化物が多く混入している。土坑底面に高坪の坏部を上向きにして埋置しており、高坪の燬属年代より4世紀後半～5世紀前半と比定され、水田層(S410)の時期も当該期と判断される。

特筆されるのは水田層(S410)の下層水田層(S415)において検出された、大畦畔である。約5mの幅を持っており、今回調査した中で最大を測る。畦畔は現在用水路として使用されている下層にあたり、上面は削平を受けているが狭い範囲ながら地割が一致する。伴う水田層から遺物が出土しておらず、先述した水田層(S410)より古いとしかいえない。この大畦畔は複数の水田層を伴っており、長期間に渡って使用されたと判断される。用水路としての機能がいつから始まったかは定かではないが、畦畔から水路へと性格を変容させているとはいえ、古墳時代からの地割が踏襲される地点であるといえよう。

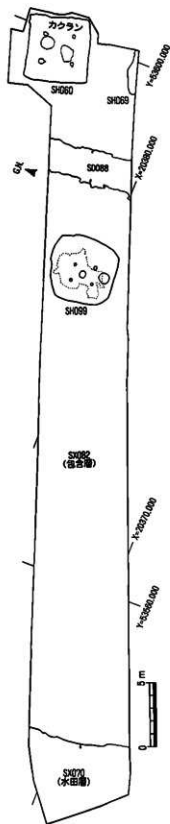
7区南北調査地(第134図)では畦畔(S435)と畦畔(S422)が交差する箇所において切石が出土している。切石は畦畔(S435)の埋土中にあり、掘り方を有している。規模は長辺0.5m、短辺0.42mを測り、幅は厚い部分で0.18m薄い部分で0.06mで西側と南側をほぼ直に切って調整している。地形的に畦畔の交差点に当たることから、洪水などで畦畔が消失した際の目印として設置されたと考えている。さらにこの交差点は現在は用水路として踏襲されており、地割の変遷が古墳時代から現在まで続くこととなる。また、畦畔周辺で単層の不定円形の土坑(SK433)を検出しており、現在は畦畔を補強するための粘土を採取した土坑と判断している。

今回の調査で、古墳時代の遺構がほぼ全区で確認され、牛馬耕が始まったとされる当該期の活発な水田開発が見受けられた。この事は、周辺に存在する御陵古墳をはじめとする、多くの古墳群を造営した豪族の経済基盤としての水田地帯である可能性が高いと示唆できる。

弥生時代

今回の調査では2区において弥生時代前期末以降の遺物が出土している水田層(SX174)が確認され、3区において弥生時代中期の遺物を包含する包含層が確認されているが、弥生時代の水田層に関しては数点の出土遺物での時期決定であるため、厳密に弥生時代の水田であるかは検討を要する。

弥生時代で注目すべきは、4区の調査成果であろう。弥生時代中期中葉～



第133図 3区(SX082包含層)遺構配置図(1/300)

後期前葉の石棺墓(ST288)、弥生時代前期段階の水路(SD300)と流路(SD303)を確認している(第135・136・137図)。調査区北西隅で確認されたSD300は、両側に板材と横木を杭で補強している状況が確認できた。調査区壁面の土層観察において裏込めが西へずれていくのが見受けられ、氾濫の度に改修を繰り返したと考えられる。北西隅は斜面になっているが、横木を渡して足場を形成している状況が見受けられた。検出時には破堤堆積の土圧により東から西にむけて倒壊したものと判断される。板材の加工はくさび割りを行い、厚さがほぼ均等で面を合わせて設置されており、杭については約1.0mの杭も出土している。先端部分の加工からも木材加工の技術の高さが見受けられる。弥生時代の水利施設による水を管理する様子が窺える重要な資料といえるだろう。今後は、木材の樹種特定を行い、どのような材を選んでいたのかを知ると共に、当時の植生復元を試みたい。

また、調査区東側の微高地では、墳丘墓が確認され石棺の周囲に土器が分布している状況がみられる。これは祭祀的な意図があるものと考えられる。時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉～後期前葉と判断される。

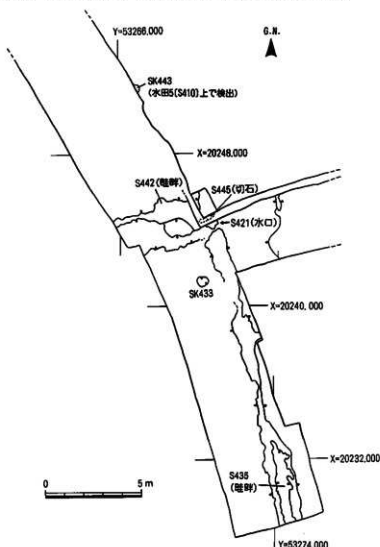
まとめ

今回の調査地が植田庄の一角にあたることは先述したとおりであるが、今回の調査地の南方には印旛とよばれる地区があり、印旛大明神を奉った印旛社が存在する。そのため、植田市地区には国府の存在も指摘されてきた。

印旛地区は平成9年に調査され、14世紀前半にこの遺跡が最も栄えたと言われる調査結果がでており、印旛社関連遺跡である可能性を指摘している。同時に歴史的背景を整理すると国府域の再整備を意図とした神社仏閣の再建事業が太友氏によって頻繁に行われた時代にあたり、その微高地にあたる印旛地区の眼下に広がる当調査地で同時期の水田が確認された意義は非常に大きく、当調査地が植田庄である可能性が依然として高いと判断できるに至った。

また、印旛地区の調査では9世紀前半の不定形土坑から官衙遺跡通有の遺物が出土している。今回の調査では当該期の水田層を確認しており、大規模な水路の造成時期でもある。2区の水路からは同様に官衙遺跡通有の遺物が出土している点も植田郷の成立時期との関係が気になるところである。

今回の調査地の土地利用を考えてみると、東側ではまず2・3区の間に限られた谷部を利用して水田を営み、古墳時代には3区の微高地に生活空間を設け、緩斜面に水田を形成している様子が確認され、一部地点では現在の灌漑体系が古代の大規模な水路開発に起因する可能性を示唆できる所見を得た。また、調査地西側では古墳時代以前には緩斜面を利



第134図 7区水田8 (SX417)遺構配置図(1/200)

用した小区画水田が形成されたが、その後4世紀後半～5世紀前半以前には幅約5.0mを測る畦畔が造られ調査地全体に亘って遺構が確認され、現在と同じ地割のなかで水田を形成していることが確認された。

このようにして、各調査区を平面で調査することにより、地点ごとの変遷過程が確認され土地利用の履歴が追える結果を得た。それは、限られた谷部から沖積平野全面に水田域を拡大していき灌漑施設の充実した古代から中世にかけてより発展していったと考えられる。今後は古環境復元を進め、地形の全体像をとらえて土地利用がどのように行われたかを検討していきたい。

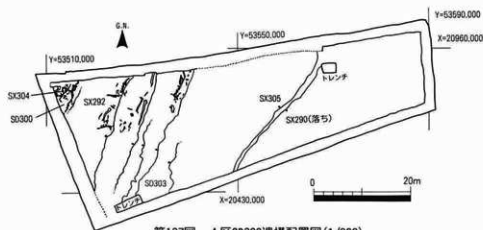
(佐藤・江上・永松)



第135図 4区S0300水路平面図(1/80)



第136図 S0300出土状況



第137図 4区S0300遺構配置図(1/800)

XXIII 玉沢地区条里跡第6次調査

調査面積	496㎡	調査期間	2002.08.06～02.09.20
地 域	B	調査担当	高畠豊・萩幸二・松竹智之・水町裕子

調査地は大分市大字玉沢に所在し、玉沢地区条里跡に属している。調査は病院建設に伴い本調査を実施した。調査の結果、溝状遺構12条、水田遺構、柱穴を検出した。溝状遺構は第10・16号溝状遺構を除く10条が並行する形で南西から北東方向に延びている。

溝状遺構

調査区南側に位置する第2号溝状遺構は、長さ約18m、最大幅約0.95m、深さ約0.55mを測る。第4・7・10号溝状遺構とて水田の給排水を行っていたものと考えられ、溝の規模も他の溝より上回っており、給排水の主たる役割を担っていたと思われる。この遺構からは弥生土器片が10点ほど出土しており、中でも波状文を伴う複合口縁壺の口縁部片が覆土下層よりみられることから、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。



第138図 調査地点位置図

第12号溝状遺構は調査区最大規模の溝状遺構で、長さ約22m、最大幅約1.9m、深さ約0.45mを測る。土層断面で2条の溝がみられ切り合いがみられる。このことから当溝は改修を受け使用されていたものと思われる。遺物の出土量も他の溝を圧倒しており、多くの弥生土器片をはじめ、石錘、砥石、打製石斧、石皿を含む石器、杭、鋤先と考えられる木製品の破片2点などが出土している。弥生時代後期前葉の壺・甕の底部片がみられることから当溝はこの時期に比定されよう。また、第12号溝状遺構から第15号溝状遺構は、溝の蛇行の仕方もほぼ同じで、平行するように延びている。

第16号溝状遺構は北西から南方向に逆「く」字状に延びる。長さ約8m、最大幅約0.55m、深さ約0.1mを測る。他の溝と違い流水方向は、北東から南と推測される。溝の北西端部で水田遺構に接続しており、水田遺構の取水口的な機能を担っていたと推測される。

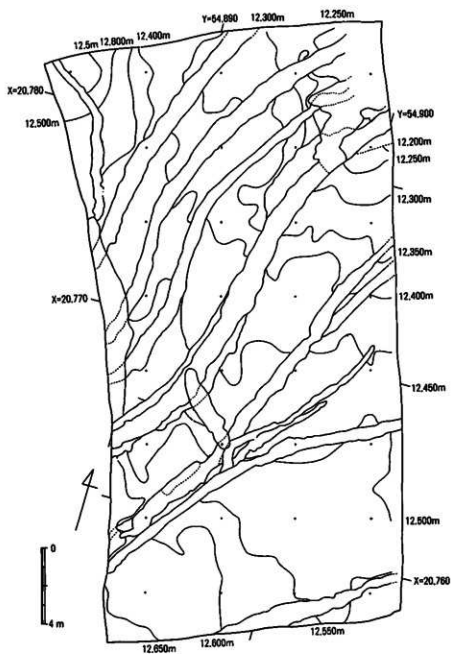
水田遺構

水田遺構は調査区の西側部分に位置し、南北に長さ約11m、深さ約0.2mを測る。第12号溝状遺構に切られ、第13・14・15号溝状遺構を切っているため、弥生時代後期前葉～中葉の時期が考えられる。第16号溝状遺構は、土層の状況や遺構のレベルから当水田遺構と関連があるものと思われる。

まとめ

今回の調査では現代のものも含め、5枚ないし6枚(最も窪んでいる北東部のみ)の水田面が検出された。現代と近世の水田と古墳時代以前の水田との間には時間的にかなりの断絶が認められる。これが古墳時代以前の窪地に形成された水田の廃絶の後、古代の条里水田は本調査区近辺では造成されず、近世に新田開発されるまで放置されていたことを示すのか、それとも古代ないし中世にも水田が形成されたが、近世の水田によって削平を受けた結果、痕跡が見られないことを示唆するのは、現状では判断が不可能である。西側に近接する第2次調査第I調査区では、本調査区と同じく弥生時代中期中葉～古墳時代後期に至る溝状遺構と水田が検出されているが、水田の面積が調査区全域と窪地に形成された本調査区の水田面積と比べると規模が全く異なる。このことから古代・中世で大規模な条里水田が造成される区域は、それ以前の弥生・古墳時代でも大規模な水田が形成されていた可能性が高い。従って、本調査区のような小規模な谷水田が形成される地域では、水田が造成されるのは近世以降であると推察される。

(松竹)



第139図 遺構配置図 (1/200)

〈参考文献〉

大分市教育委員会 2002 『玉沢地区条里跡第2次発掘調査報告書』

大分市教育委員会 2003 『玉沢地区条里跡第6次発掘調査報告書』

XXV 古国府遺跡群・上七曾子遺跡

調査面積	約951㎡	調査期間	2002.08.05～02.10.07
地 域	A	調査担当	讃岐和夫

今回の調査は、平成14年6月3日～7日にかけて共同住宅建設工事に伴う確認調査を実施し遺構を確認したため、同年8月より本調査を実施したものである。

本調査区は、大分市大字羽屋字上七曾子177番地に所在している。この遺跡は、周知遺跡「古国府遺跡群」に位置しており、この地域は「和名抄」にみえる荏原郷に属し、鎌倉時代にも国衙領であったことが「弘安国田帳」でみられる。

また、18世紀末の「豊後国志」に「豊後国府、今古国府村是れ其の址也」と記されており、古代の豊後国府推定地とされる場所である。とくに羽屋井戸遺跡では、7世紀代の国府の前身と思われる区画性をもつ古代の掘立柱建物跡群が確認されている。

この地域は現在も条里地割が残っているが、すでに水田地帯は市街地化へと変ぼうしている。

本調査区は、試掘調査の結果によって遺構の希薄な部分と駐車場部分については遺構保存が可能なため、東側の遺構が集中している部分についてのみ実施した。

旧工場跡地のため建物基礎等により遺構面が若干擾乱を受けていたが、調査区内の遺構の遺存状況は良好であった。遺構内容については溝状遺構8条・道路状遺構(推定官道)・土坑10基・柱穴群(建物跡不明)が確認された。

遺物については包含層から縄文時代後期の土器片や石器類が出土しており、溝状遺構からは弥生時代前期の土器が多量に出土している。また、古代・中世の土器片も少量出土している。

弥生時代の溝状遺構には、SD01・02がある。とくにSD02は、調査区の中央寄りに長軸を東西方向N-85°-Eに向けて直線的に掘られている。溝の規模は、現状で幅1～1.5m・深さ0.2～0.36mを測る。溝断面形状は皿状を呈している。土層の堆積状況は上層が暗茶褐色粘質土、下層は淡灰色粘質土の2層である。溝の壁から底にかけて白灰色粘土を巻いており、とくにSD02の中央から東側にかけて白灰色粘土が良好に遺存していた。

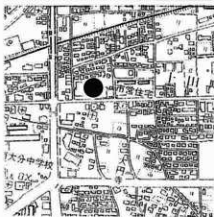
また、SD02の西側に集中して弥生時代前期の土器が廃棄された状態で出土しており、廃棄された遺物は市内でも数少ない前期初頭～中葉にかけての時期で下城式土器が成立する以前のものであった。

遺物の器形については、夜臼系の甕形土器・小型の如意状口縁部をもつ甕形土器と刻目突帯文土器の口縁部や底部と鉢形土器破片出土しており、また、特徴ある刻目突帯文を有す大型の甕形土器も出土している。

中世の大形溝状遺構としてはSD04がある。調査区南側の現道と同じ方向に掘られており、SD03と道路状遺構・側溝を切っている。また、小溝のSD05・06から西側部分が切られていた。SD04の規模については、現状で幅2.5m、深さ0.4mを測り、断面形状は逆台形を呈している。土層堆積状況は、単一層である灰色粘質土である。

壁と床面部分に褐色の鉄分が堆積し硬くグライ化した層が見られ、水が流れていたことが窺える。遺物については、少量であるが糸切り底部の土師器片などが出土している。

土坑については、10基ほど確認できているが、とくにSK10では古代の道路状遺構と同時期か若干早い段階で掘られていることが切りあい関係で分かった。また、中世の土坑としては大形のSK02がある。SK02の規模は、長軸3.3m、短軸1.9m、深さ0.25mを測る。平面形状は隅丸長方形を呈していた。床面はいびつに掘られており、両端部は一段高くなっている。埴土は暗灰色粘土の単一層である。遺物は糸切り土師器の底部や口縁部等が出土している。



第140図 調査地点位置図

道路状遺構(SF01)は、調査区の南側に位置しており、N-75°-Eに向いている。中世の溝状遺構に切れ、遺構の遺存状況は、側溝及び道路状遺構の基底部埋土が3層ほど残っている。土層の堆積状況については、平行堆積しており、下層は青灰褐色砂質粘質土で褐色粒子が混入している。中層は下層とほぼ同じ土色であるが褐色粒子と白色粒子が多く混入し、土質は若干硬めである。上層は青灰色砂質粘質土で白色粒子が多く含んでおり、黄色粘土ブロックも混入している。土質は若干硬めである。その上面には、近現代の水田耕作土がある。この耕作土からは、明治18年に鋳造された半銭等の遺物も出土している。

古代の道路状遺構については、市道や旧水田耕作等で削平されており、遺存状況は良好でなかったが、道路側溝が施されていた。道路状遺構の幅については、調査区外と現道の直下になっており、幅の大きさは不明であった。確認された道路状遺構については、ほぼ直線状に条里地割にのって走っており、町口付近で折れ曲る推定官道跡と思われる。現道は古代の道路遺構(推定官道)を踏襲する形で造られていることが判断できた。

古代の遺構の展開については、道路状遺構を境にして北側では古代の遺構は見当たらなかった。南側に展開している羽屋井戸遺跡や園遺跡から区画性のある掘立柱建物跡群等が検出しており、この地区の南側に古代の遺構が展開することが今回の調査で明らかになった。(讃岐)



第141図 調査区空中写真



第142図 調査区全景



第144図 SD04と道路状遺構



第143図 SD02(弥生時代)



第145図 SD02出土遺物

XXV 金谷迫遺跡（確認調査）

調査面積	約690㎡	調査期間	2002.10.07～02.10.11
地域	A	調査担当	坪根伸也・荻幸二・松尾聡

遺跡は大分市の北東部の大分川下流と綾川最上流に挟まれた丘陵上に立地する。仮称西部スポーツ交流広場の建設が計画されたが、周知の埋蔵文化財包蔵地のエリア外に存していたため、文化財保護局との十分な協議が行なわれないうまま工事に着手された。しかし、平成14年9月に現地では遺物が採集されたとの報を受け、平成14年10月2～4日にかけて試掘調査を実施した。中央の頂部に工事による削平を受けずに、地山が残っている南西部のやや斜面になっている区域に2本、南東部の斜面中部のやや平坦な区域に1本、中央頂部から谷を挟んだ南西側の台地上に2本のトレンチを入れた。その結果、2地点において遺構・遺物が確認されたため内部協議を経て、平成14年10月7～11日にかけてその2地点において本調査を実施する運びとなった。結果は以下の通りである。



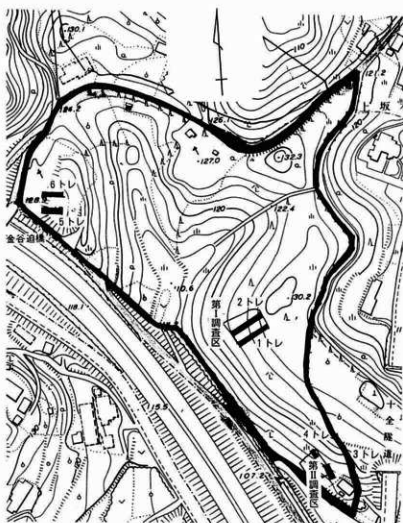
第146図 調査地点位置図

第1調査区

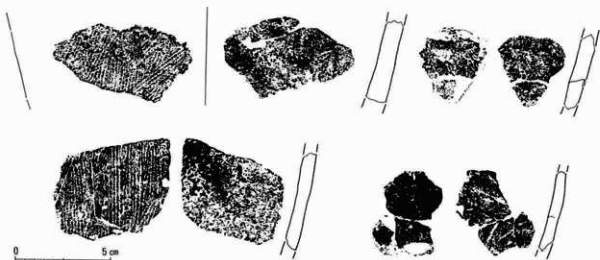
工事区域の中央頂部に南北向きの2本のトレンチを入れたところ、西側の第2トレンチから円形の土坑1基と縄文時代早期の無文土器・石器が検出された。そこで第2トレンチの東西を広げる形で本調査を実施した。

遺構としては、試掘時に検出された円形土坑のみで、その上部は削平を受けており、遺物は出土していないが、放射性炭素年代分析でB.P.240±40と近世年間の値が出ている。

遺物としては、縄文時代早期の無文土器47点、弥生土器2点、土師器片5点と、チャートや腰岳系黒曜石製の石核や剥片などが出土している。石器は表採品を含めても点数は多くないが、旧石器時代に多用される流紋岩や縄文時代早期中葉以降に頻用される姫島産黒曜石が見られず、縄文時代早期前葉の大分平野の石材利用状況を暗示しており、貴重な資料である。



第147図 試掘トレンチ・調査区配置図(1/2500)



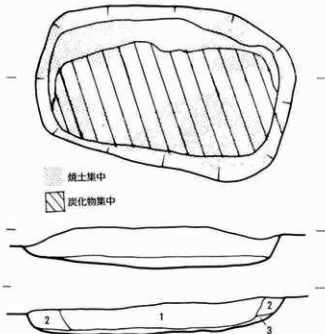
第148図 出土遺物実測図(上段1/2、下段3/4)

第II調査区

工事区域南東部の斜面中腹の平坦部に入れた第3トレンチの西よりに炭化物・焼土が集中する隅円長方形の土坑が2基検出された。そこで南側の斜面部に広げる形で本調査を実施した。

遺構としては試掘時のものと併せて、炭化物・焼土が集中する隅円長方形の土坑が2基検出されており、形状その他の面でスポーツ公園内遺跡群(県教委 1999)や松岡古窯跡群(市教委 2002)で類似の遺構が検出されており、炭焼窯ではないかと推測される。第1号炭焼窯は、長辺約1.3m×短辺約0.8mの隅円長方形のプランを有し、深さ約0.2mを測る。古代と考えられる土師器片が出土しており、覆土中の炭化物による放射性炭素年代分析でB.P.1380±70という7世紀代の値が出ている。第2号炭焼窯は、長辺約0.8m×短辺約0.6mの隅円長方形のプランを有し、深さ約0.2mを測る。覆土中の炭化物による放射性炭素年代分析でB.P.1170±60という9世紀代の値が出ている。

(荻)



第149図 第1号炭焼窯平・断面図(1/20)

XXVI 米竹遺跡（確認調査）

調査面積 52(78.45)㎡ 調査期間 2003.03.11～13, 24～26
地 域 E 調査担当 塔鼻光司・梅本信宏・松竹智之

今回の調査地は、大分市大字小池原字米竹211番地の1に所在しており、鶴崎丘陵の先端部分、標高約40mの平坦面に位置し、周知遺跡の米竹遺跡の北側部分にあたる。周辺では平成3年4～7月に大分市教育委員会が調査を行っている。この調査では、弥生時代中期の溝及び集落が確認されており、環濠集落と考えられている。

今回は共同住宅建設に伴う調査を平成15年3月11～13日、24～26日にかけて、浄化槽の掘削予定地部分の調査を実施した。

調査の結果、古墳時代初頭の住居跡2基、弥生時代中期の貯蔵穴5基、土坑3基、時期不明の柱穴などを確認した。

竪穴住居跡(SH010-040)

竪穴住居跡は、SH010とSH040の2基が切りあった状態で検出された。

2基とも掘り下げは工事掘削予定地分のみで、住居の北西部分約1/4のみ行った。

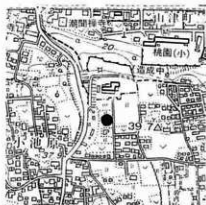
SH010は、平面隅丸方形で4.8m×4.3m×0.38mである。主柱穴が1本確認され、4本柱になると思われる。住居中央付近の床面と土層観察で炉跡を確認した。貼床面が2枚見られ、上下の貼床面にそれぞれ壁溝が確認され、2回以上建て替えられている。検出面からは土師器片が出土している。

SH040は、SH010に切れ、平面隅丸方形で4.5m×4.0m×0.5m以上である。調査面積が狭いためにSH040からSH010へは、やや位置を北西にずらしつつ床面積を拡大し建て替えられたものと考えられる。遺物は古墳時代初頭の布置式系の瓦片などが出土している。SH040とSH010は古墳時代初頭と考えられ、短期間に建てられていたものと思われる。

大型土坑

大型土坑は8基検出された。平面形態はSK015の略長方形を除き、ほぼ円形から楕円形である。SK015以外の断面形態には逆台形状(SK030)、筒状(SK005・024・026)、フラスコ状(SK025)、袋状(SK035)があり、SK025は断面フラスコ状の壁をもつ上に床面に周溝がめぐる形態である。土坑上面(SK026)、下面(SK020・025)や上・下面にビット状の掘り込みを持つもの(SK020・035)がある。ただし、上面にあるビット状掘り込みは土坑ほぼ中央にあるとはいえ、同時期のものかはわからない。

また、検出面からの深さではあるが比較的浅いもの(SK020・026)と深いもの(SK005・024・025・030・035)が



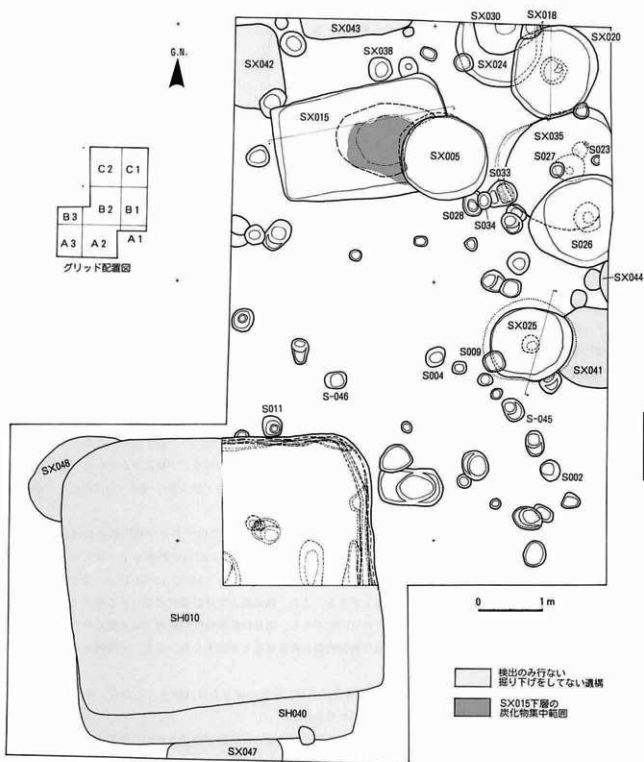
第150図 調査地点位置図



第151図 調査区全景(西より)



第152図 SH010-040発掘状況(北より)



第153図 遺構配置図(1/160)

ある。また、SK025・030・035には埋土に掘り返しが観察される。

これらの大型土坑のうちSK005・015・025からは、炭化米が検出されたため貯蔵穴と思われる。また炭化物は検出されていないが、その他のものも形状や規模などから貯蔵穴と思われる。なお、SK015からは炭化米(イネ)のみでなく、キビ・アワと思われる炭化穀物粒、塊状炭化物、炭化木材小片が出土している。

また、SK041・042・043・044・047・048は調査区壁にかかっており、今回工事により破壊される恐れがなく上面検出にとどめ、掘下げを行っていない。SK041・044・047・048は平面ほぼ円形の貯蔵穴で、SK042・043は平面が長方形の土坑である可能性が高い。これがSK015と同様のものであれば、狭い調査区内のことではあるが、西側に円形の土坑群、東北側に長方形の土坑群が平面的に分布を異にしている可能性がある。また、ほぼ円形の土坑群に切り合いが多いのに対して、長方形の土坑群には切り合いがほとんどないようにも見られる。ただしこの分布にはSK015がSK005に切られているように時期幅があり、ほぼ同時期に遺跡内の場所の使い分けの差なのかは不明である。

SK015は調査区北端で検出された貯蔵穴である。検出面では平面長方形の長径2.71m×短径1.76m、深さ0.75m。底面にはやや東側に偏って1.5m×1.13m、深さ0.12mの浅い皿状の土坑をもつ。この土坑の上部には炭化物の集中する地点があり、炭化米やアワとキビと思われる炭化穀物粒などが検出されている。遺物は弥生時代中期後葉の東北部九州系壺口縁部片などのほか、弥生時代中期中葉の下城式甕片・壺片・台付鉢片などが出土した。

SK025は調査区中央やや東よりで検出された貯蔵穴である。検出面では平面やや楕円形の長径1.31m×短径1.18m、底部で長径1.26m×短径1.18m、最大径1.45m×1.3m、深さ1.02mの断面ややフラスコ状を呈す。底面ほぼ中央に0.28m×0.27m、深さ0.13mの小土坑をもち、壁面に沿って幅約0.13~0.15m、深さ0.05mほどの周溝がめぐる。埋土には3回以上の掘り返しがある。また、検出面上では貯蔵穴に切られる柱穴2基および周囲に柱穴が数基存在し、上屋を構成する柱穴の可能性がある。遺物は弥生時代中期の下城式甕片や壺片のほか、中期後葉~末の東北部九州系甕片、緑色結晶片岩製磨製石炭素材などが出土した。また、下層埋土から炭化米が検出されている。

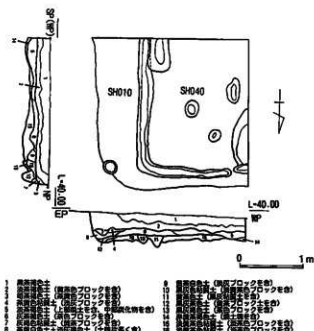
そのほかに、S011・046・004・045・002はほぼ円形に並び、柱穴の深さもほぼ揃うことから、中期の円形住居跡の壁や床面が削平され、柱穴のみが残った状態と思われる。

今回の調査では、弥生時代中期の貯蔵穴、古墳時代初頭の竪穴住居跡が確認された。周辺の調査でも今回の調査と関連する遺構が見られ周辺に環壕や集落が展開していることが明らかになりつつあるが、集落の範囲や変遷など不明な点も多く、今後周辺の開発に留意する必要がある。

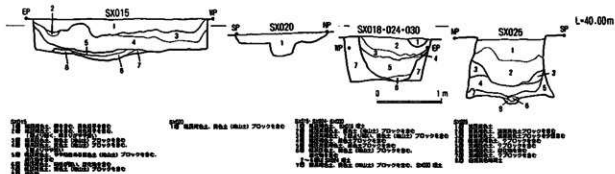
(松竹)

(参考文献)

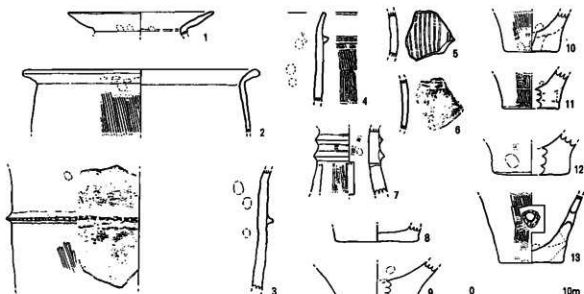
峯鼻光司 1992 「米竹遺跡」『大分市埋蔵文化財年報vol.3』大分市教育委員会



第154図 SH040遺構平面図(1/60)



第155図 主要土坑土層図(1/60)



1-6(S010), 2・3-8-10-12(S025), 4-5-9-11-13(S015), 7(S005)

第156図 出土遺物実測図(1/4)

Sno.	Grid	種別	平面形状	size (m)	出土遺物	時期	備考
S-005	C-1, C-2	大型陶状土坑	円形	上面141×134×74, 下面126×128, 最大径148×134	下城式甕11線部, 甕底層, 甕底層, 台付鉢脚部, 甕口縁部, 西北九州系甕11線部, 甕蓋石片, 炭化米	中間後遺一木	貯蔵穴, 西側は断面狭長
S-010	B-2, B-3 A-2, A-3	壺状土坑	楕円方形	480×410×30	土師器甕11線部, 下城式甕11線部, 東北九州系甕11線部	古墳初期	
S-015	C-1, C-2	大型陶状土坑	楕円方形	271×176×75	東北九州系甕11線部, 炭化物	中間後遺	貯蔵穴, 底面直徑に浅い直状土坑あり, 1個以上の盛り返し
S-020	C-1	大型陶状土坑	楕円形	147×133×34	甕底層, 下城式甕11線部, 甕蓋先状11線部, 下城式甕11線部, 甕底層, 甕口縁部	中間中遺	貯蔵穴? 底面114cm中央にpit(62×43×21)あり
S-024	C-1	大型陶状土坑	円形	上面136×98×70			
S-025	B-1	大型アラスコ状土坑	円形	上面131×118×120, 下面126×118, 最大径145×120	下城式甕11線部, 甕杯脚部, 東北九州系甕11線部, 甕底層, 炭化米	中間後遺一木	貯蔵穴, 底面中央にpit
S-026	C-1	大型陶状土坑	楕円形	154×142×54	下城式甕11線部, 甕底層	中間中遺	貯蔵穴? ほぼ中央に上面にピット状掘り込み23×22×15と底面に浅い凹状掘り込み44×44×8あり
S-030	C-1	大型壺台形土坑	円形	108×50×68	下城式甕11線部, 甕角處埋石製石核	中間中遺	貯蔵穴? 2回以上の盛り返し
S-035	C-1	大型陶状土坑	楕円形	上面196×140×111 最大径196×156	赤土器片	中間中遺	貯蔵穴? 盛り返しあり
S-040	A-2	壺状土坑	楕円方形	450×400×30	布目式系甕11線部, 下城式甕11線部, 甕底層, 甕口縁部	古墳初期	

出土遺物観察表

XXV 府内城・城下町跡第15次調査

調査面積	216㎡	調査期間	2002.10.07～02.03.20
地 域	A	調査担当	池邊千太郎・羽田野達郎

近世府内城下町は、大分県大分市荷揚町に所在する府内城を中心に形成された城下町である。調査地は、大分市都町2丁目に所在し、府内城下町の推定堀川町にあたる。

調査の結果、調査地は火災処理土坑3基、廃棄土坑6基、溝状遺構3条、土坑3基、礎石跡、道路状遺構、土器埋納遺構等が確認された。遺構面は基本的に一面で、近現代層と地山の間に形成された近世の整地層で検出されている。表土下60cmは、現代から近現代にかけて形成された層であった。また、一部で深く掘り下げられた近現代の遺構等により、調査区の南側は遺構の削平が行われていた。特に調査区の中で、主要な遺構としては、火災処理土坑(S002)・土器埋納遺構(S050)・道路状遺構・整地層があげられる。



第157図 調査地点位置図

火災処理土坑

火災処理土坑(S002)は、長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.7mの規模である。焼土や被災を受け、一括廃棄された多量の陶磁器や瓦とともに硯が出土している。硯には享保十三年(1728)の紀年銘ならびに「安倍時信」という名と花押が彫りこまれている。また、その火災処理土坑からの多量の瓦と礎石跡の出土は、瓦葺きの礎石建物が存在していたことを推測させる。さらに、出土遺物の中には、信楽焼の水指が見受けられることから茶をたしなむ階層の存在も想定される。

道路状遺構

東西方向にのびる道路状遺構は、南北に幅4mと推定され、深さ1.5mの近現代の側溝施設によって破壊されていた。しかし、一部の土層断面からは密な互層堆積層が確認されること、道路に付設したと思われる溝状遺構(S042・047・048)が認められた。また、近現代の側溝が旧道路空間を踏襲して作った施設である可能性が高いことを考慮すると、復元図で想定した位置に道路が存在していたことはほぼ間違いないものと考えられる。一時期、道路推定内に複数の土坑(S015・025・032・033・034・046・052・055)が連続して作られることが認められる。そのため道路幅の変更が行われていたことが考えられる。

土器埋納遺構

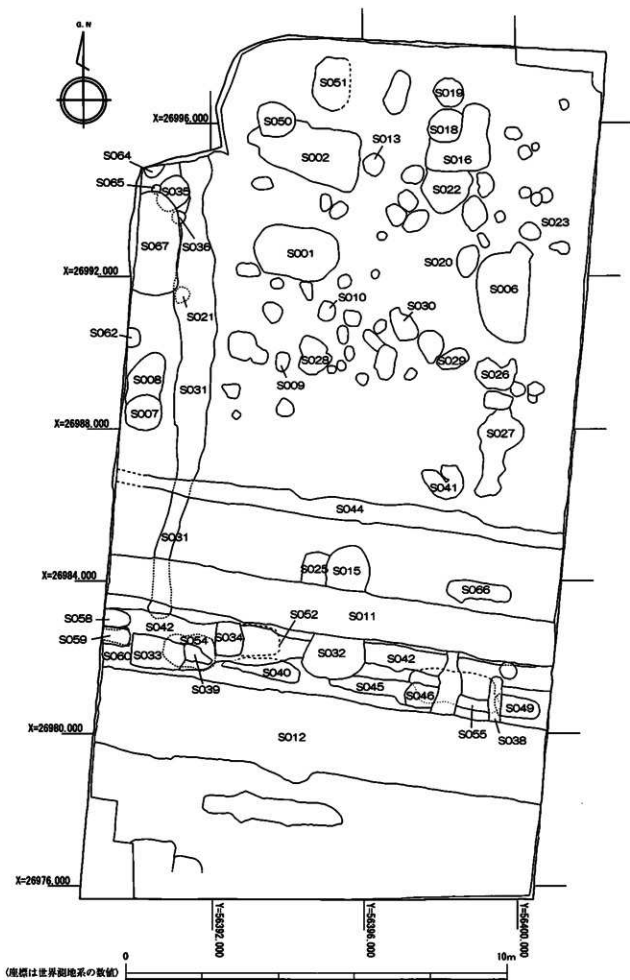
土器埋納遺構(S050)は、火災処理土坑(S002)が埋まった後に新たに掘り込まれた状況で検出された。遺構内の並んだ二つの礎石の間には、京都系土師器小皿2枚が合わせ口を重ねられ、埋置した状態で出土している。これらは建物に伴う地鎮祭の一つと考えられる。今後、その形態と変遷を考察していくうえで貴重な資料となる。

整地層

整地層は、調査地の全面で確認されており、南側の東西にのびる道路推定域では褐色土、北側部分で褐黄色土の堆積層であった。近世の確認された遺構は、これらの層を基盤面として形成されている。この整地層からは、中国産の染付け碗・皿、唐津の胎土目段階の皿等が含まれていることから、



第158図 調査全景(北より)

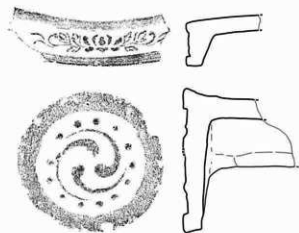


第159図 遺構配置図(1/100)

城下町形成段階に整地作業を行ったものと考えられる。整地層の下層は、自然に堆積した青灰色シルト質土層となっており、遺構・遺物は確認出来なかった。

以上の調査状況により、調査区内は廃棄土坑・火災処理土坑が遺構の大半を占めていた。その廃絶時期は、18世紀前半代に火災処理土坑が見られ、18世紀後半代から19世紀前半代にかけては廃棄土坑が集中して見られ、20世紀前半代の火災処理層がさらにそれに続いている。

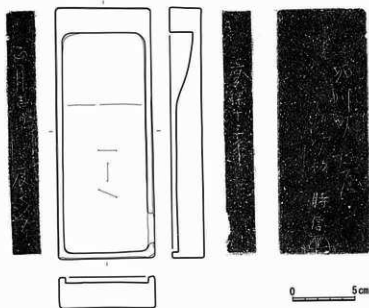
なお、18世紀前半代に見られる火災処理土坑は、享保19年(1734)1月14日に堀川町の松本与七郎の土蔵から出火し、町数24、家608、倉13、死人9(男6・女3)、酒井七兵衛屋敷等が焼けるという大火の災害記録を裏付ける遺構であると考えられる。20世紀前半代は、昭和20年7月の太平洋戦争による大分市空襲時のものと考えられる。周辺調査の進展を待たねばならないが、調査区からは17世紀の遺構が希薄なことから、堀川町が本格的に機能し始めたのは18世紀以降になってからと考えられる。(羽田野達)



第160図 S001出土遺物実測図(1/4)



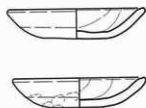
第162図 S050遺物出土状況



第161図 S001出土遺物実測図(1/3)



第163図 S001・S002発掘状況(西より)



第164図 S050出土遺物実測図(1/3)

受贈図書目録

1 調査報告書

福島県 郡山市教育委員会

清水内道跡（第22次）発掘調査報告	2002
阿久津館跡発掘調査報告	2002
宮ノ脇道跡第5次発掘調査報告	2002
白旗道跡 転沢道跡発掘調査報告	2002
荒井藤田道跡（Ⅱ区）第14次発掘調査報告	2002
清水台道跡第22次調査報告	2002
梁場道跡 菅屋敷道跡 町A道跡 阿武隈川築堤関連	2002
郡山市埋蔵文化財分布調査報告 9	2002

いわき市教育委員会・郡いわき市教育文化事業団

夏井庵寺平成13年度範囲確認調査概報	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第69冊 中山館跡Ⅰ区 一般国道6号常磐バイパス道跡発掘調査報告Ⅵ	2000
いわき市埋蔵文化財調査報告 第81冊 小茶門道跡—市道馬場1号線改良工事に伴う調査—	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第82冊 横山古墳群—群集墳と弥生時代後期集落の調査—	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第86冊 日除道跡	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第87冊 栗木作道跡	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第89冊 上ノ台道跡	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第90冊 栗木作道跡—縄文時代早期—弥生時代中期道跡の調査—	2002
いわき市埋蔵文化財調査報告 第91冊 桜町道跡—古代集落跡と中近世墓域の調査—	2002
造郷道跡 第1分冊 第2分冊 第3分冊	2002

茨城県 つくば市教育委員会

史跡小田城跡—第29・31次調査（本丸跡確認調査Ⅰ）概要報告—	1999
史跡小田城跡—第36次調査（本丸跡確認調査Ⅱ）概要報告—	2000
史跡小田城跡—第38次調査（本丸跡確認調査Ⅲ）概要報告—	2001
史跡小田城跡—第40次調査（周辺曲輪跡確認調査Ⅰ）概要報告—	2002
つくば市内道跡—平成10年度発掘調査報告—	1999
つくば市内道跡—平成11年度発掘調査報告—	2000
つくば市内道跡—平成12年度発掘調査報告—	2001
つくば市内道跡—平成13年度発掘調査報告—	2002
つくば市内重要道跡—平成13年度確認・試掘調査報告—	2002

栃木県 足利市教育委員会 文化課

足利市埋蔵文化財調査報告書 第43集 智光寺跡第2次発掘調査報告書	2000
足利市埋蔵文化財調査報告書 第45集 宿居館跡発掘調査報告書 近現代—縄文時代早期まで遡る複合道跡の調査報告	2001
足利市埋蔵文化財調査報告書 第46集 平成12年度 文化財保護年報	2002

埼玉県 寄居町教育委員会

史跡鉢形城跡調査報告 第2集 史跡鉢形城跡 平成10年度発掘調査概要報告 史跡整備事業に伴う発掘調査	2000
--	------

岡部町教育委員会

岡部町道跡調査会埋蔵文化財調査報告書 第9集 熊野道跡Ⅰ	2001
------------------------------	------

千葉県 国府台遺跡第29地点調査会

千葉県市川市真間 国府台遺跡 第29地点発掘調査報告書	2002
-----------------------------	------

国立歴史民俗博物館		
国立歴史民俗博物館研究報告 第93集		2002
国立歴史民俗博物館研究報告 第94集 陶磁器が語るアジアと日本		2002
国立歴史民俗博物館研究報告 第95集		2002
国立歴史民俗博物館研究報告 第96集		2002
国立歴史民俗博物館研究報告 第97集		2002
山武町教育委員会		
山武町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 駒形台遺跡		2002
鶴山武郡市文化財センター		
小野山田遺跡群Ⅱ 羽戸遺跡		2001
東京都 千代田区飯田町遺跡調査会		
飯田町遺跡 千代田区飯田橋2丁目・3丁目内開発事業に伴う発掘調査報告書		2001
府中市教育委員会		
都営府中宮町三丁目用地発掘調査概報		2002
武蔵国府の調査20—昭和59年度府中市内調査概要—		2002
武蔵国府の調査21—平成9年度府中市内調査概要—		2002
武蔵国府の調査22—平成11年度府中市内調査概要—		2002
府中市埋蔵文化財調査報告 第30集 武蔵国分寺跡調査報告6—南方地域の調査3—都営府中栄町3丁目第2団地建設に伴う事前調査		2002
日野市遺跡調査会		
日野市埋蔵文化財発掘調査報告72 日野駅北駐輪場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		2002
日野新町1丁目住宅遺跡調査会		
東京都日野市 地久保遺跡Ⅲ—日野新町1丁目住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—		2002
東京都日野市 地久保遺跡Ⅳ—日野新町1丁目住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—		2003
東京都埋蔵文化財センター		
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(1)—		1999
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(2)—		1999
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(3)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(4)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(5)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(6)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(7)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(8)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(9)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡(10)—		1998
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第102集 多摩ニュータウン遺跡		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第104集 多摩ニュータウン遺跡—No.939遺跡(1)—		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第104集 多摩ニュータウン遺跡—No.939遺跡(2)—		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第106集 多摩ニュータウン遺跡—No.200遺跡(第2・3次調査)Ⅰ—		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第108集 多摩ニュータウン遺跡—No.200遺跡(第2・3次調査)本文編Ⅱ(1)—		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第108集 多摩ニュータウン遺跡—No.200遺跡(第2・3次調査)本文編Ⅱ(2)—		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第113集 尾根上屋敷跡遺跡Ⅹ		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第114集 尾根上屋敷跡遺跡Ⅹ		2002
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第119集 尾根上屋敷跡遺跡Ⅹ		2002
国分寺市遺跡調査会		
武蔵国分寺跡発掘調査概報 Ⅲ 都営住宅西元町団地建設工事に伴う尼寺南西地区の調査		1999
武蔵国分寺跡発掘調査概報 Ⅳ 北方地区・三叉地所御共同住宅建設工事に伴う発掘調査		1999
武蔵国分寺跡発掘調査概報 Ⅴ 昭和55～59年度 僧寺域内等の調査		2001
武蔵国分寺跡発掘調査概報 Ⅵ 遺構編・遺物編・本文編		2002

	多摩南坂道路Ⅲ 郡管内藤Ⅰ丁目第4用地建設に伴う事前調査	1999
	恋ヶ丘東道路免掘調査概報Ⅱ 九紅株式会社共同住宅建設に伴う調査	2000
富山県	富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	
	富山県文化振興財団埋蔵文化財免掘調査報告 第14集 石川田木舟道跡免掘調査報告(第1・第2・第3分冊・付録)	2002
	富山県文化振興財団埋蔵文化財免掘調査報告 第15集 清水島Ⅱ道跡・中名Ⅱ道跡・持田Ⅰ道跡免掘調査報告	2002
石川県	石川県野々市町教育委員会	
	末松A道跡・末松しりわん道跡 民間開発・地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急免掘調査	2001
	御経塚シンデレラ道跡 御経塚シンデレラ古墳群 野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財免掘調査報告書Ⅲ	2001
	下新庄アラナ道跡 野々市町南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急免掘調査報告書Ⅱ	1999
	横川・本町道跡 分譲住宅地造成工事に伴う埋蔵文化財緊急免掘調査報告書	2002
	宮裡道跡 堀上居地区・宮裡館跡 鬼ヶ窪地区が丘・吉土土地区画整理事業に係る埋蔵文化財免掘調査報告書Ⅰ	2001
福井県	小浜市教育委員会	
	若狭小浜地跡Ⅱ-公共下水道工事に伴う免掘調査報告書-	2002
山梨県	甲府市教育委員会	
	甲府市文化財調査報告18 史跡武田氏館跡Ⅳ 第32次-第52次調査報告書	2002
	甲府市文化財調査報告19 甲府城下町道跡Ⅱ 武田二丁目(いちやまマート駐車場跡) 免掘調査報告書	2002
	甲府市文化財調査報告20 史跡武田氏館跡Ⅴ平成12年度大千馬出土品・主郭部・御臨居曲輪南 他	2002
静岡県	沼子市教育委員会	
	国指定史跡名越切通保存管理計画策定報告書	2001
愛知県	名古屋市教育委員会	
	天門元屋敷道跡第4次免掘調査概要報告書	2002
	富士見町道跡第5次・白川公園道跡第4次 中区内における共同住宅建設に伴う免掘調査	2002
	名古屋市文化財調査報告53 埋蔵文化財報告書40 尾張元興寺跡第7次免掘調査報告書	2002
	名古屋市文化財調査報告54 埋蔵文化財報告書41 正木町道跡・伊勢山中学校道跡・聖三蔵道跡・千音寺道跡	2002
	名古屋市文化財調査報告55 埋蔵文化財報告書42 高蔵道跡・鳴海城跡	2002
	名古屋市文化財調査報告56 埋蔵文化財報告書43 片山神社道跡・尾張藩御所跡・春日町野道跡・穂穂道跡	2002
	埋蔵文化財免掘調査報告書 貞愛院道跡	2001
	名古屋市住宅部市局	
	千音寺道跡(北宮田用地) 免掘報告書	2000
	名古屋市上下水道局下水道本部	
	下水道工事に伴う埋蔵文化財免掘調査報告書 千音寺道跡	2001
徳島県	徳島市埋蔵文化財センター	
	徳島市埋蔵文化財センター調査報告 第24集 内田町道跡	2002
	徳島市埋蔵文化財センター調査報告 第25集 塩草B道跡	2002
	徳島市埋蔵文化財センター調査報告 第26集 市内道跡調査報告Ⅲ 川合K道跡	2002
	徳島市埋蔵文化財センター調査報告 第27集 国指定史跡 小長谷陶器窯跡	2002
	徳島市埋蔵文化財センター調査報告 第28集 内田町道跡	2002
富田市教育委員会		
	豊田市埋蔵文化財免掘調査報告書 第20集 花本道跡・万加田道跡	2002
	豊田市歴史民俗調査報告書 第1集 豊田市の石造文化財	2002
静岡県	静岡県史学研究所	
	愛知郡名古屋市 高蔵道跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財免掘調査報告書	2001
三重県	四日市市道跡調査会	
	北中寺道跡Ⅰ 四日市市道跡調査会文化財調査報告書ⅩⅢ	2002
	真造寺道跡・道具林古墳 四日市市道跡調査会文化財調査報告書ⅩⅣ	2002
四日市市教育委員会		
	四日市市埋蔵文化財免掘調査報告書28 大矢加畑道跡	2002
	四日市市埋蔵文化財免掘調査報告書29 西ヶ谷道跡Ⅲ	2002

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書30 西ヶ谷遺跡4	2002
一般国道1号北勢バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ	2002
鈴鹿市教育委員会	
天王遺跡 第3次発掘調査報告	1998
天王遺跡 第5次発掘調査報告	2002
伊勢国分寺跡1	2002
伊勢国分寺跡2 第25次発掘調査概要報告	2002
伊勢国府跡4	2002
滋賀県 楽浪文化財修理所	
文化財修理報告書	2002
滋賀県立琵琶湖博物館	
琵琶湖博物館研究調査報告18号 2001年12月 安心院動物化石群	2001
滋賀県教育委員会	
特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅰ～伝前田利家邸跡～	2002
特別史跡安土城跡発掘調査報告12～主郭中心部天主台・本丸・本丸取付台 伝名坂屋跡の調査～	2002
安土城・織田信長関連文書調査報告書12 沙沙貴神社文書目録（旧近江国蒲生郡常楽寺村）	2002
織田期城郭基礎調査報告書3	2002
京都府 奈良岡京市埋蔵文化財センター	
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第25集	2002
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第26集	2002
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 長岡京跡右京第736次 園田道跡発掘調査報告	2002
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第27集	2003
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第30集 長岡京跡右京第751次発掘調査報告	2003
大坂府 御大坂府文化財調査研究センター	
御大坂府文化財調査研究センター調査報告書 第40集 大坂府長岡京市・茨田町所在 篠原（鴨路文化都市公園）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書	1999
京都市教育委員会	
京中の建造物 京中市歴史的建造物調査報告書	2002
箕輪遺跡～第一次発掘調査報告書～	2002
京中市文化財調査報告 第46集 葛原遺跡第14次・15次発掘調査報告	1999
京中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成14年度（2002年度）	2003
貝塚市教育委員会	
貝塚市埋蔵文化財調査報告 第59集 加治・神前・島中道跡発掘調査概要10	2001
貝塚市埋蔵文化財調査報告 第60集 江田北道跡発掘調査概要	2001
貝塚市埋蔵文化財調査報告 第61集 森下代道跡発掘調査概要	2002
貝塚市埋蔵文化財調査報告 第62集 貝塚市道跡群発掘調査概要24	2002
八尾市教育委員会	
八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3 平成13年度	2002
八尾市文化財調査報告46 平成13年度国庫補助事業 八尾市内道跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ	2002
八尾市文化財調査報告47 平成11～13年度公共事業 八尾市内道跡平成13年度発掘調査報告書Ⅱ	2002
高槻市教育委員会	
高槻市文化財調査概要ⅩⅢ 嶋上道跡群26	2002
熊取町教育委員会	
熊取町埋蔵文化財調査報告 第37集 熊取町道跡群発掘調査概要報告書Ⅲ	2002
熊取町埋蔵文化財調査報告 第38集 久保A道跡発掘調査概要報告書Ⅰ	2002
熊取町埋蔵文化財調査報告 第39集 小畑内西道跡発掘調査概要報告書Ⅰ	2002
兵庫県 尼崎市教育委員会	
平成10年度国庫補助事業 尼崎市内道跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書 尼崎市文化財調査報告 第30集	2002

赤松市教育委員会	
赤松市文化財調査報告書52 有年原・田中道跡 2 宅地開発事業に伴う発掘調査	2001
赤松市文化財調査報告書54 有年原・田中道跡 3 赤松市立原小学校校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	2002
赤松市文化財調査報告書55 赤松城跡二の丸堀廻路帯池発掘調査概要	2002
八千代町教育委員会	
八千代町文化財調査報告書 第3冊 保木道跡・片瀬道跡・花ノ宮道跡・深田道跡 兵部馬多可郡八千代町野田川流域の道跡調査報告1	2002
妙見山頂道跡調査会	
宅原道跡 豊浦地区の調査 (1987年)	2002
奈良県 御元興寺文化財研究所	
元興寺文化財研究所研究報告2001 増澤文武氏退職記念	2002
元興寺 同元興寺樹家坊本堂ほか防災施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
奈良大学 文学部考古学研究室	
多可寺道跡 1980～1982年度発掘調査報告書	2001
奈良県立橿原考古学研究所	
奈良県文化財調査報告書 第58集 紫谷道跡群	1985
奈良県文化財調査報告書 第71集 東大寺三社池－史跡東大寺境内の発掘調査－	1996
奈良県文化財調査報告書 第83集 西坊城道跡	1999
奈良県文化財調査報告書 第84集 長谷寺	1999
奈良県文化財調査報告書 第86集 F永東方道跡－京奈和自動車道「大和川」の建設に伴う発掘調査報告書Ⅲ－	2001
奈良県文化財調査報告書 第87集 地光寺 第3次・第4次調査	2002
奈良県文化財調査報告書 第88集 永本古墳発掘調査報告書	2001
奈良県文化財調査報告書 第89集 青島古墳周辺の調査	2002
奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第75冊 坪井・大堀道跡	2000
奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第78冊 菅田道跡	2000
奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第79冊 居伝道跡	2000
東判馬道跡 町道三宅3号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書	2002
奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告 第66冊 野山道跡群Ⅲ	1992
奈良県道跡調査概報 (第三分冊) 1997年度	1998
奈良県道跡調査概報 (第一分冊) 1998年度	1999
奈良県道跡調査概報 (第二分冊) 1998年度	1999
奈良県道跡調査概報 (第三分冊) 1998年度	1999
奈良県道跡調査概報 (第一分冊) 1999年度	2000
奈良県道跡調査概報 (第二分冊) 1999年度	2000
奈良県道跡調査概報 (第三分冊) 1999年度	2000
和歌山県 和歌山市教育委員会	
和歌山市内道跡発掘調査概報 平成12年度	2002
和歌山県市文化体育振興事業団	
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第24集 秋月道跡 第8次発掘調査概報	2000
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第28集 太田・黒田道跡 第47次発掘調査概報	2001
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第29集 史跡和歌山城 第23次発掘調査概報	2001
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第31集 太田・黒田道跡 第49次発掘調査概報	2002
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第32集 有功道跡 第3次発掘調査概報	2002
鳥取県 松江市教育委員会	
松江市文化財調査報告書 第91集 市道真名井神社敷地整備事業に伴う大坪道跡発掘調査報告書	2002
松江市文化財調査報告書 第92集 倉人道跡・荒瀬城跡 (小十郎地区) 発掘調査報告書	2002
浜田市教育委員会	
浜田市道跡詳細分布調査－同府地区1－平成11年度～13年度 市内道跡発掘調査報告書	2002

鳥取県教育委員会		
石見銀山 石見銀山道跡科学調査報告書 平成10年度～12年度		2002
鳥取県古代文化センター調査研究報告書12 青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）		2002
古志本郷道跡Ⅳ・畠れ山横穴墓群・貝谷洞跡・上沢Ⅱ道跡（分析編）斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14		2002
尾倉古墳群・島崎古墳群・足利古墳群・長瀬古墳群・西郷城跡・杵ノ観音Ⅰ古墳群・杵ノ観音Ⅱ道跡		2002
主要地方道穴道Ⅰ跡・飯沼道改築Ⅰ工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		2002
馬場道跡・杉ノ嶺道跡・客山墳墓群・道行道跡 国道431号縦バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ		2002
石見銀山道跡石造物調査報告書Ⅱ（石見銀山（龍昌寺跡）		2002
白石大谷Ⅰ道跡・惣三郎道跡・堀田ノ谷道跡・地蔵院道跡・惣谷道跡 中国横断自動車道尾道道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ		2002
堤平道跡 中国横断自動車道尾道道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ		2002
上野Ⅱ道跡 弥生後期集落及び政治的関連道跡の調査 中国横断自動車道尾道道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ		2001
鳥取県那賀三刀屋町 馬場道跡発掘調査報告書 中国横断自動車道尾道道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ		2001
地蔵道跡② 自然科学分析編 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ		2002
下山道跡② 縄文時代遺構の調査 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ		2002
神原Ⅱ道跡 1997年の調査成果（第Ⅰ・Ⅱ分冊）志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅼ		2002
小丸道跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅽ		2002
殿岡山道跡・獅子谷道跡① 道橋・遺物編 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅾ		2002
貝谷道跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅿ		2002
田中谷道跡・塚山古墳・下がり松道跡・角谷道跡 法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		2002
東船道跡 旧石器時代から近代までの複合道跡の調査 隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第2巻		2002
御崎谷Ⅱ道跡 海軍聖域の官舎跡の調査 隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3巻		2002
石見銀山道跡発掘調査概要Ⅺ 石見銀山 於紅ノ谷地区		2001
石見銀山道跡発掘調査概要Ⅻ 石見銀山 於紅ノ谷地区・竹田地区		2002
荒神谷道跡・加茂岩倉道跡 青銅器大量埋納の道跡		2002
加茂岩倉道跡		2002
岡山県 岡山県教育委員会		
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 162 服部道跡・北浦手道跡・窪木道跡・高松田中道跡 岡山自動車道4車線化に伴う発掘調査		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 163 水Ⅰ道跡 広域営農団地農道整備事業（備前東部地区）に伴う発掘調査		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 164 百間川米田道跡 旭川放水路改修工事に伴う発掘調査Ⅳ		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 165 立石道跡・大田道跡・六番丁場道跡・丸巻丁場道跡一敷Ⅱ道跡179号線道路改築工事に伴う発掘調査		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 166 下湯原B道跡・藤近山城跡 一般国道313号改良工事に伴う発掘調査		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 168 福見Ⅰ道跡・殿釜道跡・大高下道跡・大新堀道跡 主要地方道加茂興津線改良に伴う発掘調査		2002
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告169 神の墓道跡ほか 矢掛町山田地区県営市場整備事業に伴う確認調査		2002
岡山市教育委員会		
新道道跡 備前国鹿田庄開道道跡の発掘調査報告		2002
岡山城 三之曲輪跡 表町Ⅰ丁地区再開発ビル建設に伴う発掘調査		2002
広島県 福山市教育委員会		
井ノ岡道跡 県営福山沼隈地区農林漁業利用発掘財源身分農道整備事業に伴う発掘調査報告書		2001
泉山城跡 駅家北部未給水地域解消工事に伴う発掘調査報告書		2002
最明寺跡南道跡 一般県道下御領新市線道路改良工事に伴う発掘調査報告書		2002
跡東広島市教育文化振興事業団		
文化財センター調査報告書 第24冊 高岡町作原 西本2、3、4、7号道跡発掘調査報告書		1999
府中市教育委員会		
府中市埋蔵文化財調査報告 第12集 府中市内道跡6～1999年度調査に関する報告 備後国府跡（金龜寺東道跡）他		2001
府中市埋蔵文化財調査報告 第13集 坊道跡群 府中市元町土地区画整理事業（桜が丘団地造成）に伴う発掘調査報告		2001
府中市埋蔵文化財調査報告 第14集 矢谷道跡・古墳群 老人保健施設建設予定地造成工事に伴う発掘調査報告		2001
府中市埋蔵文化財調査報告 第15集 府中市内道跡7～2000年度調査に関する報告（備後国府跡（金龜寺東道跡）他		2002

山口県 下関市教育委員会

下関市埋蔵文化財調査報告書57	追山山麓道跡	山口県下関市安国町四丁目地内追山山麓道跡発掘調査報告書	2002
下関市埋蔵文化財調査報告書58	勝谷丸山古墳群	山口県下関市大字勝谷丸山地内勝谷丸山古墳群発掘調査報告書	2002
下関市埋蔵文化財調査報告書59	長門川府跡	山口県下関市長府惣社町地内長門川府跡発掘調査報告書	2002
下関市埋蔵文化財調査報告書61	古母堂の下道跡	山口県下関市大字吉田字堂のす地内吉田堂の下道跡発掘調査報告書	2002
下関市埋蔵文化財調査報告書63	勝谷丸山古墳群	山口県下関市大字勝谷丸山地内勝谷丸山古墳群第2次発掘調査報告書	2002
下関市埋蔵文化財調査報告書65	延行系里道跡	山口県下関市大字延行字神明地内延行系里道跡発掘調査報告書	2002

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第27集	萩城跡(外堀地区)Ⅰ	2002
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第28集	向田道跡Ⅱ	2002
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第29集	西道跡	2002
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第30集	都司跡道跡	2002
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第31集	竜王南道跡	2002
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第32集	武久浜墳墓群	2002

山口市教育委員会

山口市埋蔵文化財調査報告 第78集	山口市内道跡詳細分布調査 嘉川地区	2002
山口市埋蔵文化財調査報告 第80集	上東道跡 古墳時代以降道物編	2002

防府市教育委員会

防府市有形文化財調査報告 石田地区(2)	防府市文化財調査報告Ⅱ	2002
平成11年度 防府市内道跡発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要 0101	2001
井上山経塚・下山ノ口道跡発掘調査報告	防府市埋蔵文化財調査概要 0111	2001

下関市石原町地区地区整理組合・個人間文化都市研究所

塚の原道跡	下関市石原町上地区地区整理事業に伴う発掘調査報告書	2001
-------	---------------------------	------

徳島県 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第27集	田上道跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14	2000
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第34集	栗郷道跡・坊間道跡	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書17	2001
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第38集	土井道跡(第1・第2分冊)	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書19	2001
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第39集	吉水道跡	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書20	2001
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集	観音寺道跡Ⅰ	一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査	2002
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第42集	花園道跡・沢田調査地跡	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書22	2001
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第43集	古町道跡	一般国道47号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002

香川県 高校市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告 第55集	宮西・一角道跡(平成11・12年度)	市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊	2001
高松市埋蔵文化財調査報告 第56集	四原道跡	太田第2土地地区地区整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第五冊	2001
高松市埋蔵文化財調査報告 第57集	東中道跡-第1次調査-都市計画道路東浜港川/宮後建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊		2001
高松市埋蔵文化財調査報告 第58集	山良南原道跡	高松市川東地区住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
高松市埋蔵文化財調査報告 第59集	高松市内道跡発掘調査概要 平成13年度(4)補助事業		2002

愛媛県 愛媛県埋蔵文化財調査センター

久保道跡	太保1号墳	一般国道11号小松バイパス埋蔵文化財調査報告書 第1集	2002
土居山道跡	新製紙試験場(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書		2002
祝谷西山道跡	主要地方道松山北東幹線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書		2002
道後町道跡	都市計画道路東・万道後線(道後工区)整備に伴う埋蔵文化財調査報告書		2002
湯築城跡	第5分冊		2002

愛媛大学埋蔵文化財調査室

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報-1995・1996年度-愛媛大学埋蔵文化財調査報告書		2001
愛媛大学埋蔵文化財調査室年報-1997・1998年度-愛媛大学埋蔵文化財調査報告書		2002

柳井橋歴史文化財調査センター

東峰道跡第2・4地点 高見1道跡 因幡國賀自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 双海町編	2002
中城跡 底なし田1道跡元城跡 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大洲市編	2002
土居宮道跡2次 祝谷畑中道跡 祝谷本村道跡2次—都市計画道路建設後祝谷線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書— 幸の木道跡—一級国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書 第2集—	2002

松山市教育委員会 埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書87 佛味四反地遺跡—第5次調査—	2002
松山市文化財調査報告書89 松ヶ谷道跡	2003
松山市文化財調査報告書90 瀬見山古墳群	2003

今治市教育委員会

今治市埋蔵文化財調査報告書 第64集 高橋ノ下道跡・高橋ノ寺道跡・高橋ノ路道跡	2002
今治市埋蔵文化財調査報告書 第65集 高橋ノ路道跡第3次調査	2002
今治市埋蔵文化財調査報告書 第66集 松本広田道跡(松木道跡群) I	2002
今治市埋蔵文化財調査報告書 第67集 市内道跡試験確認調査報告書Ⅳ	2002

愛媛県松野町教育委員会

松野町文化財調査報告 第10集 国指定史跡 河後森城跡環境整備事業概要報告書Ⅰ—西部ゾーン—	2002
--	------

福岡県 北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室

北九州市埋蔵文化財調査報告書 第268集 重留道跡第3地点 若瀬町緑住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告2	2001
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第269集 重留道跡第5地点 若瀬町緑住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告3	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第270集 重留道跡第6地点 若瀬町道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告1	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第271集 小倉城代米御蔵跡Ⅰ 城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第272集 小倉城代米御蔵跡Ⅱ 城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第273集 高橋道跡群・高橋道跡第11地点・高橋道跡第12地点・高橋竹下町道跡	2001
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第274集 誕生寺中道跡Ⅰ(3区・4区の調査) 長行田町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅰ	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第275集 黒崎貝塚第5次 駿川都市基盤河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第276集 長野尾登道跡第2地点C区・D区 北九州市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告6	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第277集 貫川道跡12 貫川環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告1	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第278集 中村道跡 市民福祉センター建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第279集 牛丸道跡 市民福祉センター建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第280集 黒崎道跡	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第281集 長野尾登道跡第3地点A区 東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告1	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第282集 室町道跡第3次004日本産業衛生会本社ビル建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第283集 船屋町道跡 ビジネスホテル建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第284集 大里八反田道跡	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第285集 紅梅A道跡3	2002
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第286集 長野尾登道跡 第2地点(E区—H区) 北九州市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書7	2002

北九州市教育委員会

北九州市文化財調査報告書 第89集 長野城 長野城の分布・確認調査	2000
北九州市文化財調査報告書 第93集 立場茶屋跡銀倉 保存修理事業に伴う埋蔵文化財の確認調査	2002
北九州市文化財調査報告書 第94集 先ノ下道跡第2地点 店舗付マンション建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査	2002
北九州市文化財調査報告書 第95集 今村河川町道跡	2002
北九州市文化財調査報告書 第96集 大手町道跡第3地点 マンション建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査	2002

福岡県教育委員会

一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第16集 船越高原A道跡Ⅲ 福岡県浮羽郡田主丸・吉井町所在道跡の調査	2002
一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第17集 堂畑道跡Ⅰ 福岡県浮羽郡吉井町大字新泊所在道跡の調査	2002
一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第18集 松門寺A道跡 福岡県浮羽郡田主丸町大字常盤所在道跡の調査	2002
福岡県文化財調査報告書 第168集 西新町道跡Ⅳ 福岡県福岡市早良区西新所西新町道跡第13次調査報告Ⅰ 上巻・下巻	2002
福岡県文化財調査報告書 第169集 宝満山道跡群・浦ノ田道跡Ⅱ	2002

福岡県文化財調査報告書 第170集	内ヶ崎遺跡 福岡市大塚山建設に伴う福岡県直方市大字野所近在近世遺跡の調査	2002
福岡市教育委員会		
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第696集	飯合C遺跡 第5次調査	2001
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第697集	鶴崎古墳群 3 B-5号墳の調査	2001
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第698集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第698集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第699集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第699集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第700集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第700集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第701集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第701集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第702集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第702集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第703集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第703集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第704集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第704集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第705集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第705集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第706集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第706集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第707集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第707集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第708集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第708集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第709集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第709集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第710集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第710集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第711集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第711集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第712集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第712集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第713集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第713集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第714集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第714集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第715集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第715集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第716集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第716集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第717集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第717集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第718集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第718集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第719集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第719集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第720集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第720集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第721集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第721集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第722集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第722集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第723集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第723集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第724集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第724集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第725集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第725集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第726集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第726集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第727集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第727集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第728集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第728集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第729集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第729集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第730集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第730集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第731集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第731集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第732集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第732集	2002
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第733集	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第733集	2002
大牟田市教育委員会		
大牟田市文化財調査報告書 第49集	大牟田市文化財調査報告書 第49集	1997
大牟田市文化財調査報告書 第50集	大牟田市文化財調査報告書 第50集	1999
大牟田市文化財調査報告書 第51集	大牟田市文化財調査報告書 第51集	1999
大牟田市文化財調査報告書 第52集	大牟田市文化財調査報告書 第52集	1999
大牟田市文化財調査報告書 第53集	大牟田市文化財調査報告書 第53集	2001
大牟田市文化財調査報告書 第54集	大牟田市文化財調査報告書 第54集	2001

大牟田市文化財調査報告書 第55集	田原柿添道跡	2002
大牟田市文化財調査報告書 第56集	遊坂古墳Ⅱ 国史跡「遊坂古墳」の範囲確認調査報告書	2002
久留米市教育委員会		
久留米市文化財調査報告書 第177集	久留米市城下町 佛塚待屋敷道跡第4次調査	2001
久留米市文化財調査報告書 第178集	外野道跡・寛永寺宮庭道跡 久留米市道「宮本今C7号線」道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2001
久留米市文化財調査報告書 第179集	金丸道跡-第2・4次調査-「西筑大牟田線花畑駅付近連続立体交差事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2001
久留米市文化財調査報告書 第180集	久留米市埋蔵文化財調査報告Ⅱ 寺島道跡(第1次)津福西小路道跡(第2次)寛永寺宮庭道跡(第2次)安養寺境内道跡(第1次)	2002
久留米市文化財調査報告書 第181集	大岡道跡 第3次調査	2002
久留米市文化財調査報告書 第182集	筑後国府跡-平成12・13年度発掘調査概要報告-	2002
久留米市文化財調査報告書 第183集	平成13年度 久留米市内道跡群 市ノ上北屋敷道跡・上野道跡・念仏塚道跡・西小路道跡・山ノ内道跡・白川道跡・庄島待屋敷道跡	2002
筑後市教育委員会		
筑後市文化財調査報告書 第38集	筑後東部地区道跡群Ⅱ 福岡県筑後市大字鶴田所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第39集	上北島墓島道跡 福岡県筑後市大字上北島所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第40集	尾島町四道跡 福岡県筑後市大字尾島所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第41集	久高橋打道跡 福岡県筑後市大字久高所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第42集	津島九反坪道跡 福岡県筑後市大字津島所在道跡の埋蔵文化財調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第43集	筑後西部 第2地区道跡群Ⅲ 筑後市大字尾島所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第44集	筑後市内道跡群Ⅱ 筑後市大字淵野・鶴田・水田所在道跡の調査	2002
筑後市文化財調査報告書 第45集	筑後市内道跡群Ⅳ 筑後市大字鶴田・山ノ井所在道跡の調査	2002
行橋市教育委員会		
行橋市文化財調査報告書 第28集	崎野道跡 福岡県行橋市泉中央・丁目所在道跡の調査	2001
行橋市文化財調査報告書 第29集	柳井田早崎道跡・柳井田産々塚道跡	2001
豊前市教育委員会		
豊前市文化財報告書 第15集	河原田四ノ坪道跡(河原田道跡群1) 川内南原道跡	2002
小郡市教育委員会		
小郡市文化財調査報告書 第146集	力武内堀道跡3 福岡県小郡市大字力武字内堀所在の道跡の調査	2000
小郡市文化財調査報告書 第147集	花立山古墳群1 福岡県小郡市大字千壽字城山所在古墳時代の道跡の調査	2000
小郡市文化財調査報告書 第148集	寺福道跡2 福岡県小郡市寺福重所在道跡の調査	2000
小郡市文化財調査報告書 第149集	千高線山道跡 福岡県小郡市千高所在道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第150集	横隈佐野田道跡 福岡県小郡市横隈所在道跡の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第151集	三沢達ヶ浦道跡2 福岡県小郡市三沢所在道跡の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第152集	横隈上内堀道跡4 福岡県小郡市横隈所在道跡の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第153集	横隈十三塚道跡2 福岡県小郡市横隈所在道跡の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第154集	千高道跡6 福岡県小郡市千高所在道跡の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第155集	横隈上内堀道跡3 福岡県小郡市大字横隈字上内堀所在道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第156集	力武内堀道跡4 福岡県小郡市大字力武字内堀所在道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第157集	三沢達ヶ浦道跡4 福岡県小郡市大字三沢字達ヶ浦所在の道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第158集	三沢寺小路道跡2 福岡県小郡市三沢所在道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第159集	小郡若山道跡6 福岡県小郡市小郡所在の調査報告	2001
小郡市文化財調査報告書 第160集	大保西小路道跡2 福岡県小郡市大保所在道跡の調査	2001
小郡市文化財調査報告書 第161集	三沢ハサコ宮道跡Ⅲ 福岡県小郡市三沢ハサコ宮所在道跡の調査	2002
小郡市文化財調査報告書 第162集	横隈上内堀道跡6 福岡県小郡市横隈所在道跡の調査報告	2002
小郡市文化財調査報告書 第163集	小郡川原道跡Ⅱ 福岡県小郡市小郡才町所在道跡の調査報告	2002
小郡市文化財調査報告書 第164集	横隈十三塚道跡1 付録横隈十三塚道跡3	2002
小郡市文化財調査報告書 第165集	三沢吉賀道跡3 福岡県小郡市三沢所在道跡の調査報告	2002
小郡市文化財調査報告書 第166集	上岩田岡道跡2 平成10・11年度上岩田道跡6・7・8・9・10区の調査	2002
小郡市文化財調査報告書 第167集	小郡吉賀岡道跡2 福岡県小郡市小郡所在道跡の調査	2002
小郡市文化財調査報告書 第168集	小坂井並輪道跡 福岡県小郡市小坂井所在道跡の調査報告書	2002

小郡市文化財調査報告書	第169集	三沢北中尾道跡 1 地点 弥生時代の住居跡・貯蔵穴の調査	2002
小郡市文化財調査報告書	第170集	福倉山の上道跡 4 福岡県小郡市小郡所在道跡の調査報告	2002
筑紫野市教育委員会			
筑紫野市文化財調査報告書	第49集	大曲り道跡Ⅱ 筑紫野市針楢所在道跡調査	2000
筑紫野市文化財調査報告書	第50集	老松神社古墳群 配水池築造工事に伴う発掘調査	2002
筑紫野市文化財調査報告書	第60集	貝元道跡 1 九州自動車道筑紫野IC建設に伴う発掘調査報告	1999
筑紫野市文化財調査報告書	第62集	案内道跡 筑紫野市大字塔原所在道跡の調査	1999
筑紫野市文化財調査報告書	第64集	大平府桑坊跡 第165次発掘調査	2001
筑紫野市文化財調査報告書	第65集	山家地区史跡密蔵調査報告Ⅰ	2001
筑紫野市文化財調査報告書	第67集	槌ノ木道跡	2001
筑紫野市文化財調査報告書	第68集	ホリ道跡 第2次発掘調査	2001
筑紫野市文化財調査報告書	第69集	大平府桑坊跡 第152次発掘調査	2001
筑紫野市文化財調査報告書	第70集	峰古野 1 号墳 配水管布設工事に伴う発掘調査	2002
筑紫野市文化財調査報告書	第71集	栗田城 平堀道跡 第7次調査	2002
筑紫野市文化財調査報告書	第72集	堀池道跡Ⅱ	2002
筑紫野市文化財調査報告書	第73集	永岡道跡 永岡道跡 第4次発掘調査	2002
筑紫野市文化財調査報告書	第74集	平堀道跡 第6次発掘調査	2002
春日市教育委員会			
春日市文化財調査報告書	第32集	須玖カクツ道跡 福岡県春日市須玖南所在道跡の調査	2002
春日市文化財調査報告書	第33集	原ノ口道跡 福岡県春日市春日原南町所在道跡の調査	2002
春日市文化財調査報告書	第34集	立石道跡 福岡県春日市原町所在道跡の発掘調査	2002
大野城市教育委員会			
大野城市文化財調査報告書	第58集	坂口道跡	2002
宗像市教育委員会			
宗像市文化財調査報告書	第52集	徳重本村一福岡県宗像市徳重所在道跡の発掘調査報告一	2002
宗像市文化財調査報告書	第53集	福元馬場一福岡県宗像市福元所在道跡の発掘調査報告一	2002
前原市教育委員会			
前原市文化財調査報告書	第71集	神在横島道跡 福岡県前原市大字神在横島所在道跡の調査報告書	2000
前原市文化財調査報告書	第72集	長野川流域の道跡群Ⅲ 飯塚門口道跡 福岡県前原市大字飯塚門口所在道跡の調査報告書	2001
前原市文化財調査報告書	第73集	萩神社古墳群 携帯電話無線中継基地局建設に伴う文化財調査報告書	2001
前原市文化財調査報告書	第74集	蔵持道跡 蔵持高野いこいの家建設に伴う文化財調査報告書	2001
前原市文化財調査報告書	第75集	高祖道跡群Ⅲ一拾七小枝道跡第3次調査の記録一	2001
前原市文化財調査報告書	第76集	高田小生木道跡 福岡県前原市大字高田字小生木所在道跡の調査報告書	2001
前原市文化財調査報告書	第77集	三坂七尾道跡 福岡県前原市大字三坂字七尾所在道跡の調査報告書	2001
前原市文化財調査報告書	第78集	三雲・井原道跡Ⅱ一南小路地区編一福岡県前原市大字三雲・井原所在道跡の報告	2002
前原市文化財調査報告書	第80集	神在藤瀬家住宅 前原市神在藤瀬家住宅解体に伴う学術調査報告 2002年3月	2002
粕屋町教育委員会			
粕屋町文化財調査発掘書	第17集	内橋りあがり道跡 第4地点	2001
粕屋町文化財調査発掘書	第18集	江止道跡 第6地点 福岡県粕屋郡粕屋町所在多々食用浄化センター建設工事に伴う発掘調査報告書	2002
粕屋町文化財調査発掘書	第19集	江止道跡 第5地点 福岡県粕屋郡粕屋町所在民間物流倉庫建設工事に伴う発掘調査報告書	2002
那珂川町教育委員会			
那珂川町文化財調査報告書	第57集	槌木道跡群 筑紫郡那珂川町大字上親原字槌木所在道跡群の調査	2002
那珂川町文化財調査報告書	第58集	宗行道跡群 筑紫郡那珂川町大字今光・中原・片瀬所在道跡群の調査	2002
那珂川町文化財調査報告書	第59集	山田西道跡群Ⅲ 筑紫郡那珂川町大字山田字山城所在道跡群の調査	2002
三輪町教育委員会			
三輪町文化財調査報告書	第10集	国指定史跡仙道古墳発掘調査及び保存修理事業報告書	2001

夜須町教育委員会		
夜須町文化財調査報告書 第38集	泉造山家・西小田線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 惣利道跡Ⅰ 福岡県朝倉郡夜須町大字泉上所在道跡調査報告	1997
夜須町文化財調査報告書 第40集	夜須地区道跡群ⅡⅧ 道跡道跡Ⅰ 福岡県朝倉郡夜須町大字泉小田所在道跡調査報告	1997
夜須町文化財調査報告書 第45集	夜須地区道跡群ⅡⅨ 三笠宮ノ南道跡・本宮道跡・鎌瀬道跡 福岡県朝倉郡夜須町大字三笠・曾根田所在道跡調査報告	1999
夜須町文化財調査報告書 第46集	夜須地区道跡群ⅡⅩ 梨子木道跡 福岡県朝倉郡夜須町大字松尾所在道跡調査報告	1999
夜須町文化財調査報告書 第47集	夜須町立東小田小学校内道跡 大坪道跡Ⅱ 福岡県朝倉郡夜須町大字東小田所在道跡調査報告	1999
夜須町文化財調査報告書 第50集	赤坂古墳群Ⅰ 福岡県朝倉郡夜須町大字赤坂所在道跡調査報告	2000
夜須町文化財調査報告書 第51集	藤取古墳群Ⅱ 福岡県朝倉郡夜須町大字泉上所在道跡調査報告	2000
夜須町文化財調査報告書 第52集	曾根田前田道跡Ⅰ 福岡県朝倉郡夜須町大字曾根田所在道跡調査報告	2000
夜須町文化財調査報告書 第53集	八ヶ坪道跡(第11地点) 福岡県朝倉郡夜須町大字中田所在道跡調査報告	2000
夜須町文化財調査報告書 第54集	同前定史跡 鏡ノ崎古墳・城山道跡群Ⅳ 福岡県朝倉郡夜須町大字四ツ山所在道跡群の調査	2001
夜須町文化財調査報告書 第55集	夜須地区道跡群ⅡⅪ 中原道跡 福岡県朝倉郡夜須町大字東小田所在道跡調査報告	2001
夜須町文化財調査報告書 第56集	大木道跡Ⅲ 福岡県朝倉郡夜須町大字篠原所在道跡調査報告	2002
夜須町文化財調査報告書 第57集	曾根田前田道跡Ⅱ 福岡県朝倉郡夜須町大字曾根田所在道跡調査報告	2002
吉井町教育委員会		
吉井町文化財調査報告書 第13集	吉井町道跡群 千年地区道跡群 千年小森道跡・千年西田道跡	2001
吉井町文化財調査報告書 第14集	吉井町道跡群 屋敷西文蔵道跡	2001
吉井町文化財調査報告書 第15集	吉井中学校道跡 道標堀 吉井中学校改築に伴う埋蔵文化財発掘調査	2002
吉井町文化財調査報告書 第16集	広間地区道跡	2002
大刀洗町教育委員会		
大刀洗町文化財調査報告書 第22集	史跡下高橋宮街道跡周辺道跡Ⅰ 福岡県三井藩大刀洗町大字下高橋所在道跡の調査	2002
大刀洗町文化財調査報告書 第23集	高輪小道道跡 福岡県三井藩大刀洗町大字高輪所在道跡の調査	2002
高田町教育委員会		
高田町文化財調査報告書 第6集	渡山山 高田渡山公園造成に伴う埋蔵文化財調査報告書	2002
高田町文化財調査報告書 第4集	上輪田高田道跡 高田町所在の社会福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
高田町文化財調査報告書 第5集	立野道跡 高田町内における携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2001
高田町文化財調査報告書 第3集	白石道跡 福岡県三井藩高田町ゴルフ場開発に伴う文化財発掘調査報告書	1999
豊津町教育委員会		
豊津町文化財調査報告書 第25集	豊津町内道跡等分布地図	2001
豊津町文化財調査報告書 第26集	山ノ神道跡	2002
豊津町文化財調査報告書 第27集	荒谷南道跡	2002
新吉富村教育委員会		
新吉富村文化財調査報告書 第15集	宇野地区道跡群Ⅳ 福岡県築上郡新吉富村所在道跡群の調査	2002
佐賀県 佐賀県教育委員会		
佐賀県文化財調査報告書 第135集	佐賀県地籍調査成果Ⅱ 肥前国 佐嘉郡二	1998
佐賀県文化財調査報告書 第143集	佐賀県地籍調査成果Ⅲ 肥前国 佐嘉郡三	2000
佐賀県文化財調査報告書 第150集	輪比道跡群Ⅱ 第1分冊、第2分冊、第3分冊	2002
切畑道跡	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書04	1993
佐賀県文化財調査報告書 第136集	陸所三本松道跡・下中松道跡・田手二本松道跡・基跡森道跡 筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5	1998
佐賀県文化財調査報告書 第138集	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書16	1998
佐賀県文化財調査報告書 第141集	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書17	1999
佐賀県文化財調査報告書 第144集	京の館道跡・井ヶケ道跡 西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書Ⅰ	2000
佐賀県文化財調査報告書 第145集	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書18	2000
佐賀県文化財調査報告書 第147集	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書19	2001

佐賀市教育委員会				
佐賀市文化財調査報告書	第127集	徳永道跡群Ⅱ 徳永道跡20区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書13	2001
佐賀市文化財調査報告書	第128集	徳永道跡群Ⅲ 徳永道跡21区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書14	2001
佐賀市文化財調査報告書	第129集	椎見原道跡 椎見原道跡2区一弥生時代集落の調査一		2002
佐賀市文化財調査報告書	第130集	増田道跡群Ⅱ一増田道跡4・5区の調査一		2002
佐賀市文化財調査報告書	第131集	平尾二本杉道跡Ⅱ-1区の調査一		2002
佐賀市文化財調査報告書	第132集	平尾二本杉道跡Ⅱ-2-6区の調査一		2002
佐賀市文化財調査報告書	第133集	石上井道跡・上九郎道跡		2002
佐賀市文化財調査報告書	第134集	佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書一1999年度一		2002
佐賀市文化財調査報告書	第135集	上和京道跡群Ⅱ 上和京道跡9区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書15	2002
佐賀市文化財調査報告書	第136集	徳永道跡群Ⅳ 徳永道跡3区・上和京道跡8区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書16	2002
佐賀市文化財調査報告書	第137集	徳永道跡群Ⅴ 徳永道跡7区・16区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書17	2002
佐賀市文化財調査報告書	第138集	徳永道跡群Ⅵ 徳永道跡13区・19区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書18	2002
佐賀市文化財調査報告書	第139集	徳永道跡群ⅦⅠ 徳永道跡17区	佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書19	2002
唐津市教育委員会				
唐津市文化財調査報告書	第103集	川原道跡 中山岡地蔵合祭園事業に伴う埋蔵文化財調査		2002
唐津市文化財調査報告書	第104集	佐志中通道跡(2)		2002
唐津市文化財調査報告書	第105集	天神ノ元道跡 原道平田丸塚築造改良工事に伴う埋蔵文化財調査		2002
唐津市文化財調査報告書	第106集	唐津市内道跡確認調査⑧ 上地開発に伴う市内道跡確認調査報告		2002
武雄市教育委員会				
武雄市文化財調査報告書	第42集	梶原道跡 J R佐賀保線鉄道高架事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		2002
佐賀県佐賀郡久保田町教育委員会				
久保田町文化財調査報告書	第5集	快方道跡Ⅰ区・Ⅱ区 主要地方道佐賀外環状緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		2002
神埼町教育委員会				
早越岡山 佐賀県神埼郡神埼町早越岡山に所在する天神尾古墳・寺山古墳群の発掘調査概要報告書				1997
神埼町文化財調査報告書	第27集	五田道跡Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の発掘調査報告書		1991
神埼町文化財調査報告書	第28集	井手道跡・道田道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の発掘調査報告書		1991
神埼町文化財調査報告書	第30集	本郷朝日道跡Ⅳ・Ⅴ区 佐賀県神埼郡神埼町大字本郷所在道跡の発掘調査報告書		1992
神埼町文化財調査報告書	第33集	約5本黒木道跡Ⅳ区 佐賀県神埼郡神埼町大字約5本黒木所在道跡の発掘調査報告書		1993
神埼町文化財調査報告書	第35集	城原二本谷西道跡・城原三本谷北道跡Ⅲ区・三本谷南道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字城原所在道跡の調査概要報告書		1993
神埼町文化財調査報告書	第36集	城原三本谷北道跡・城原三本谷南道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字城原所在道跡の調査概要報告書		1993
神埼町文化財調査報告書	第37集	森の木道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の発掘調査報告書		1993
神埼町文化財調査報告書	第41集	花手道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の発掘調査報告書		1995
神埼町文化財調査報告書	第42集	本郷朝日道跡Ⅱ・Ⅲ区 佐賀県神埼郡神埼町大字本郷所在道跡の調査		1995
神埼町文化財調査報告書	第14集	的小道道跡 12区 佐賀県神埼郡大字約5本黒木所在道跡の調査 中瀬道跡		1987
神埼町文化財調査報告書	第26集	馬部・竹原道跡群 佐賀県神埼郡大字志波・鶴所在道跡の調査		1990
神埼町文化財調査報告書	第13集	本谷平田道跡・的小道道跡 昭和60年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書		1986
神埼町文化財調査報告書	第38集	城原三本谷北道跡Ⅱ区・城原三本谷南道跡Ⅰ区 佐賀県神埼郡神埼町大字城原所在道跡の発掘調査報告書		1994
神埼町文化財調査報告書	第44集	坂原道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の調査報告書		1995
神埼町文化財調査報告書	第45集	馬部道跡・竹原道跡群 佐賀県神埼郡神埼町大字志波・鶴所在道跡の調査報告書		1995
神埼町文化財調査報告書	第50集	綿川城跡 佐賀県神埼郡神埼町大字綿川所在道跡の発掘調査報告書		1996
神埼町文化財調査報告書	第57集	横武城跡 佐賀県神埼郡神埼町大字横武所在道跡発掘調査報告書		1997
神埼町文化財調査報告書	第58集	尾崎土生道跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡の発掘調査報告書		1997
神埼町文化財調査報告書	第55集	尾崎利田道跡 佐賀県神埼郡神埼町大字尾崎所在道跡発掘調査概要報告書		1996
鍋田町教育委員会				
鍋田町文化財調査報告書	第20集	北条氏道跡		2002

長崎県 大村市教育委員会	
里丸道跡ほか発掘調査概報 Vol. 3 1998～2002	2003
鹿島町教育委員会	
鹿島町文化財調査報告書 第3集 鹿島海底道跡Ⅳ 鹿島海底道跡跡内容確認 発掘調査報告書①	2001
鹿島町文化財調査報告書 第4集 鹿島海底道跡Ⅴ 長崎県北松浦郡鹿島町神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書②	2001
鹿島町文化財調査報告書 第5集 鹿島海底道跡Ⅵ 鹿島海底道跡跡内容確認発掘調査報告書②	2002
鹿島町文化財調査報告書 第6集 鹿島海底道跡Ⅶ 長崎県北松浦郡鹿島町神崎港改修工事に伴う発掘調査概報	2002
大村市文化財保護協会	
玖島城跡 ～国道34号線拡幅対策事業に伴う発掘調査～	2002
玖島城跡 ～国道34号線拡幅に伴う汚水管移設工事に伴う発掘調査～	2002
鹿原教育委員会	
鹿原町文化財調査報告書 第6集 矢立山古墳群発掘調査概報②	2002
熊本県 熊本市教育委員会	
大江道跡群Ⅳ～大江道跡群第68次調査区発掘調査報告書～	2002
池辺寺跡Ⅳ～平成12年度発掘調査報告書～	2002
つつじヶ丘横穴群～発掘調査報告書～	2002
熊本大学文学部考古学研究室	
考古学研究室報告 第37集 I・ナガラ原東貝塚 Ⅱ・大久保貝塚	2002
人吉市教育委員会	
人吉市文化財調査報告書 第20集 人野道跡群 大野C・D・E道跡 大野地区ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
玉名市教育委員会	
玉名市文化財調査報告 第10集 今見道跡・平町道跡・龜井道跡 都市計画街路築地芝園寺横道跡改良工事に伴う埋蔵文化財の調査	2002
玉名市文化財調査報告 第11集 玉名市内道跡調査報告書Ⅰ 平成11・12年度の調査	2002
熊本県球磨郡相良村教育委員会	
相良村文化財調査報告 第2集 永谷道跡 平成9年度昭宮ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告	2001
大分県 久佳町教育委員会・大分県教育委員会	
小城原道跡・中原道跡 照宮担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ	2002
仏原子人塚古墳群 照宮担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ	2002
大分県教育委員会	
大分県文化財調査報告書 第132輯 利光道跡・一般国道10号(戸次・大船堀)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2001
大分県文化財調査報告書 第133輯 鶴崎御茶屋跡 大分県立大分鶴崎高等学校普通教室棟改築に伴う調査	2002
大分県文化財調査報告書 第134輯 下野道跡・一般国道213号日出バイパス工事に伴う調査	2002
大分県文化財調査報告書 第135輯 毛井道跡B地区 国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告	2002
大分県文化財調査報告書 第136輯 戸川道跡 国道502号線道路改良工事に伴う調査	2002
大分県文化財調査報告書 第137輯 尾崎道跡・清水道跡・新田道跡・川野道跡・久木小道跡・平沼道跡 東九州自動車道四国橋埋蔵文化財発掘調査報告書③	2002
大分県文化財調査報告書 第138輯 西上寺道跡・毛見所道跡・上久所道跡・浄土寺道跡 国道197号東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第140輯 弥西郎道跡・王子道跡 国道213号日出バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第141輯 古志原道跡 国道212号(中津田道跡)・本郷河(一郷河)道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第142輯 山ノ下道跡 鹿田火山跡除塵工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第143輯 諸太郎原道跡・上ノ原宿坂古墳 県道門原中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第144輯 真光道跡群 国道197号大分南バイパス道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第145輯 東大道路跡(B地区) 庄ノ原佐野橋建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書①	2002
大分県文化財調査報告書 第146輯 久保田道跡 県道鶴崎大南線道路改良工事関係に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
大分県文化財調査報告書 第147輯 真野井城山道跡 県道日出真野井峠築造道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	2002
日田市高瀬道跡群の調査 4 寺内道跡・上野第2道跡 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ	2002
大分市教育委員会	
玉沢地区全里路第2次発掘調査報告書 玉沢上地区両側整理事業及び大規模店舗建設に伴う発掘調査	2002

中津市教育委員会	
2001年度 中津地区道跡群発掘調査概報Ⅲ 中津市文化財調査報告書 第27集 神代地区東部原田地区・大山田地区東部原田地区・中津城本丸南西石垣	2002
大分県立歴史博物館	
大分県山崎道跡群発掘調査報告書Ⅹ 興壽寺・報恩寺・妙善寺・正光寺・西山寺・順成院寺 大分県立歴史博物館調査報告書 第6集	2002
皇陵回安坂部3 国東半島在岡村落道跡詳細分布調査概報	2002
国東町教育委員会	
大分県国東町文化財整備報告書 第1集 史跡安国寺集落道跡整備事業報告書	2001
大分県国東町文化財調査報告書 第20集 国東町の堂宇-米道地区-	2000
大分県国東町文化財調査報告書 第21集 安国寺道跡(吉野ノ・御園)地区)原道跡(御田3・4・原ノ下1・2地区) 県営開場整備岡田川南地区関係発掘調査報告書	2001
大分県国東町文化財調査報告書 第22集 原道跡(龜井1・平坂1・七郎丸1地区) 県営開場整備事業国東川南地区関係発掘調査報告書	2001
大分県国東町文化財調査報告書 第23集 国史跡安国寺集落道跡 地方拠点史跡等総合整備事業に伴う発掘調査報告書	2001
大分県国東町文化財調査報告書 第24集 国東町の堂宇-富米地区-	2001
大分県国東町文化財調査報告書 第26集 飯塚道跡 坂町東部広域連合総合文化施設建設に伴う発掘調査報告書	2002
大分県国東町文化財調査報告書 第27集 国東町の堂宇-上岡崎・豊崎地区-	2002
三木地区道跡群発掘調査概報Ⅵ 道ノ上古墳・上田原道跡・正福寺宝篋印寺・市場道跡(沖ノ田地区)・玉田地区	2002
西園郡香々地町教育委員会	
鎮座本道跡 香々地町北田地区宅地分譲地造成事業に伴う発掘調査	2002
大野町教育委員会	
大野地区道跡群発掘調査報告書Ⅱ 郡山南道跡 県営広域農道建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査	2002
久住町教育委員会	
県営担い手育成基盤整備事業久住町郡野東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中殿道跡	2002
県営担い手育成基盤整備事業久住町郡野東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 上地道跡	2002
日田郡天瀬町教育委員会	
天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集 塚田の道跡(本文編) 県営開場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(その2)	2002
宮崎県 宮崎県教育委員会	
平成13年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書	2002
特別史跡 西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書Ⅲ	2002
特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書 第3集 西都原100号墳	2002
宮崎市教育委員会	
宮崎市文化財調査報告書 第49集 坂下道跡Ⅱ	2001
宮崎市文化財調査報告書 第50集 江田原 第3道跡 北惟現通橋道路改修工事に伴う発掘調査報告書	2002
宮崎市文化財調査報告書 第51集 北中道跡Ⅱ 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎市文化財調査報告書 第52集 史跡生田古墳群 保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅱ	2002
宮崎市文化財調査報告書 第53集 宮崎小学校道跡 宮崎市教育情報研修センター建設に伴う発掘調査報告書	2002
都城市教育委員会	
都城市文化財調査報告書 第36集 平峰道跡 民間分譲住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1995
都城市文化財調査報告書 第37集 大浦道跡 臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1997
都城市文化財調査報告書 第46集 久良道跡第9・10次調査 祝吉・都元土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	1999
都城市文化財調査報告書 第48集 大久保第2道跡	1999
都城市文化財調査報告書 第49集 池ノ友道跡(第1次調査)	2000
都城市文化財調査報告書 第52集 大島・畠田道跡 史跡整備に伴う道跡範囲確認調査報告書	2000
都城市文化財調査報告書 第53集 志和池村古墳9号墳 民間開発に伴う発掘調査報告書	2001
都城市文化財調査報告書 第54集 天神道跡第2次・中町道跡第3次調査 中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	2001
都城市文化財調査報告書 第56集 桑原道跡 市内中学校校舎造替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
都城市文化財調査報告書 第58集 横市地区道跡群 県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う道跡の発掘調査概要報告書	2002
都城市文化財調査報告書 第50集 横市地区道跡群 県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う道跡の発掘調査報告書	2002

日南市教育委員会				
日南市埋蔵文化財調査報告書	第15集	平成13年度	日南市内道跡発掘調査概報	2002
日南市埋蔵文化財調査報告書	第16集	平成13年度	上城跡道跡	2002
日南市埋蔵文化財調査報告書	第17集	平成14年度	日南市内道跡発掘調査概報	2002
日南市埋蔵文化財調査報告書	第18集	平成14年度	水野道跡	2002
小林市教育委員会				
小林市文化財調査報告書	第13集	山谷道跡群	市谷地区泉宮掛い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書	2001
小林市文化財調査報告書	第14集	上関・平瀬野・大平道跡	500KV宮崎幹線新設工事に伴う発掘調査報告書	2002
西都市教育委員会				
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書	第31集	市内道跡発掘調査概要報告書Ⅱ	西都原地区道跡・日向四分寺跡	2002
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書	第32集	都於郡城跡発掘調査概要報告書Ⅰ		2002
えびの市教育委員会				
えびの市埋蔵文化財調査報告書	第36集	稲荷下道跡Ⅱ		2002
えびの市埋蔵文化財調査報告書	第37集	小阿九地区道跡群		2003
えびの市埋蔵文化財調査報告書	第38集	森田道跡		2003
宮崎県田野町教育委員会				
田野町文化財調査報告書	第43集	スグノ山第2道跡	F地区 泉宮郷地帯総合整備事業農村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
田野町文化財調査報告書	第44集	縄文集落	本野原道跡 泉宮農地保全整備事業玄野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎県埋蔵文化財センター				
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第50集	南字原第1・2道跡	一般道跡王寺土原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第51集	内城跡	一般国道219号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第52集	白々野第2・3道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第53集	磯原村道跡	田宮農業水利事業築路掘込2号ファームゴンド建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第54集	柳道跡	龍泉寺道跡 吉岡ニュータウン地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第55集	下屋敷道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第56集	上ノ原道跡		2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第57集	迫内道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第58集	本城跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第59集	白々野第2・3道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第60集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第61集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第62集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第63集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第64集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第65集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第66集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第67集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅼ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第68集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅽ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第69集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅾ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第70集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第71集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅰ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第72集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅱ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第73集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅲ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第74集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅴ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第75集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅵ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第76集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅶ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第77集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅷ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第78集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅸ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第79集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅹ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第80集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅺ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第81集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅽ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第82集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅾ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第83集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第84集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第85集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第86集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第87集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第88集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第89集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第90集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第91集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第92集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第93集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第94集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第95集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第96集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第97集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第98集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第99集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書	第100集	上ノ原道跡	東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅿ	2002
北郷町教育委員会				
北郷町文化財調査報告書	第11集	北郷町内道跡発掘調査概要報告書2001年度		2002
三股町教育委員会				
三股町文化財調査報告書	第4集	三股町内道跡Ⅱ		2002
西諸県郡高瀬町教育委員会				
高瀬町文化財調査報告書	第9集	町内道跡Ⅱ		2002
高岡町教育委員会				
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第16集	天ヶ城跡	地城づくり事業(天ヶ城公園整備)に伴う埋蔵文化財調査報告書 上巻・下巻	1998
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第17集	小田元道跡・久木野道跡(5～7地区)		1999
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第18集	宇留道跡	町道第2合線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	2000
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第19集	高岡町内道跡Ⅰ		2000
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第20集	野の道跡	N T九州移動通信網電波基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2001
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第21集	三上江道跡	泉宮掛い手育成基盤整備事業峯地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2001
高岡町埋蔵文化財調査報告書	第22集	中塚道跡	泉宮農林漁業利用開発施設建設身替長道敷整理事業内山南地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2001

高岡市埋蔵文化財調査報告書 第23集 高野塚遺跡 昭宮ふるさと農道緊急整備事業(小山田地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
高岡市埋蔵文化財調査報告書 第24集 高岡町内道跡遺 昭宮ふるさと農道緊急整備事業(小山田地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
鹿児島県	
鹿児島県教育委員会 管理課文化課	
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書35 原田久保遺跡 宇治中河地区土地区画整理事業に伴う鹿児島市市道西道跡宇治中河本線築造に係る原田久保遺跡埋蔵文化財確認調査・緊急発掘調査	2002
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書36 春井町道跡B地点 マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告書	2002
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書37 武道跡E地点 西鹿児島駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書	2002
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書38 名山道跡 名山小学校校庭整備事業に伴う第5次埋蔵文化財確認調査報告書	2002
墨水市教育委員会	
墨水市埋蔵文化財発掘調査報告書5 宮下道跡・小川前道跡(徳王寺口道跡・中牟田道跡)	2001
松元町教育委員会	
松元町埋蔵文化財発掘調査報告書4 外園道跡 畑地帯総合整備(担い手育成型)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2002
給良町教育委員会	
給良町文化財調査報告書2 給良町の指定文化財	2002
給良町文化財発掘調査報告書 第8集 延昌城跡『(仮称)給良町歴史と憩いの森公園』整備計画に伴う平成11～13年度発掘調査概要報告書	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書22 給良郡加治木町 千道1・Ⅱ-1・Ⅱ-2・Ⅲ-Ⅳ 縄文時代遺構・縄文土器1・2・縄文土器他・写真1版	1997
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書32 池之頭遺跡 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33 今里道跡 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書34 小倉畑道跡 一般国道10号給良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書35 高井田道跡 一般国道10号加治木バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書36 九井田道跡・供養之元道跡・高原利田道跡 東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書37 最良之元・飯・安城・宮野崎・小松・高市野原・東下ノ原道跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書38 計志加里道跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書39 鍛冶川馬場道跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書40 胡弓寺跡・飯高道跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書41 上ノ原道跡 国分上野原テラノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書42 松尾城跡 主要地方道宮之崎・高尾野線道路改良工事 補修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書43 出水平道跡 一般地方道志那・宮ヶ原・福山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書44 深田道跡 特定交通安全施設整備事業一般地方道伊集院・日吉線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書45 本駒内道跡 鹿児島県立10号高等学校校舎増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
曾於郡新御所町教育委員会	
財部町埋蔵文化財発掘調査報告書6 田平下道跡 宮崎県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2002
沖縄県	
沖縄県立埋蔵文化財センター	
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集 首里城跡 下之御殿・用物御殿・造見門跡・親親門跡・唐館門跡・不見門跡発掘調査報告書	2001
玉城村教育委員会	
糸数城跡整備実施計画報告書	
玉城村文化財調査報告書 第1集 国指定史跡 糸数城跡発掘調査報告書Ⅰ	1991
玉城村文化財調査報告書 第2集 玉城村の道跡 詳細分布調査報告書	1995
佐敷町教育委員会	
佐敷町文化財調査報告書 第3集 佐敷下代原道跡 佐敷小学校増改築工事に伴う緊急発掘調査報告書	2001
大里村教育委員会	
大里村文化財調査報告書 第3集 大里城跡 都市公園計画に係る緊急確認発掘調査報告書(Ⅰ)	1998
南風原町教育委員会	
南風原町文化財調査報告書 第3集 南風原陸軍病院壕跡Ⅰ 沖縄県南風原町所在南風原陸軍病院壕跡の考古学的調査報告書Ⅰ	2000
埋蔵文化財保護対策九州地区協議会	
「九州地区埋蔵文化財発掘調査基幹」検討結果報告書	
個人より寄附 北條 朝彦様より	
門山陸奥参考地・入道塚陸奥参考地調査報告 平成12年度 陸奥関係調査報告	2000

2. 定期刊行物・図録等

北海道	アイヌ文化振興・研究推進機構	
	アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告 第2号	2003
岩手県	物質文化研究所 一戸刈舎	
	実測図のすすめー「もの」から学術資料へー	2003
宮城県	仙台市博物館	
	市史 せんだい Vol.12/2002.7 仙台の燃料事情	2002
福島県	郡山市教育委員会	
	第8回市内道路発掘調査成果展 郡山の古墳時代	2002
茨城県	筑波大学 先史学・考古学研究推進委員会	
	筑波大学先史学・考古学研究 第13号	2002
群馬県	群馬県埋蔵文化財調査事業団	
	研究紀要 2002.8 20	2002
埼玉県	大崎近習	
	明治の気竹ー東京・群馬における興業と日記ー	2001
	岡部町教育委員会	
	古代の役所ー武蔵国秩父郡家の発掘調査からー	2002
千葉県	国立歴史民俗博物館	
	黙阿弥 助興する歴史学 城郭	2002
	国立歴史民俗博物館研究年報	2002
東京都	文化庁	
	登録有形文化財建造物目録	2002
	2002 発掘された日本列島 新発見考古道報	2002
	文化庁月報 No.403 平成14年4月号 文化を大切にする社会の構築に向けて	2002
	文化庁月報 No.404 平成14年5月号 国際文化交流の推進	2002
	文化庁月報 No.405 平成14年6月号 全国発掘調査最新情報	2002
	文化庁月報 No.406 平成14年7月号	2002
	文化庁月報 No.407 平成14年8月号 著作権法の改正について	2002
	文化庁月報 No.408 平成14年9月号 住民参加による文化財建造物の活用	2002
	文化庁月報 No.409 平成14年10月号	2002
	文化庁月報 No.410 平成14年11月号	2002
	文化庁月報 No.411 平成14年12月号	2002
	文化庁月報 No.412 平成15年1月号	2003
	文化庁月報 No.413 平成15年2月号	2003
	文化庁月報 No.414 平成15年3月号 最近の国語をめぐる動向について	2003
	月刊文化財 3 平成14年	2002
	月刊文化財 4 平成14年	2002
	月刊文化財 5 平成14年	2002
	月刊文化財 6 平成14年	2002
	月刊文化財 7 平成14年	2002
	月刊文化財 8 平成14年	2002
	月刊文化財 9 平成14年	2002
	月刊文化財 10 平成14年	2002
	月刊文化財 11 平成14年	2002
	月刊文化財 12 平成14年	2002
	月刊文化財 1 平成15年	2003
	月刊文化財 2 平成15年	2003

朝日新聞通信情報センター			
文化財	発掘出土情報	新潟県上越市吹上遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	岐阜県清見村 上野野遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	2002.6 千葉県船橋市印内台道路群	2002
文化財	発掘出土情報	2002.7 石川県金沢市中屋サワ遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	群馬県赤城村宮田湯島原遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	2002.9 群馬県子持村 宇津野・有願遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	2002.10 栃木県大田原市 長者ヶ平遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	2002.11 石川県津幡町 加茂遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	秋田県森吉町 漆下遺跡	2002
文化財	発掘出土情報	長崎県石田町 原の辻遺跡	2003
文化財	発掘出土情報	東京都三鷹市丸山A遺跡	2003
文化財	発掘出土情報	片山島越5号墓	2003
文化財	発掘出土情報	熊沢河原跡	2003
堀田龍也・高田道二			
		博物館をみんなの教室にするために「学校と博物館が一緒に倒る「総合的な学習の時間」	2002
東洋陶磁学会			
		東洋陶磁学会三十周年記念 東洋陶磁史—その研究の現在—	2002
小学館			
		考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 上巻Ⅱ	2002
日本ユネスコ協会連盟			
		世界遺産年報2003 特集 ベトナム	2002
神奈川県			
		専修大学文学部考古学研究室	
		御崎長瀬Ⅴ・27・35号墳 御崎長瀬Ⅴ遺跡2	2003
富山県			
		御富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	
		埋蔵文化財調査概要—平成13年度—	2002
		紀要 第5号 富山考古学研究会	2002
		富山県小杉町中山中道跡発掘調査レポート 平成13年度富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座	2002
石川県			
		金沢市	
		市史 かなざわ 第8号 2002.3	2002
		金沢市史編纂委員会	
		金沢市史 資料編7 近世5 商工業と町人	2002
		金沢市史 資料編9 近世7 農政と村方	2002
静岡県			
		浜松市教育委員会	
		掛之上遺跡—見えてきた昔の掛之上—	2002
		掛之上遺跡Ⅲ・Ⅳ—ついでにⅢ編—	2002
		掛之上遺跡Ⅲ・Ⅳ—本文編—	2002
		掛之上遺跡Ⅴ・Ⅵ—ついでにⅤ編—	2002
		掛之上遺跡Ⅴ・Ⅵ—本文編—	2002
愛知県			
		南山大学人類学博物館	
		寄附資料目録1 人類学博物館紀要 第21号	2003
静岡県			
		静岡県埋蔵文化財センター	
		平成13年度 浜州市埋蔵文化財センター年報	2002
		江戸時代の瀬戸空	2002
豊田県			
		豊田市郷土資料館	
		豊田市郷土資料館だよりNo.43	2003
三重県			
		四日市市教育委員会	
		四日市市文化財保護年報13—平成13年度—	2002

鈴鹿市教育委員会		
鈴鹿市考古博物館年報 第3号		2002
鈴鹿市考古博物館		
鋼の一万年 造鉄の歴史		2001
特別展 耳飾り		2001
三重のおかしな歴史		2002
滋賀県 滋賀県教育委員会		
研究紀要 第8号		2002
滋賀県安土城跡調査研究所年報2001年度		2002
京都府 京都市歴史資料館		
京都市歴史資料館年報 平成14年度事業計画・平成13年度事業報告		2002
京都府向日市		
再現・長岡京 京都府向日市		2001
御京府埋蔵文化財調査研究センター		
京都府埋蔵文化財情報 第83号		2002
京都府埋蔵文化財情報 第84号		2002
京都府埋蔵文化財情報 第85号		2002
京都府埋蔵文化財情報 第86号		2002
長岡京市埋蔵文化財センター		
長岡京市埋蔵文化財センター年報 12年度		2002
同志社大学歴史資料館		
同志社大学歴史資料館館報		2002
同志社大学歴史資料館館報 第5号 (2001年度)		2002
大阪府 豊中市教育委員会		
文化財ニュース 豊中No.29		2001
文化財ニュース 豊中No.30		2002
高槻市教育委員会		
高槻市文化財年報 12年度		2002
貝塚市教育委員会		
近木郷を考古学する一役所・寺・街道一		2002
貝塚市の指定文化財一平成9年～13年度指定一		2002
ト平窟了摩と貝塚寺内 願泉寺初代ト平窟了摩没後400周年追善記念		2003
兵庫県 姫路市教育委員会		
T S U B O H O R I 平成12年度 (2000) 姫路市埋蔵文化財調査略報		2002
尼崎市教育委員会		
尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(2) 大物遺跡第1次調査概要 その1		2001
尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(3) 大物遺跡第1次調査概要 その2		2002
三原郡広域事務組合		
三原郡埋蔵文化財発掘調査年報 I 1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査		2001
奈良県 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター		
埋蔵文化財ニュース105 出土金属製品遺物の保存処理一応急処理から保存処理まで一		2001
埋蔵文化財ニュース106 奈良三彩関係文獻目録		2002
埋蔵文化財ニュース107 2000年度 埋蔵文化財関係統計資料		2002
埋蔵文化財ニュース108 環境考古学2 小・中県は乳類竹格図譜		2002
全国史跡整備市町村協議会事務局		
2002 全史協会報 平成13年度 全国史跡整備市町村協議会		2002
純元興寺文化財研究所		
元興寺文化財研究 No.81 2002. 6		2002

奈良大学文学部文化財学科	
文化財学報 第20集	2002
奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター	
埋蔵文化財ニュース109 唐・三彩関係文獻目録	2002
埋蔵文化財ニュース110 道跡学をめざした道跡の保存と活用に関する研究集会(Ⅱ)	2002
奈良大学 考古学研究室	
平城京左京四条三坊十一坪 発掘調査報告書 平城京跡および下附縄文道跡の調査	1991
天理大学文学部考古学研究室	
考古学と民族学とのふれあいー天理大学考古学専攻の紹介ー	2001
古事 天理大学考古学研究室紀要第6冊	2002
奈良県立橿原考古学研究所	
青陵 第107号	2001
青陵 第109号	
橿原考古学研究所年報26 平成11年度(1999)	2000
橿原考古学研究所年報27 平成12年度(2000)	2001
橿原考古学研究所紀要 考古学論改 第24冊	2001
大和の考古学100年	2002
奈良県立大和古代文化研究協会	
研究紀要 第7集	2002
独立行政法人文化財研究所	
A Oの記憶	2002
和歌山県 御和歌山市文化体育振興事業団	
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7ー平成10年度(1998年度)・11年度(1999年度)ー	2002
鳥取県 鳥取県教育委員会	
志津見ダム地内の道跡 かんどの流れ総集編	2002
石見銀山道跡調査ノートⅠ	2002
鳥取県教育庁埋蔵文化財調査センター年報X	2002
増補改訂 鳥取県道跡地図Ⅱ(石見編)	2002
鳥取県立市教育文化振興事業団	
埋蔵文化財調査年報Ⅷ 財団法人松江市教育文化振興事業団	2002
岡山県 岡山県古代吉備文化財センター	
所報 吉備 第32号	2002
岡山市教育委員会	
木下 芸 さしもの	2002
岡山市埋蔵文化財センター年報Ⅰ	2002
倉敷埋蔵文化財センター	
倉敷埋蔵文化財センター年報8ー平成12年度ー	2002
広島県 広島大学大学院文学研究科 帝釈峠道跡群発掘調査室	
広島大学大学院文学研究科 帝釈峠道跡群発掘調査室年報Ⅲ	2002
山口県 下関市立考古博物館	
研究紀要 第6号	2002
下関市立考古博物館年報7 平成13年度	2002
瀬戸内海を介した交流 弥生時代の北部九州と西国	2002
山口県教育委員会	
山口市埋蔵文化財年報Ⅰー平成12(2000)年度ー	2002

山口大学埋蔵文化財資料館		
山口大学橋内遺跡調査研究年報ⅩⅣ		2000
学内発掘20年の歩み		1998
山口大学埋蔵文化財資料館収蔵考古資料 出土品にみる山口県の歴史		2001
山口県埋蔵文化財センター		
山口県埋蔵文化財センター年報－平成13年度－陶器 第15号		2002
愛媛県 御愛媛県埋蔵文化財調査センター		
愛比完 平成12年度年報		2001
愛比完 平成13年度年報		2002
まいぶんえひめ No.29		2002
御愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要 紀要愛媛 第2号		2001
松山市考古館		
平成13年度特別展 伊豫の鏡 鏡に映し出された古代伊豫		2002
福岡県 福岡県教育委員会		
福岡県埋蔵文化財年報－平成12年度－		2002
九州北部三県 姉妹道跡		2001
九州北部三県 姉妹道跡締結記念 三道跡交流こどもフォーラム記録集		2002
福岡市教育委員会		
福岡市埋蔵文化財センター年報 第20号 平成12(2000)年度		2002
福岡市埋蔵文化財センター年報 第21号 平成13(2001)年度		2003
福岡市埋蔵文化財年報 Vol.15 平成12(2000)年度版		2002
熊本県 熊本県文化振興財団 埋蔵文化財調査室		
研究紀要－第16号－		2002
埋蔵文化財調査年報18 平成12年度		2002
北九州市立考古博物館		
研究紀要 第8号		2002
北九州市立考古博物館年報－平成13年度－		2002
北九州市立考古博物館年報－平成12年度－		2001
七隈史学会		
七隈史学 第4号		2003
行橋市歴史資料館・行橋市教育委員会		
平成14年度 特別展 彦州とその時代－在郷町ゆくはし－		2002
豊前市教育委員会		
豊前市の文化財 歴史と浪漫の散歩道		2002
求道館資料館		
占田遺跡展 くはて森の美術館		2001
筑紫野市歴史博物館 ふるさと館 ちくしの郷土100年展		2002
筑紫野市歴史博物館ふるさと館筑紫野 年報2(平成12年度)		2002
筑紫野市歴史博物館 ふるさと館ちくしの年報3(平成13年度)		2002
春日市教育委員会		
春日市埋蔵文化財年報9 平成12年度		2002
大野城市教育委員会		
大野城市の文化財 第34集		2002
宗像市教育委員会		
むなかたの文化財－平成12・13年度文化財調査概要－		2003

西海道古代官衙研究会		
西海道古代官衙研究会資料集 皇后宮職本簡一福岡市F月限C道路標出土一		2002
第5回 西海道古代官衙研究会資料集		2002
太宰府市教育委員会		
太宰府市の文化財 第57集 太宰府条坊跡Ⅷ (C D)		2001
太宰府市の文化財 第59集 太宰府条坊跡Ⅸ		2002
太宰府市の文化財 第60集 太宰府条坊跡Ⅹ		2002
太宰府市の文化財 第61集 太宰府条坊跡Ⅺ		2002
太宰府市の文化財 第62集 太宰府・佐野地区道跡群Ⅼ		2002
太宰府市の文化財 第63集 太宰府・佐野地区道跡群Ⅽ		2002
太宰府市の文化財 第64集 奥瀬道跡		2002
太宰府市文化ふれあい館		
太宰府市文化ふれあい館年報 創刊号 平成8 (1996) 年度		1998
太宰府市文化ふれあい館年報 第2号 平成9 (1997) 年度		1999
太宰府市文化ふれあい館年報 第3号 平成10 (1998) 年度		2000
太宰府市文化ふれあい館年報 第4号 平成11 (1999) 年度		2001
太宰府市文化ふれあい館年報 第5号 平成12 (2000) 年度		2001
伊賀歴史資料館		
王のアクセサリー		2001
伊賀国三郡・三雲道跡展		2001
高田町教育委員会		
高田町の文化財		1992
佐賀県 佐賀県教育庁文化財課		
佐賀県文化財年報5 1998年度		2000
佐賀県文化財年報6 1999年度		2001
熊本県 熊本県市史編纂委員会		
市史研究 くまもと 第13号		2002
熊本県立 熊本博物館		
熊本博物館年報 No.14 2002		2002
八代市立博物館未来の郷ミュージアム		
天草・島原の乱 徳川幕府を震撼させた1201		2002



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報14

2003

発行日

平成16年3月31日

編集・発行

大分市教育委員会文化財室

大分市荷揚町2番31号

〒870-0025 (097)534-6111

印刷

いづみ印刷㈱

大分市大字下郡字丁畑3119-1
